K2A-23
Z32-B88

大正十二年十二月六日印刷納本　大正十二年一月一日發行

金の星

第五卷　正月号　第一号

国立国会
8. 3. 26
図書館

梁田貞先生作曲

（加藤まさを先生作譜）

新作樂譜 歌人形

◇四六二倍大判
◇優雅なる裝幀

定價各册金五十錢 送料金八錢

1、蝶の夢。芒の穗。既刊
2、たんぽぽ。ザボン。既刊
3、椰子の果。家鴨の喙。近刊
4、花束。さくらんぼう。近刊

扨情的作曲家として、また新興童謠の先驅者として現代の樂壇に隱れなき梁田先生が、加藤まさを先生の童謠にうるはしい旋律を附したものが、この「歌人形」である。

情緒の色の似通へる點に於て、またその藝術的態度の相通する點に於て、この作詩者とこの作曲家との提携は、至極當を得たるものと云はねばならない。

この美しい「歌人形」は、うるほひのない現代の樂壇に稀に見る珠玉である。斯うした至純な歌を永い間渴望してゐた方々に歌へてお薦めする。

● 童謠集 合歡の搖籃 加藤まさを先生著 定價金貳圓五拾錢 送料金拾二錢

● 抒情小詩集 涙壺 加藤まさを先生著 定價金貳圓 送料金拾錢

● 新童話傑作選集 第一輯 讀賣新聞社編 定價金貳圓五拾錢 送料金拾二錢

東京市大傳馬町二丁目 日本橋區 内田老鶴圃 振替東京壹貳壹四壹貳壹 電話浪花壹貳壹四六番

金の星童謡曲譜集

本居長世先生作曲

野口雨情先生作謡
岡本歸一先生装幀

◇菊判型上等和紙◇
◇表紙木版七度刷◇
◇本文色刷十四頁◇
◇定價各冊六拾錢◇
（送料四錢）

人買ひ船

再版 第一輯

内容：人買船、青い目の人形、九官鳥、日傘、歸る燕、十五夜お月さん、

一つお星さん

再版 第二輯

内容：一つお星さん、七つの子、鵺と雀、鶏さん、象の鼻、四丁目の犬、

青い空

新刊 第三輯

内容：青い空、つばめ、でん〳〵虫、雁來紅、呼子鳥、雀の酒盛り、

發行所
東京下谷上野公園前三橋榜
金の星出版部
振替東京六一七〇一番
電話下谷六八二三番

大取書店
東京市外下目黒四七八
白眉出版社
振替東京五四五九八番

十萬の金の星讀者を熱狂せしめた名作

沖野岩三郎先生作

長篇物語 父戀し

◇定價金壹圓◇ 送料金拾錢 四六判箱入美本

沖野先生の『父戀し』ほどあらゆる方面から熱狂的歡迎を受けた讀物はないといつていゝでせう。ある牧師はこれを世界の名作「小公子」や「家なき子」などに比較して、是非愛する少年少女達に讀ませねばならぬと主張しました。少年少女達は、父を戀しがつて尋ね歩く可憐な伊吹子と明治の二人に涙を流しながらも、その間から美しい同情と忍從の美德を養はれるでありませう。

『金の星』は過去の一年間、この教訓と興味とに滿ちた物語りを掲載して來ました。しかし、殘念ながらまだ物語りの全部終らない内に豫定の月日が經つてしまつたのです。誌面の都合上この十二月號を最後として、どうしても一と先づ終へなければならない次第となりました。甚だ殘念ですが止むを得ません。しかし、熱狂してをられる愛讀者の方々に必ず非常な失望を感じさせる事でありませう。それを思ふと吾々は默してゐる事が出來ません。それで、吾が「金の星出版部」は此の際特に沖野先生にお願ひして後篇として殘りを全部書いていたゞき、それを添へて一册の美しい本にまとめ、此處に發賣いたすことゝなりました。可憐な伊吹子と明治は、あの後どうなつたでせうか。お父さんに遇へたでせうか。それとも、たうとう遇はれずじまひになつてしまつたでせうか。それ等はすべて後篇によつて明らかになります。

東京下谷上野公園前 金の星出版部 振替東京六一七〇一番 電話下谷六八二三番

一番面白い
ニッポノホン
童謡レコード

ツキトガン、キンギヨ、
ユキ、
タモザハカハ、ウマ、ゴシ
ヨカライソギ、四十四五
（澄宮殿下御作）

青い眼のお人形
（お山の大將
呼子鳥、雪の夜
白まんと、鳥の手紙
（かなりや、雨
りす〳〵小りす
犬の芝居、山のあなたを
（舌切雀、鶯の小屋
ねんねのお鳩
（十五夜お月さん、鶏さん
四丁目の犬、人買船、つばめ
（お山の鳥、九官鳥、めえ〳〵小山
羊、ダリヤ、歸る雁

株式會社 日本蓄音器商會

最新刊

童謡の作り方

葛原齒先生著

四六判 總布製 二六〇頁 全一冊

定價金壹圓六拾錢
送料八錢

我國に於ける近時の童謡流行は實に眼ざましい。畏くも竹の園生の王子殿下を始め奉り、全國小學兒童の手になる無邪氣な小詩篇は新聞雜誌に日々可憐な花を花咲かして居る。此の現象は由來自己表現に拙劣であつた我國民をして、子供の時代から自己の感情發表に習熟せしむる意味に於て、教育上尠からぬ價値を有するものと見るのが至當であらう。併しながら現在の如く童謡の創作が一般に流行的色彩に蔽はれて居る間は往々にして玉石混交、或者は之が爲に却つて兒童の本性を損ふやうな場合もないとは限らぬ。故に童謡の作家或は兒童の創作指導に任ずる者は先づ第一に童謡其のものゝ本質使命に對する理解と技巧上の知識の概要を知悉して置く必要がある。本書は多年の間兒童の心持ちに最も深き親みを有つ童謡作家として、文壇と教育界兩方面から推稱せられて居る葛原齒先生が、飽く迄兒童本位に徹底した立場から、童謡の精神とその作法を一々實例を擧げ極めて懇切平易に講述せられたものであつて、童謡作家或は指導者の參考書として適切なるは勿論、兒童の創作手引としても又極めて好適である。

東京市京橋區 銀座二ノ五
培風館
振替 東京七一四七
電話 三六三三・三六三三

目次

私の初夢（表紙・原色版）……岡本歸一
お山爺さん（口繪・三色版）
貝遊び（曲譜・童謡）……一……本居長世 野口雨情
驢馬と釣鐘（童話）……四……楠山正雄
盗んだ狸（童ばなし）……一四……舟橋重一
山のお爺さん（童話）……一八……豐島與志雄
敵の打てない熊王丸（史譚）……二五……霜田史光
お化けの喧嘩（童話）……三四……田中實
李如松のはなし（童話）……三六……沖野岩三郎
香爐の行方（長篇童話）……四三……森川一朗
こほろぎ、いね、（幼年詩）……四七……倉持精一 中尾ぼよ子
太郎若、次郎若（傳說）……四八……藤澤衛彦
雁が來た（童謡）……五四……若山牧水
極樂の大將（童話）……五六……小島政二郎
順禮の願ひ（童話）……六三……水谷まさる
水滸傳（長篇童話）……七〇……宮島資夫
辨慶の鐘（童謡）……八四……野口雨情
馬（童謡）……八六……野口雨情
こほろぎ（幼年詩）……八八……若山牧水
夕立ちの夜（踊り方）……八八……編輯部選
稔さん（自由畫）……八九……山本鼎選
通信……九六
讀者だより……一〇一
（新年特別附錄）
お伽影畫双六……岡本歸一畫

お山爺さん（口演童話）

岡本歸一畫

子供たちは澤山に枯枝や落葉を拾つて來て、火をつけました　それから歌をうたひながら、煙の中をぢつと横目で見つめてゐました、

やがて、いつもの通り山の方から、さつと風が吹いて來て濃い煙がゆらゆらと横倒しに動く途端、アハハハ……といふ高笑ひと一しよにお爺さんの姿がはつきり煙の中に現れました

（お山の爺さんの二〇頁を讀んでください）

▼抒情畫家の最高權威、挿畫壇のオーソリティたる虹兒先生の新著▲

蕗谷虹兒先生新著

小曲畫集 銀の吹雪

▼挿畫四十枚と哀艶限りなき小曲詩篇數十を加へたり
▼二百餘頁の最も美しい畫集とも小曲とも謂ふべき好著!!!

袖珍形箱入天金
顔美上製
定價金九十錢
送料金十二錢

懸賞募集

◎この畫は誰れが書いた畫で有りますか、當てゝ下さい。回答は官製ハガキに◎この廣告を見た雜誌と住所姓名を明記して交蘭社宛に送つて下さい。五十名に最も美しい譜入りの藝術繪はがきを差上げます、〆切は來る一月十五日であります。早く當てゝ下さい。

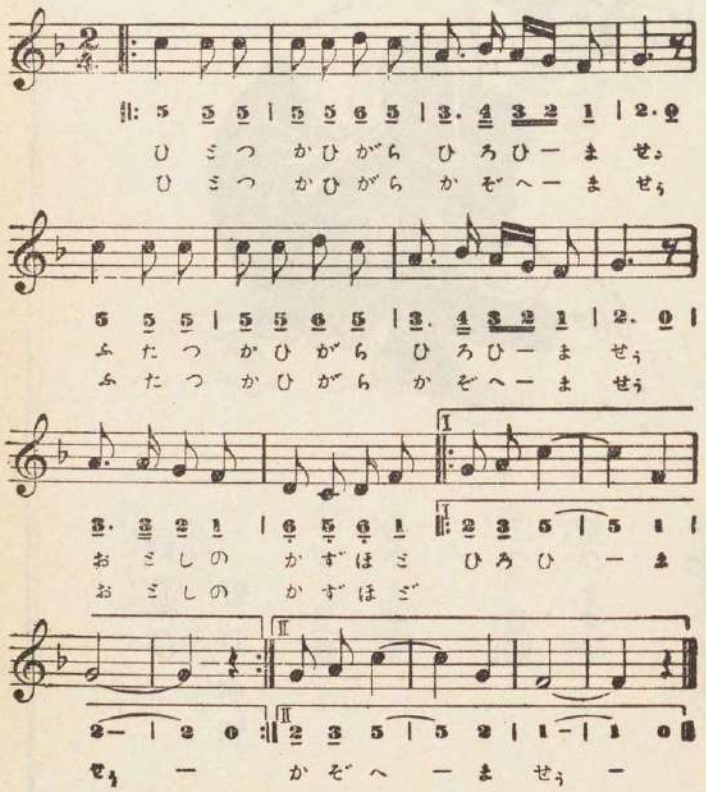
野口雨情先生著 童謡集 **十五夜お月さん**
文部省台覽 認定
定價金一圓三十錢 送十五錢

野口雨情先生著 **童謡作法問答**
賣行益々多きを加ふ
定價金一圓 送十三錢

交蘭社
東京振替市神田區仲猿樂町二十七
京口座東京四〇七九

貝遊び

本居長世作曲



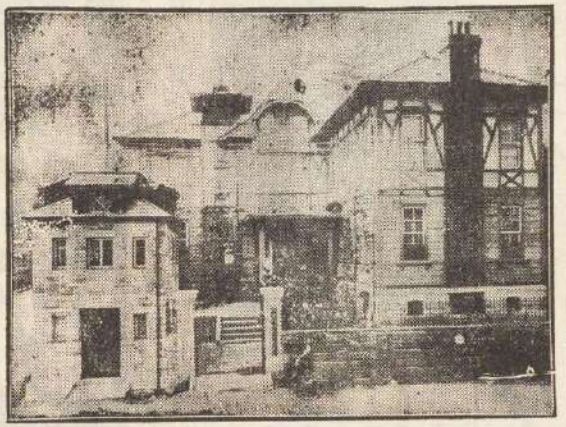
天下の青年は何故に爭ふて

大日本國民中學會に入會する乎

■講義が新いから
■會費が廉いから
■指導が良いから
■學制が正いから
■基礎が固いから
■講師が善いから
■卒業が早いから
■成功が慥だから

會長 尾崎行雄

學監顧問
文學博士 遠藤隆吉
理學博士 内藤繁雄
新渡戸博士
山田三郎博士
井上博士
浮田博士
岡田前文部大臣



一人前の男となるには

どうしても中等教育を受けなければいけない。中等教育の學力のない者はどうしても生存競爭の勝利者たることは六ケ敷しい。併し家庭の事情で中學に入れぬ者も決して失望するには及ばない、中學校に行かずに中學卒業同樣の學問をする方法がチャンと出來てゐる。それは創立以來二十年の古い經驗のある講義錄で有名な大日本國民中學會の通信教授法である。

東京駿河臺（お茶の水電車通り）
大日本國民中學會
振替東京四二〇〇 電話 神田三〇〇二 神田三〇〇三 神田三〇〇四

◉創立以來二十一年記念大特典提供
目下新學期開講 入會の絶好機

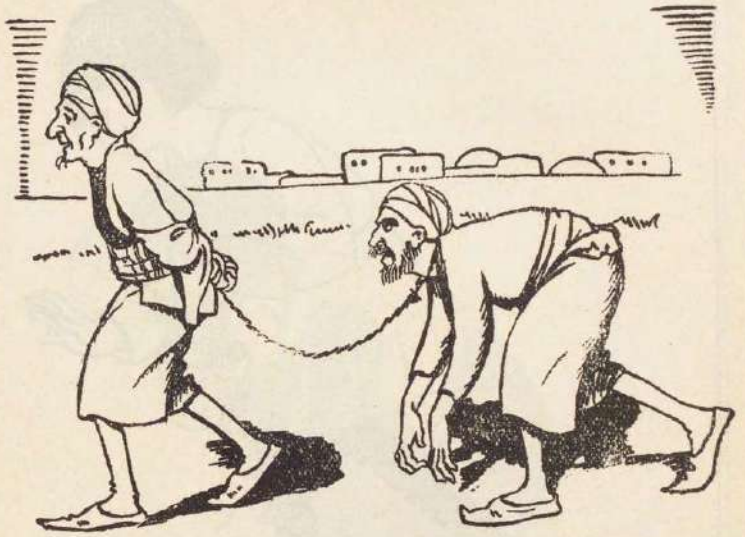
■講義錄見本つき規則書無料進呈

貝遊び

野口雨情

一つ　貝殻
拾ひませう
二つ　貝殻
拾ひませう
お歳の　數ほど

拾ひませう
一つ　貝殻
數へませう
二つ　貝殻
數へませう
お歳の　數ほど
數へませう



驢馬と釣鐘

楠山正雄

驢馬をぬすまれた話

一

これはアラビヤのお話です。

お百姓のおぢいさんが、一匹の驢馬に端綱をつけて、往來のまん中を引いて通りました。のどかな春の晝でした。ほか〳〵と溫な日を大きい口の中に一ぱい吸ひ込みながら、おぢいさんはあくびをしい〳〵歩いて行きました。そのあとから驢馬が泣蟲のおばあさんのやうな眼をしよぼ〳〵させながら、ほつくり〳〵ついて行きました。

そこへいつどこから來たかずるさうな眼付をした男が二人出て來て、往來の隅でこそこそ談をはじめました。

ちやうど町には人通りがとだえてゐました。

『おいあのおぢいさんの驢馬をとつてやらう。』と一人がいひました。

『うん、よからう。だがどうして取るい。』ともう一人がふしぎさうな眼をしました。

『まあ、ついて來い。おれがをしへてやるから。』

かういつて一人がずん〳〵先に立つて歩き出しました。もう一人もそれなりだまつてついて行きました。

先に立つて行つた男は、そつとおぢいさんのすきを見て驢馬のそばへよると、すばやく首にかゝつてゐた綱をはづしてあとからついて來た男に驢馬をわたしました。そして驢馬の代りに自分が綱を首にかけて何にも知らないおぢいさんのあとからのこ〳〵歩いてついて行きました。その間にもう一人の男は驢馬をむりやり引捉へるやうにひいて、さつさと逃げ出して行きました。

しばらくしてもういよ〳〵驢馬をひいた男のかげも形も往來から見えなくなると、驢馬に化けた男はだしぬけにひゝんと啼いて、そのまゝぴつたり足を止めてしまひました。お百姓は急に驢馬が動かなくなつたのでびつくりして、しい、しい、といひながらぐい〳〵綱を引きました。けれども驢馬は根が生えたやうにがんばつて一足だつて動かうとはしません。ふしぎに思つてお百姓がふり返つて見ると、大きな男が往來に踏みはだかつたまゝ赤くなつておぢいさんと綱引きをやつてゐるのです。

『こら、お前は誰だあ。』とおぢいさんはおどろいて頓狂聲を立てました。

すると男はそれなり地びたにぺつたり膝をついて涙をほろほろこぼしはじめました。

『何だ、泣いたつて分らない。おれの驢馬をどうした。』

かういふとその男はよけい涙をこぼしながら、

『じつはわたしがそのあなたの驢馬ですよ。』といひました。

『何を馬鹿なことをいへ。さあ早く驢馬をかへせ。』とおぢいさんはよけいおこつてわめき立てました。

『まあ待つて下さい。それにはわけがあります。一通りきいて下さい。』

かういつて男は一層しをらしく聲を落しました。

『一體わたしは相應な身分の家に生れたものですが、生れつきなまけもので、その上、何よりもお酒が好きで、醉ふとらんぼうをする惡い癖がありました。それを氣の優しいわたし

の母親は始終心配して、どうかして改心して神様の前できつばり禁酒を誓つてくれといひましたが、わたしは一向聞き入れようともしませんでした。あまりしつこくそれをいはれるのでたうとう或日、わたしは酔つてゐた上狂癲まぎれに棒をふり上げて母親を打ちました。すると母親はひい〳〵泣きながら、神様どうぞこのわるものを驢馬に變へてしまつて下さいといひますと、何と神様といふものは恐ろしいことをなさるぢやありませんか。見る〳〵わたしの體中に毛がむくむく生えて腰が曲つて兩手を地びたについて四つん這ひになると、その先から堅い爪が生へました。そして兩方の耳が急に長く尖り出して、あゝ大變といはうとすると、もうヒヒンヒヽンとしか聲が出ないではありませんか。母親はたゞもうびつくりして氣味をわるがつてわたしをすぐ下男の手にわたしました。下男はわたしを市場へ引いて行つて、わたしを賣つて儲けたお金でお酒を飲みました。わたしはといふと、市場からあなたの所へ買はれて行つて、今日まで御奉公を申上げたわけです。』

『ぢやあそれがどうしてまたもとの人間になつたのだ。』とお百姓は思はず釣り込まれてたづねました。

『さあ、そこです。そこが親子の人情のありがたいところで、あの時はあれほどわたしを氣味わるがつて追出した母親も、日が經つにつれてわたしを思出すとがまんができなくなつてけふはいよ〳〵神様に向つて、もうどうぞあれの罪をゆるしてもとの人間のすがたにおかへし下さいましと一生けんめいお祈をしますと、神様もかはいさうに思召して、さつそくこの通り元の人間に生れかはらせて下さいました。もう一度人間のなかまにはひれる嬉しさにつけても、驢馬であつた間、あなたのお世話になつた御恩はけつして忘れません。』

男はこれだけ話して、またほろ〳〵涙をこぼしました。

するとおぢいさんはよけいに涙をほろ〳〵こぼしながら、深い溜息をついて、

『なるほど神様のお力もお慈悲も宏大なものだ。いかに知らないことゝはいへ、じつに勿體ないすまないことをしました同じ人間同士を馬にして背中にのつたり、重い荷物をはこばせたりむごく、追ひ使つたといふのは。どうぞわたしの身の上に神様のお罰が下らなければいゝが。もうさう思ふとわたしは心配で心配でたまらなくなつて來た。さあ、お前さんはどこへでも自由に行つて下さい。わたしはさつそくかへつて神様にお願ひ申さなければならない。』

かういつておぢいさんはさも大罪でも犯した人のやうに首をうなだれてしを〳〵とうちのはうへかへつて行きました。

そのあとで驢馬に化けた男はどんな顔をしたでせう。

二

さてほんやりした顔をしておぢいさんがうちへかへると、おばあさんはおどろきました。けさつれて出て行つた管の驢馬はなしで、さびしさうにふところ手をしてゐるので、よけいおどろきました。

『どうしたのですえ、おぢいさん。』

『どうしたも何もない、とんだ話だ。』

おぢいさんはかういつて、また溜息をつきながらけふの出來事を話しました。

一つ一つ話のきれるたんびに、おばあさんは眼をまるくして、おや〳〵まあといひました。

『まあ人間の仲間を驢馬にして使なんて、どうかひどいお罰をうけなければいゝが。』

おばあさんは一しよになつてしをれかへつて、それからは毎日神様にお供物を上げるやらお燈明を上げるやら、ひたすらおゆるしを願つてゐました。

でもかんじん商賣道具の驢馬がなくなつて、おぢいさんは

運送屋の商賣に出ることができないので毎日ぶら〳〵手持無沙汰にくらしてゐました。からだはひまな代り、御飯を買ふお金がとれないので、だん〳〵おなかが空いて來ました。

『おぢいさん、こんなことをいつまでしてゐてもつまらないでせう。やはり驢馬を一匹買つて商賣に出て下さい。』

かうおばあさんがいふと、おぢいさんも今更眼がさめたやうに、それからやつと驢馬を買ふお金をよそから借りて、ぶらぶら市場へ見に行きました。

すると市場に着くと、そこに賣物に出てゐた一匹の驢馬が耳のはたでひゝんと嘶きました。

その聲に何だか聞きおぼえがあるので、はてなと思つておぢいさんがふりかへつて見ると、まぎれもないつい先日まで飼つてゐた驢馬でした。

ところがこの驢馬のすがたを見ると、何と思つたか、おぢいさんはいきなりはら〳〵と涙をながしました。

そして、驢馬のそばに寄つて、耳もとに口をつけて囁きました。

『やれ〳〵かはいさうに、お前さんまたお酒に醉つて、おつ

かさんを打ちなすつたと見えるね。だがわたしはもうお前さんは買はないよ。いつ神樣のおゆるしが出て、また人間にならないとも限らないからね。』

かうおぢいさんはいつて、すた〳〵出て行つてしまひました。

釣鐘をぬすまれた話

一

次は日本のお話です。

攝津の國の田舍た大きな古寺がありました。べつに名高いお寺といふのでもありませんでしたが、たゞ一つそのお寺に不相應に大きな釣鐘がむかしからあつて、何しろ鑄潰しても、地金で何千斤あるかわからない、立派なものだといふので、お寺でもだいじな寶物にしてゐました。

すると或年の秋のくれ方のことでした。もう八十を越したかと思ふやうなよぼ〳〵の坊さんが竹の杖にすがつてこのお寺にやつて來ました。

ぼろ〳〵に破れた古い衣を寒さうに着て、どこから來たのかしらないがよくも山道を上つて來られたと思ふほどひどく腰が曲つて、おまけに病氣ででもあると見えて、せいせい息を切りながら舌がもつれてろく〳〵口も利けないくらゐに苦しさうな樣子をしてゐました。そのいふことをきくとなんでも西の國から京都へ上る途中この山にかゝると、長い間の旅づかれと、それに寒さのため病氣がおこつて腰が痛んで歩けなくなつた、お寺の緣の下にでも二三日休ませてもらひたいといふのでした。

お寺の坊さんも厄介な乞食坊主だとは思ひましたが、同じ

出家同士のことですし、佛樣の慈悲のをしへを守るお寺のことでことわることもできないので、

『それはお氣の毒なことですね。でも緣の下といつても冷てよけい體を惡くするばかりだ。では幸ひ鐘撞堂は屋根も深いし、中には番人の坐れるやうに莚や藁がしいてあるから、あすこなら雨もふり込まないし、夜も冷える氣づかひはない。』

かういふと乞食の坊さんは、さもうれしさうにたび〳〵おじぎをして、

『さういふことに願へればこの上はございません。しかしたださうやつて置いて頂くのもすまない氣がいたしますから、ついでに鐘撞堂の番をいたしませう。どうぞわたしに鐘を撞く役をさせて下さい。歩きますのは不便でも手足だけはどうにか自由に働きます。』

とさも氣の毒さうにもじ〳〵しながらいひました。

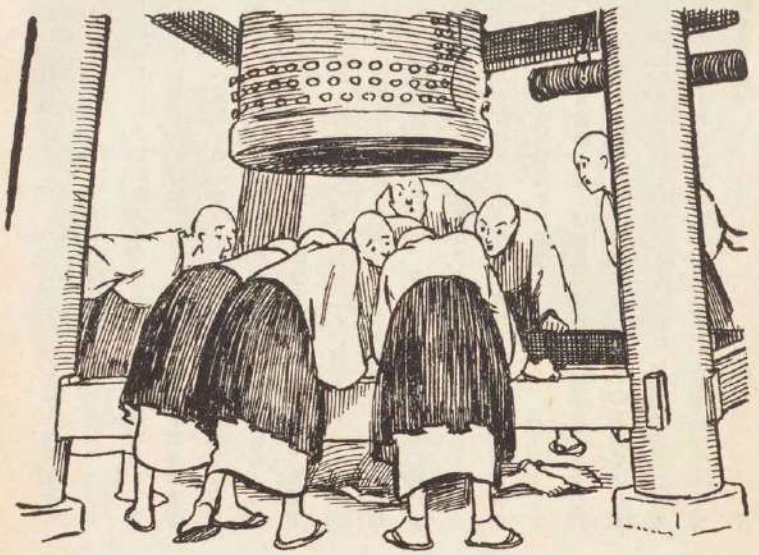
そこでお寺の坊さんもいゝことにして、その病人の乞食坊主を鐘撞堂に置いて、朝晩鐘をつかせることにしました。

それから二日の間はきまつた時間になると、朝晩に時の鐘が鳴つてゐました。お寺の人たちは、あゝあの乞食坊主が感心に鐘を撞いてゐるといつて喝をしてゐました。

すると三日めの朝になつて、鐘が鳴らなくなりました。おや、坊主めけさはなまけたのかと思つてゐると、そのお晝にも鳴りません。みんなはぶつ〳〵いひはじめました。とうとう夕方になつても鐘は鳴らずじまひでした。そこでこんどはふしぎに思つてみんながやや〳〵いひながら鐘撞堂へ來て見ますと、おどろきました。乞食の坊さんは釣鐘の下で仰向けに倒れて、まつ蒼な顏をして、落込んだ眼をかたくつぶつたまま齒をくひしばつて死んでゐました。みんなはあつといつたなりしばらく顏ばかり見合せました。

そのうち誰がいひはじめたともなく、ぶつ〳〵小言をいひはじめました。誰がこんな乞食坊主のおいほれを寺の中に引き込んだのだとか、みす〳〵死にかけてゐるよほ〳〵ぢいさんに寺を貸してとり返しのつかないことをしたとか、所もあらうに寺の寶物になつてゐる釣鐘を死人に穢されて佛樣に申し譯がないとか、てんでんがいひたいことをいつて、お互に罪のなすり合ひをしてゐました。

けれどもいつまでそんなことをいひ合つてゐても果しのないことですから、とにかく死骸を葬ることにして、それにしてもどこの國の誰とも身分の分からない旅の風來坊を勝手に葬つてあとでお上からお咎めがあると困るといふので、心當りのものがあつたら寺へ申出てくれるやうに書いた立札を門の前に立てました。なんでも初めて來た夕方、死んだ當人が話したところでは、西の方の國で相應にくらしてゐたのですが、家内のものと仲がわるく家をぬけ出して勝手に方々の國國を旅して歩くうちに病氣になつたのだといふことでした。そんなわけでまんざら引取人のない、右をむいても左をむいても一人ぼつちの雲水坊主といふ分でもないのですが、それにしてもさし當り誰か來るまでゝも死骸を鐘撞堂からおろして置かなければなりません。近所の村の者に賴まうとするとあいにくその日は村のお祭で、誰も穢れをきらつて、死人などに手をふれようとするものがありません。これで坊さんたちも困りきつてしまひました。



二

するとそのあくる日の晝すぎでした。立派な身なりをして刀をさした侍が二人つか〳〵とお寺へはひつて來ました。見

なれない侍が何をしに來たのかと思つて坊さんたちが目を見はつてゐますと、侍たちはていねいに腰をかゞめて、

『じづはわたし共は家出人をたづねて、播磨の國から上つてまゐつたものでございます。たゞ今御門前を通りかゝりますと、新しい立札が出てをりました。どうも年格好からすべての樣子が、八十歳になりますわたし共の父にいかにもよく似てゐますので、ついうか〳〵はひつてまゐりました。失禮ですがとにかく拜見させて頂きたい。』といひました。

坊さんたちは持てあましきつてゐた所ですから大喜びに侍たちを鐘撞堂へ案内しました。侍たちは大釣鐘の下に寢たままでゐる坊さんの顏を見るなり大聲を上て泣き出しました。

『父です。やはり父です。何といふ情ないお姿になられたのです。』かう二人の侍はかはるゞ〳〵にいつて、

『わたし共も播磨の國では相應にひろい土地を戴いてべつだん不足なくくらしてゐるものでございますが、一人の父にむざむざ野たれ死をさせました。みんなわたし共の注意の足りない罪で、何ともおはづかしい次第です。』とかういつて、また泣きました。

とにかくこれで厄介な死骸の引取り手のできたのをいゝ幸ひにして、お寺の坊さんたちはよろしくあとを二人にまかせたまゝ逃げるやうにしてお寺の中に引つこもつてしまひました。侍たちは、では後程人夫をつれて引取りにくるからと、かたく約束してかへつて行きました。するとその日の夕方、もうそろ〳〵人顏もよく分からなくなつた頃、三四十人どかどかと鐘撞堂の方へ入つて行く物音がしました。

『あゝいよ〳〵死人をつれ出しに來たな。』

お寺の人たちはさう思ひながら、何となく薄氣味がわるいので戸をしめて家の中にこもつたまゝ、窓をあけて外の樣子をのぞいて見やうとするものもありませんでした。

あちらではしばらくがや〳〵してゐましたが、そのうち薄くら闇の中で大勢が何かを車にのせてぞろ〳〵出て行く樣子でした。するとそれもぱつたりしづかになつて、お寺からは十町ほどへだつたうしろの山で火葬でもするのでせうか、しきりに木を伐り倒したり、ぱり〳〵火のもえる音がしました。

その合間には大勢がかん〳〵鉦をたゝいて、やかましくお經のやうなものをとなへる聲がしました。そんなことが宵の

內ちゆうつゞいたと思ふと、急にひつそりと靜まりかへつてあとは一晩中まつ暗やみの中で、嵐が物すごく吠えてゐるだけでした。

さてそのあくる朝、お寺で一ばん早く目をさます鐘撞の男がどうしたかと思つてこはごは釣鐘の下まで行つて見ますとなるほどきたならしい行倒れの乞食坊主のすがたはきれいになくなつてゐましたが、あんまりきれいになりすぎて、何となくそこらががらんとだゞぴろくなつてゐるので氣がついて見ると、こんどこそほんたうにびつくりしました。あの大きな、この近所三里四方にひゞくといふ評判の釣鐘が地の下にめり込んでしまつたか、空に舞ひ上がつてしまつたか、きれいに消えて無くなつてゐました。それからあとの大騒ぎは書くまでもないことでせう。

さてまたゆうべ夜中近くまで火をもしたり、鉦をたゝいたりさわいでゐたあとには、大きな木を幾本となしきり倒してそれに釣鐘をかけて燒いたらしく、こはれた鐘のかけらが夥しく散つてゐました。この大仕掛な釣鐘どろほうは鐘を地金に鑄つぶして使ふために、夕闇にまぎれてお寺から鐘をはこび出したあけく、裏の山で、鉦の音やお經の聲でごまかしながらさしもの大釣鐘を一晩のうちにこな〳〵に碎いて持つて行つてしまつたのでした。

それにしても一日一晩死んだふりをしおほせた八十幾つの乞食坊主こそ、この仲間で第一等の役者だといはなくてはなりません。

（をはり）

盗まれた狸

しはさふ　　しふばる

ある日友達の大山君が遊びに來ていろ〳〵な話の後で、

『例の釜居君ね、あの先生狸を盗んだといふ噂を聞いたが、君その謎を知つてますか。』と申します。

『へえ、狸を。いや知らないよ、何處で。』

『僕も委しい話は知らないが、なんでも汽車の中でだつていふ話だ。』と申します。

隨分變な話ですから、

『でも、まさか生きてるのぢやあるまい。』

『さア、なにしろ山高帽子をかぶつたまんま、すましこんでお湯へ飛び込むといふ、有名な慌てやさんの事だから、ありさうな事だとも思へるでせう。』

『さうだつてね、この間も山の手の電車に乘ると向ふむきに松江の禿君がのつてゐるんだつて。それでいきなり僕から目かくしをして、バアといひ乍らひよいと見ると、まるつきり知らない人だつて、いやといふ程叱られたといふ話だよ。その時の釜居君の顏が見たかつたと思ふよ。』

『へえ、それは僕初耳だよ。君狸を盗むなんぞ例の君の繪ばなしの種にならないかい。』

『大いになりさうだよ。今月種にいゝのがなくつて困つてゐた所だから、丁度いゝ。早速明日聞きに行かう。』

翌日丁度近所にも少し用事がありましたので、なにしろ釜居君の事だから、どう間違へて生きた狸を盗まないとも限らないと思ひましたので、家へ入る前に何處かに狸らしいものが居るかと、探して見ましたが一向變つた事も無さそうです。

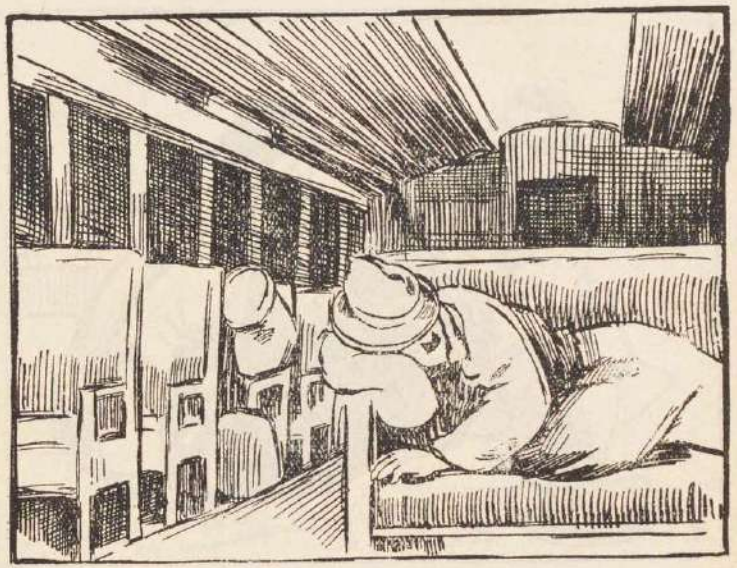
都合よく釜居君は家に居ましたので、『君狸を盗んだといふ噂があるが本當かい。』と尋ねますと、釜居君は案外平氣な顏で、

『あゝ、本當だよ。』と云ひますので、私は何處にゐるのかと思つて方々見廻してゐますと、

『なにをそんなに方々見廻してゐるんだい。見たいのかい。上げようか。とにかく今見せるよ、古狸だよ。』といひながら押入へ首をつゝ込みました。

古狸なんぞ貰つたつて厄介でしようがないと思ひましたが押入の中にゐるのは變だと思つてますと、片手に抱へて出して來て、これだよと見せて呉れたのは只の古臭い木彫の狸で、それも餘りいいのぢやない、安つぽい物で、おまけに手垢でテラテラ光つてゐます。おや〳〵なんだつまらない。こんなものか、てつきり生きてゐるんだと思つたら、こんなものぢや、繪ばなしのたねになんぞなりやしない。とがつかりいたしました。

『なんだ、こんなものか。僕はてつきり生きてゐるのだとばかり思つてゐたよ。なんだつまらない。』と申しました。



しかし折角來たのだから一と通り驛を聞いて見ると、思つた程でもありません。一寸面白いので、その話をお聞かせしませう。これから先僕といふのは釜居君の事です。

僕が此間青森へいつた事は知つてゐるでせう。その途中の事なんです。夜汽車に乘つたんですが隨分すいてゐましたので、直ぐにぐつすり寢込んでしまひました。どれ位寢たかふつと目をさましますと、僕の箱には彼方の隅で居眠つてゐる田舍爺さんと二人切りです。ぞをん〳〵寒いので氣がつくと、汽車は降雪の中を苦しさうに走つてゐるんです。僕は外套の襟を立てゝ、一つ身振ひして又横になり、うつら〳〵してゐました。暫くすると、汽車は何處かへ停つたやうでしたが、こんな天氣なので乘る人もない樣です。時々驛夫が何かいふのが聞えました。すると急に例の田舍爺さんが慌てゝ荷物を下してやがて降りていつたやうでしたが間もなく汽車は一聲苦しさうに唸ると、ごつとんごつとん動き出しました。おや〳〵たうとう獨りぼつちだと思ひながら爺の居た邊を見ると、腰かけの上に眞黑い襤褸でこなものが載つてゐます。おやと思つてそこまで行つて見ると、この狸が置いてあるんです。

お爺さんにとつては大事な物と見えて、この通り手垢で光つてゐましたよ。次ぎの驛へ着いたら屆けてやらうと思つてゐる内にまた寢てしまつて、今度目がさめた時は、私が乘替へる驛でしたので、急いで降りたのですが大雪ですし、驛夫なぞもそこには見當らないし、寒さは寒しそれにどうせ此處まで持つて來てしまつたのだから明日にしようと思つて、停車場前の宿屋へ泊り込んだのですが、翌日麻坊してやつと汽車に間に合つたやうな次第で、狸のしまつに閉口したのです。その内にもう百哩も先きまで來てしまつたので、今更屆けるのも變てこだし、もう一べん汽車の中へ置き忘れてやれと思つて目的の驛へ着くと、狸だけは棚へ置きつぱなしで、知らん顏して降りやうとすると、『もし〳〵忘れ物』と後から誰かゝ云ふのです。しまつたと思つたが聞えない風をしてどん〳〵行かうとすると、ます〳〵大聲でどなるのです。しまひに驛夫が受取つて私に渡して、私が『實はこれは』と云つてる間に忙しさうに行つてしまつたので、えゝ面倒臭い歸りに元の驛で屆けてやればいゝとそのまゝ旅行中持つて歩いたんです。ところが歸りは、都合で汽船で歸つて來たのでたうとう盜んでやつた事になつたんです。

おやまの爺さん

島與志雄

おうさむこさむ
やまからこぞうがないてきた
なーんとてないてきた
さむいとてないてきた。

かういふ歌を皆さんはご存じでせう。この歌が流行り初めた頃には、面白い話がそれについてゐたものです。この歌をうたつて山の近くで焚火をしてゐると、一寸法師の子僧が火にあたりに山から飛んでくる、といふのです。

或る片田舎の、山の裾にある小さな村に、右のことが何處からか傳はつてきた時、子供達は眼をまんまるくしました。考へれば考へるほど、面白くて可笑しくて仕樣がありませんでした。しまひには皆で集つて、山の子僧を呼んでみようといふことになりました。

村から少し離れた山の麓に、松や柏や櫟や椎などの雜木林がありました。秋のことで、枯枝や落葉などが澤山見出されました。村の子供達は其處へ行つて、林のふちの野原に焚火をしました。煙の下からぼうと火が燃え出してくると、皆は

手をつないで、ぐる〳〵火のまはりを廻りながら、大きい聲で歌をうたひました。

おうさむこさむ
やまからこぞうがないてきた
なーんとてないてきた
さむいとてないてきた。

歌つてゐるうちにます〳〵面白くなつて、しまひに皆は踊り初めました。

所が、やがて焚火の火が燃えきつてゆき、皆は歌ふのに聲が疲れ、踊るのに身體が疲れてきても、一寸法師の子僧は出て來ませんでした。皆は歌も踊りも止めて、燃え殘りの火を見たり、山の方を眺めたりしながら、がつかりしてしまひました。

けれど、一度では諦められませんでした。子供達はそれから毎日のやうに雜木林の處に來て、焚火をし、歌をうたひ、踊り廻つて遊びました。今にきつと何か出て來るやうな氣がしてきました。それにまた、その遊びはどの遊びよりも面白うございました。

或る日もまた、皆でその遊びに夢中になつてゐますと、山の方からさつと風が吹いてきて、青い空にゆるく立昇つてゐた焚火の煙が、ゆら〳〵と亂れかける途端に、高い處で、アハハハ……と大きな笑ひ聲がしました。子供達はびつくりして、歌も踊りも止めて見上げますと、髪の毛の眞白な白髯の大きなお爺さんが、煙の中にぼんやり浮き出して、にこ〳〵笑つてゐます。おや！ と思ふまに、お爺さんの姿はすーつと消えてしまひました。

皆は夢でもみたやうな氣がしました。けれども、とにかくお爺さんの姿が煙の中に實際見えたのです。一寸法師の子僧でなくて人の何倍もある大きな白髯のお爺さんでしたけれどちつとも恐くない、やさしい顏付で笑つてゐたのです。

子供達はそれに元氣づきました。そしてやはり毎日のやうに其處へ來て、焚火をして遊びました。すると、必ず一度は煙の中に、お爺さんの笑ひ聲が聞えて姿が見えました。けれどそれはいつも、ほんの一寸の間だけでした。

『あのお爺さんを煙の中から呼び出して、一緒に遊んでみた

いなあ！」と皆は思ひました。

それでいろ〳〵智慧をしぼつて、お爺さんを呼び出す手管をきめました。

そこで、その日はいつもより澤山に枯枝や落葉を拾つてきて、中には生木の枝までも交へて、煙が多く出るやうにしました。皆はそれに火をつけてから、歌をうたひ踊りををどりながら、煙の中をぢつと横目で見つめてゐました。やがていつもの通り、山の方からさつと風が吹いてきて、濃い煙がゆら〳〵と横倒しに動く途端、アハハハハハといふ高笑ひと一緒にお爺さんの姿がはつきり煙の中に現はれました。そらッ！　といふので、皆は立ち止つて、中の一人が話しかけました。

『お爺さんは何處から來たの？』

もう消えかけてゐたお爺さんの姿が、また俄にはつきりしてきて、やさしい聲で返辭をしました。

『わしは山から來たのだ。』

すると、待ち構へた次の子供が云ひました。

『お爺さん、煙の中から出て來てくれない？　一緒に遊ばうよ。』

『さうだね。』とお爺さんは一寸考へるやうなきつい顏付をしました。『いや、まあ止さう。わしは山の爺さんで、お前達と一緒に遊ぶと、お前達が風邪をひくかも知れないのだ。』

すると今度は、三番目の子供が云ひました。

『お爺さん、僕達が火を燃してゐる間は煙の中に殘つてゐてくれない？　それともお爺さんは僕達が恐いの？』

『アハハハハ、、』とお爺さんは笑ひました。『何とかかとか云つて、わしを引留めるつもりだな。だがわしは、いつまでも一つの處にぢつとして居れないのだ。そんなにわしを引留めておきたいなら、わしを捕へてごらん。明日、わしはお前達の焚火の煙の中に居て、姿を見せないから、そのわしを捕へてごらん。みごと捕まつたら、御褒美を上げる。』

さう云ふかと思ふと、お爺さんの姿はもう消えてしまひました。

子供達は當が外れて、暫くほんやりしてゐましたが、やがてお爺さんの約束を思ひ出して、また元氣づきました。そしてお爺さんを捕へてやらうと決心しました。

それは容易なことではありませんのでした。煙の中に居る姿の見えない人を捕へるのですから、それこそ全く靈を摑む樣なものでした。皆でいろ〳〵相談したが、よい工夫もつきませんでした。そのうちに、或る一人がふと面白いことを考へついて、それを皆に話しますと、皆は手を叩いて喜びました。それならきつと捕へられると思ひました。

翌日になつて、村の人達が田圃の仕事に出て行つた後で、子供達は皆集つて、大變大きな紙の袋を拵へました。それを持つて、山の麓の林の處へ參りました。

それで、いつもの通り焚火をしました。けれど、餘り澤山煙が出ないやうにと、枯枝や枯葉を少ししか集めませんでした。それに火をつけて、煙が立ち初めると皆は大きな紙袋の口を擴げて、その中へ、煙をみんな煽ぎ込んでしまひ、そのあとをしつかと紐で結へました。お爺さんが煙の中に居るとすれば、もう煙と一緒に袋の中にはひつてる筈です。

『お爺さんを捕へた、捕へた』と云つて皆は躍り上つて喜びました。

所が、袋は大きくふくらんでそこに轉つてるきりで、中にお爺さんが居さうな樣子も見えません。

『お爺さん、お爺さん！』と呼んでも、何の返辭もありません。子供達は疑ひ初めました。そして、中を一寸覗いてみることにしました。

皆集つて、大きな紙袋の横の方を少し破いて、中を覗かうとしました。すると、その破れ目から、中の煙がふーつと出て來ました。皆はあわてゝ、破れ目を押へました。がもう間に合ひませんでした。外に出た煙の中に笑ひ聲がして、お爺さんの姿が現はれました。

お爺さんは、呆氣にとられてる子供達を見下しながら、笑顔をして云ひました。

『お前達はえらいことを考へついた。わしを袋の中へ入れてしまつたな。だが、袋の横腹を破つて覗いたのがいけなかつた。煙は上へ〳〵と昇るものだから、下から覗くとよかつたのだ。……それにしても、兎に角お前達はえらい。御褒美に、明日から、この林の中に一杯茸が生えるようにしてあげよう。たゞ、それを取るには、有難うと云はないと、茸はみな無くなつてしまふから、よく覺えておくがよい。』

そして、お爺さんの姿は消えてしまひました。

子供達は、お爺さんを捕へそこなひましたけれど、茸のことを考へると、嬉しくてたまりませんでした。

翌日になると、子供達は朝早くから起き上つて、皆誘ひ合して、胸をどきつかせながら、林の處へやつて來ました。するとどうでせう、林の中一面に、松茸や初茸や

濕地茸や……金茸茸銀などが、落葉や苔の中から頭を出してるではございませんか。

『やあ、澤山生えてる！』

皆我を忘れて、林の中に駆け込んで、茸を取り初めました。所が不思議なことには、その一つを取つてしまふと、今迄生えてたのは勿論のこと 手に取つた茸までが、煙のやうに消えて無くなりました。

子供達はびつくりして、互に顔を見合せました。するうちに、或る一人がふと思ひ出しました。

『あ、しまつた！ 有難うを忘れたから無くなつたんだ。』

なるほど、茸を一つ取る毎に有難うと云はなければならなかつたのです。

子供達は相談しました。お爺さんを呼び出して、謝つた上で、また茸を生やして貰はうと考へました。それで、例の通り焚火をし、歌つたり踊つたりして、お爺さんが煙の中に出て來るのを待ちました。けれど、どうしたのか、お爺さんは出て來ませんでした。

子供達は悲しくなつて、中にはもう涙ぐんでる者さへありました。すると、或る一人が云ひ出しました。

『お爺さんは怒つてるに違ひないや。けれど、お爺さんは面白いことが好きだから、皆で何か面白いことをして遊ばうよ。そしたらお爺さんも笑ひ出して、出て來るかも知れないぜ。』

皆はそれに贊成しました。そして面白いことを考へつきました。

めい〳〵、木の枝を折り取つて、それを頭に卷きつけました。帶の所にも卷きつけました。手には、美しく紅葉した楓の枝を持ちました。そして、林の中に散らばつて、木きな木の根本に隱れました。一、二、三、と合圖の聲で、皆一度にぴよんと飛び出して、踊りながら歌

をうたひました。

きいのこきのこ
きんたけぎんたけどこいつた
おやまのぢいさんどこいつた
きのこのぢいさんでーてこう
でーてこ　でーてこう

踊りながら次第に集つてきて、圓く輪をつくつて、くるくると廻りました。

アハハハヽヽといふ笑ひ聲がしました。そらッ！　と皆振り返つて見ると、向ふの茂みの中に、お爺さんがにこ〳〵して立つてゐました。お爺さんは云ひました。

『とう〳〵わしの方が敗けてしまつた。お前達はほんとに面白い兒だ。明日からまた茸を澤山生やしてあげよう。だがわしはもう決して出て來ないよ。お前達が茸を澤山取つていつたら、村の人達も不思議に思つて、皆でやつて來るに違ひない。わしはお前達のやうな子供の前に出て來るのは構はないが大人達の前に出て來ると、きつと惡いことが起るのだ。では、これでお別れだ。そして、わしが居ないと危いから、もう焚火はしないがよい。それから、茸を取る度に、お前達を大變好きだつた山の爺さんのことを、思ひ出してくれよ。よいかね！』

そして白髯の大きなお爺さんは、一寸會釋をするやうに頭を動かしましたが、そのまゝすーつと消えてしまひました。

子供達は俄に悲しくなつて、しく〳〵泣き出しました。すると、何處からか非常に美しい小鳥の聲が聞えてきました。その聲が『きいのこきのこ……』と歌つてゐるやうでした。それを聞いてゐるうちに、子供達はまた心が樂しくなりました。山の爺さんの話をしながら、村へ歸つて行きました。

翌日の朝、皆で『おうさむこさむ……』や『きいのこきのこ……』を歌ひながら、その林にやつて來ますと、一面に茸が生えてゐました。けれどもうお爺さんは、歌つても歸つても、決して出て來ませんでした。

たゞ茸だけは、その雜木林の中に、毎朝一面に生えてゐました。それを子供達は『お山の爺さん有難う！』と云ひながら、一つ〳〵取りました。いつも持ちきれないほど澤山ありました。（をはり）

丸王熊いなて討の敵

光史田霜

一

熊王丸は母の傍で戰さの繪本を開いて見てゐました。然し、心はどうも落付きません。胸の中がまるで潮鳴りでもするやうに騷がしいのです。折々顏を上げては障子に映る午過ぎの日差しを眺めてゐました。障子には明るく日が差してゐましたが、時々雀が喧嘩してゐるらしい鳴聲をして、羽ばたきも荒々しく障子に影を映します。その度に熊王丸の胸は吃驚する程顫るへるのでした。

それもその筈、熊王丸の父宇野六郎は今日殿樣の赤松光範に從づて、住吉と云ふ處に戰ひに行つたのです。相手は强い大將として知られた楠正儀でありますから、今度の戰ひはいつものやうに勝てるかどうか判らなかつたのです。熊王丸は今朝父と別れ際のことが妙に思ひ出されてなりませんでした。

夜が明けるとすぐ鎧を着けて戰に行く身支度をした父の勇しい姿を見ると、今年十二になつた熊王丸はもう一緒に戰に行きたくてなりませんでした。

『お父さん、今度こそは是非私を戰さに連れて行つて下さいお願ひでございます。』

と熊王丸は、父の鎧の袖につかまつて頼みました。けれども父の六郎は頭を振つて、

『いや〳〵お前はまだ早い、もつと〳〵學問もし、太刀打ち

も上手にならなければ戰ひに行つても何の役にも立たぬ。それよりは從順しく家に留守してゐるがよい。』と申しました。

熊王丸は、自分だつてきつと敵の三人や五人は切り殺して見せると心の内では考へましたけれども、父がきつぱりとさう云ふので、強つて賴むことも出來ず首垂れてゐました。それを見た父は、

『熊王、お前は戰ひに行かれないのがそれ程悲しいか。』と申しました。

『はい。』と云つて熊王丸はふと顏を上げました。それは父が「それ程順ふなら連れて行つてやる。」と、今にも云つて下さるかと思つたからでした。然し、父はさうした言葉も掛けて呉れず、沈んだ聲でかう云ふのでした。

『今度の戰の相手は楠正儀だ。お前も知つての通り楠は中々戰さの上手な、そして強い大將だ。それに此方は兵隊の數も少いのだから、今度はとても勝てさうもない。若しこの父が討死をするやうなことがあつたら、お前は大きくなつてきつと父の敵を討つてくれよ。』と父の六郎は眞心こめて申しました。

熊王丸もその母もそれを聞いて吃驚いたしました。いつ戰ひに出る時も、決して負けるなぞと云つたことのない父が、今朝に限つて云ふその言葉は嘘とは思はれなかつたからであります。

『いゝえ、お父さま、そんな弱い氣を起さずにきつと勝つて來て下さい。然し、若しもお父さまが討死をなさるやうなことがあれば熊王が必ず敵討ちをいたします。』と熊王丸は強い決心を顏の色に表して云ひました。

『宜しい、それで安心した。どんなことがあつても決して早まつたことをしてはならぬぞ。』と云つて熊王丸の母に向つて『熊王の事や後々のことは呉々も賴みますぞ。私は今度は討死をする覺悟なのぢや。』

かう云ふと、父の六郎は澤山の家來を連れて家を出てゆきました。熊王丸もその母も流石はしつかり者で、涙も流さずに父の勇ましい戰さの門出を喜んで送りました。そして心の内では弓矢八幡に、

『どうぞこの戰に勝てますやうに。』と、お祈りをするのでした。

熊王丸がぼんやりと考へ耽つてゐる時その母も父の鎧の下著を繕ひながら、何やら心配さうに思つてゐるらしく思はれました。

その時表の方に慌しく駈け込んで來た者がありました。てつきり戰ひの樣子を知らせに來た者だと思つたので、熊王丸も母も女關に走り出て見ました。

女關の式臺の上には、傷ついて血だらけになつた家來の友則が倒れたやうになつてゐました。

『奥方、若樣、實に殘念なことをいたしました。』

と云つて、友則ははら〳〵と涙を流しました。それを見た熊王丸はよい知らせでないことが雷のやうに胸の中に感じました。

『して戰の樣子はどうなのか、父上は。』とせき込んで訊ねました。友則は深手の傷に苦しさうにしながら、

『殘念ながら味方は負けました。そして御主人は討死をなされました。』と云ふ聲の終らぬうちに、

『えッ？討死をしたと。』

熊王丸もその母もさう叫んで今更乍ら吃驚いたしました。

『先刻から障子に映る雀の影が妙に氣に掛つてならなかつたが、矢

つ張父上は討死なされたのか。」と思つて今迄堪へてゐた悲しみが、どつと一時に來て母も子も縋り合つて涙に暮れるのでした。

二

その晩、熊王丸はどうしても眠れませんでした。父の討死を悲しむと云ふよりも、敵の楠正儀が憎らしくてならなかつたのです。殊に父上が別れ際の言葉を思ひ出しては、どうしても正儀を討ち取らなければならないと思つたのでした。けれどもまだ十二歳である熊王丸は、いくら勇氣を出した所で、とても正儀を討ち取ることが出來さうもなかつたのであります。

熊王丸は種々と考へ拔いた擧句、たうとう一つの計略を探し出しました。

「さうだ、正儀の家來になると僞つて正儀の館に乘り込んでやらう。そして折を見て敵を討つことにしよう。これならば自分にも出來さうだ。」と思ひ決めました。

翌朝、起るとすぐ熊王丸は母に向つて云ひました。

「母さん、私はこれからお父さんの敵を討ちに楠正儀の館へ乘り込みたいと思ひます。どうぞ暫くの間お暇を下さい。」

それを聞いて母は吃驚して、

「何を云ふのです熊王丸、お前はまだ十二歳の子供ではありませんか。もつと大きくなるまで待つてゐたとて敵が討てないこともありません。今は返り討ちになるばかりです。」

「いゝえ、母さん、私は是非ともやつて觀きたうございます。私は正儀の家來になると僞つてその館へ入り込みます。そして隙を見て刺し殺します。」

熊王丸はかう云つて、いくら母が止めても肯き入れませんでした。母も遂に熊王丸の固い決心に動かされて、行くことを許すやうになりました。

熊王丸はやつと母の許しを得たので、喜び勇んでお父樣の仕へてゐた殿樣の御殿に出ました。そして殿樣にお目通りを願ひました。殿樣の赤松光範は熊王丸が幼いのに似合はず賢く、また勇氣も勝れてゐる所から常に愛してゐましたので、早速お會ひになりました。

「熊王丸か、よく見えた。昨日の戰で殘念にもお前の父を討死させて氣の毒であつた。然しお前の父の働きはすばらしいものだつたぞ。その爲めにこの私まで討死をする所を助かつたのぢや。」

殿樣は熊王丸の顏を見ると、すぐにかう云ひかけました。熊王丸は下げてゐた頭を靜かに上げて、

「殿樣、そのことに就いて今朝はお願ひにあがりました。」

「うむ、お前の父の死を十分葬つてくれと申すか。」

「いゝえ、さうではありません。私は父の敵、楠正儀を討ち取りたうございます。」

「さうか、年若に似ず天晴れな心掛けだ。そして私に兵隊の五百人も借せと云ふのか。」

「いゝえ、さうではありません。私にお暇を願ひたいのでございます。私はこれから獨りで正儀の館へ參り敵討ちをしたうございます。」

「それはお前無理であらう第一子供の身として楠の館へ近づくことさへ出來ぬではないか。お前は知らぬかも知れないが、楠の城は赤坂の城と云つてこの城なぞよりよほど厳重に出來てゐる。」

「殿樣、私は子供ですから却つて近寄れると思ふのです。」

「と云ふのは何かうまい思ひ付きでもあるのか。」

「はい、正儀の家來になると私は僞つて、赤坂の城へ乘り込みます。」

「うむ、流石は六郎の子だ、豪い！」と云つて殿樣は熊王丸

の考へを大層賞めました。そして、

『お前がそれまでに決心したのなら、行くがよい。然し決して心迷はずに立派に敵を討つて呉れよ。』と云つて殿様は御自分の傍にあつた短刀を出して、

『これをお前に上げる。この刀で首尾よく敵を討つがよい。私の楠への恨みもこの刀に籠つてゐると思つて呉れよ。』と云つて殿様は黄金作の立派な短刀を熊王丸に下さいました。

熊王丸は有難くそれを戴いて御殿を出ました。その事を聞き傳へた多くの人達は、

『子供ながら天晴れな者だ。』

『熊王丸さんにどうかして敵を討たせたい。』

と口々に云つて、澤山の人が送つて來ました。そして皆の人は交る〴〵熊王丸に勇氣をつけるやうな言葉を掛けたり、

『母上のことは心配なさるな。きつと我々があなたの歸つて來るまでお守り申します。』と云つて安心させたりしました。

阿部野と云ふ所まで來た時に、熊王丸は、

『皆さんに送つて戴いても何處まで行つても名殘りがつきませんから、この邊でお歸りを願ひます。』と云つて、その一人一人に丁寧にお禮を申しました。

送つて來た人達は口々に熊王丸に勵ましの言葉を掛けたりその勇氣を讃めたりして、やがて野の道を別れて歸りました。

熊王丸は枯薄のゆら〳〵と風にそよいでゐる寒い寂しい阿部野の景色を見て、追に悲しい氣持が胸をついて來ました。

『いや、こんな弱い心になつてはならぬ。』と自分で自分の心を叱りつけて、それからは若美と云ふ一人の童子を伴につれて、道を急いで赤坂の城を指して參りました。

三

熊王丸は故里を出てから三日目の夕方、赤坂の城の前まで來ました。此處までは來たものゝ、さてどうして正儀の館に入り込むことが出來ませう。そのうちに日は暮れ掛けて寂しい夕風が城のお濠の水を渡ります。其處を通る人達は皆熊王丸達の姿を見て怪しむやうに振り返り〳〵通り過ぎてゆきます。いくら堅い決心と勇氣とがあつたとて、熊王丸は矢張り子供でありますから、かうして困つた時は途方に暮れてしまふのでした。

『若美や、此處までは來たけれども、どうして正儀の家來にならうかと云ふことは考へて來なかつた。何んとかよい方法はないものだらうかね。』と熊王丸は嘆息をつきながら若美に向つて云ひました。

『熊王丸様、そんなに力が落すものではありません。かうしていつまでも居ればいまにきつと楠の家來が通りかゝるでせう。そしたらあなたはうまく僞つてお頼みなさい。』

『成程、それはよい考へだ。然しもう暗くなりかけたから通る人もあるまいね。』

『なに、關ふものですか。誰も通り掛らなかつたら明日までも其處にゐませう。』

熊王丸は若美の強い言葉を聞いてまた勇氣が出て來ました

『よし、待つてゐよう。幾日だつて幾晩だつて此處に待つてゐよう。』

と云つて二人は石ころの上に腰を下して入日の沈んだあとのまだ赤い西の空を眺めてゐました。雁が揃つて通ります。

『あの雁は何處へゆくのだらう。自分の家の方へゆくらしい。母上は今頃自分の事を心配して矢張かうして西の空を見て居はしまいか知ら。雁が母上のゐる空を通るなら自分がかうしてゐることを言づけたいものだ。』と熊王丸は思ひました。

その時向ふから供を三人ばかり連れた立派な侍が歩いて來ました。町からお城の中へ歸つてゆくやうな樣子です。早くもそれを見た若美は、

『熊王丸さま、あれ、あそこへ楠の家來らしい人が通ります。早く行つてお頼みなさいまし。』と申しました。

『いや〳〵此方から頼むと却つて疑はれるかも知れない。向ふが此方を見つけて呉れるまで待たう。』

熊王丸がさう云つてゐる間に、楠の家來らしい人は、熊王丸達を見つけて、その立派な服裝の二人の子供を怪しみながら近づいて來ました。そして、

『お前さん達は見る所町人や百姓の子とも思はれないが、何處の何んと云ふ人の息子さんですか。そしてまたどうしてそんな所にぼんやりしてゐるのですか。』と丁寧な言葉で訊ねました。

熊王丸は早速かねて考へてゐた通りに云ひました。

『はい、お眼に止まりました私は、隣りの國、攝津の守護職赤松光範の家來で宇野六郎と云ふ武士の子で熊王丸と申す者

でございます。先日住吉の戰ひで父の六郎は討死をいたしました。所が一門である備後の守が悪い心の者でございまして父の領地を奪ひ取り、その上に私達を追ひ出しました。私達は仕方がありませぬので、何處か情あるお寺でもありましたら身を寄せ、髪を下して僧にならうと思ひまして、かうしてあてどもなく漂浪ひ歩いてゐるのでございます。」

それを聞いてその侍は大層心を動かされた樣子でありました。その賢こさうな子供が恨みを含んで憂りの言葉を述べたとはどうしても思へなかつたのであります。それに字野六郎の討死したのもその侍はよく知つてゐますので、侍らしい情心が泉のやうに胸に湧き出て來ました。

『ほう、聞けばまことに可哀さうな話です。私は楠正儀の家來で兵庫介忠元と云ふ者です。決して惡くは計ひませぬから、私と一緒に私の家までお出でなさい。』と如何にも深切をこめて申しました。

熊王丸は計略がうまく當つたので、若美と眼を見合せて喜び合ひましたが、

『はい何處、と云つて行く所も定まらぬ私達、それでは御言葉に甘へまして御伴をいたしませう。』と云つて二人は、兵庫介に連れられて赤坂のお城の門をくゞりました。

兵庫介はその夜熊王丸達を厚くもてなして、色々なことを訊ねました。そして、熊王丸が年に似合はずしつかり者で、賢い樣子を見て、すつかり感心してしまひました。

『あなたがお厭でさへなければ、明日殿樣にお逢せいたしませう。そして私から殿樣にお願ひして殿樣の家來になれるやうにいたしませう。如何ですか。』

兵庫介はそれでも敵の子である熊王丸に遠慮をしながら申しました。熊王丸は心の中で益々喜んで、

『御深切のお言葉まことに有難う存じます、私も故里を追はれて來た者、何で故里に未練がありませう。どうぞあなた樣のお力で殿樣の家來になれますやうお願ひいたします。』と申しました。兵庫介はそれを聞いて喜んで、それでは明日御殿へ行つてお願ひしようと約束して、その夜は眠りました。

翌る日、兵庫介は熊王丸を連れて御殿にあがりました。そして殿樣に會つて、昨日お濠端で熊王丸を見つけたことから、その事情なども詳しく話して、

『見る所氣品のある子供で、また何を訊ねて見ましても中々賢いのに私もすつかり感心してしまひました。一度その者とお逢ひ下さるわけには參りませんでせうか。』と、云ひました。殿樣は兵庫介の話に大分心が動いたと見えまして、

『早速その熊王丸とやらを連れて來るがよい。氣に入つたら小姓に召抱へよう。』と申しましたので、兵庫介は次の間に待たせてあつた熊王丸を連れて楠正儀の前へ出ました正儀は一眼見るより熊王丸の何處か氣高いところのあるのを知つて、成程勇士字野六郎の子であると感心いたしました。

『熊王丸とやら、事情は兵庫介から聞いたが、どうだ私の家來になつてはくれまいか。』

『はい、すぐ樣有難いお言葉を戴きまして、お禮も申し切れません。何卒よろしくお願ひいたします。』

熊王丸がかう答へましたので、正儀も兵庫介も大層喜んでそれからは打解けて色々な話をいたしました。

かうして熊王丸は考へてゐた通りうまく行つて、敵の楠正儀の家來となることが出來ました。

また伴の若美は兵庫介に仕へる事になりました。（つゞく）

お化けの喧嘩

田中實

ある夜のことでした。王二といふ仕立屋さんは、註文を受けてゐた女の着物を仕立て上げたので、それを屆けようと思つて、吼山といふ山の坂道を登つて行きました。

その晩は、月の照つてゐる美しい夜でしたが、平常臆病な王二は、氣味を惡がつて、びくびくもので歩みを早めるやうにして歩きました。

かさ〳〵と草叢で音がすると、何が出るのぢやないかしらと思ひ、林を風が吹き過ぎて行くと、今にも誰かゞ飛び出して來るのぢやないかと心配して、胸をどき〳〵させました。

さうしてしばらく行つてなりますと、ふいに、小川の中から、まつ裸な二人の男が飛び出して來ました。

それを見ると王二はびつくりして、『キャッ！』と大きな聲をたてゝ、着物の入つてゐる包みをしつかと抱へたまゝ、一生懸命に逃げ出しました。

するとその男達はすぐ王二に追ひついて、持つてゐた綱で王二をぐる〳〵巻きにしばり上げてしまひました。さうして、二人で王二をかつぎ上げると、どん〳〵走り出しました。

王二はこはゝ〳〵その二人に氣をつけて見ますとそれは人間ではありませんでした。なんだか頭に角を生した、怖ろしい顏をした鬼みたいなお化けです。王二は恐しさに身體をぶるぶる震はせました。

そのうちに、たうとうお化けたちは、山の上まで登つてしまひました。そして、松林の中へ入ると、王二を肩から下しかけました。

その時、傍の松の大木から、物悪い香をさせて、鬼のお化けの二倍もありさうな大きな身體をした一匹のお化けが、口から紅い舌をべろり〳〵と出し乍ら飛び降りて來ました。

そして、王二の身體を下しかけてゐる二匹のお化けを蹴倒して、自分ひとりで王二を脇に抱へると、一目散に走り出しました。

すると二匹の鬼のお化けは、すぐ起き上つて、あわてゝ後を追かけて行きました。

間もなく二匹のお化けは、大きな身體のお化けに追ひついて、打つてかゝりました。

大きな身體のお化けは王二をそこへ投げ出して置いて、

『こら、貴樣らは川の中にゐる裸の化物ぢやないか。川の中だけのものを捕つて食つてゐればいゝのだ。お前たちはあの男の仕事は仕立屋だのに何故私によこさない。』

と、大きな〳〵聲でどなり出しました。

さうすると、二匹の鬼のお化けは怒り出して、

『何、文句をいふな』

といふが早いか、二匹して大きな身體のお化けに組みつきました

王二はもうたまげきつて、氣を失ひさうになりましたが、大切な仕立たばつかりの着物を失くしたら大へんだと思つて、どうしようかと迷つてなりましたが、幸ひのことに、いはかれてゐた胴のところがゆるんでゐたので、少し身體を動かすと手だけは自由になりました。

王二は包みから着物を出してお化けたちに氣づかれないやうに、松の木の上へ投げかけておきました。

お化けたちは、一生懸命に倒したり倒されたりしていつまでも爭つてゐました。

そのとき、そこを王二の叔父さんが通りかかりました。

叔父さんは隣村へ用事に行つての歸りでしたが、松の木の上に女の着物がかかつて月に照されてゐるので、どうしたことかと急いでかけつけて來ました。

すると、それに氣づいたお化けたちは、喧嘩をやめて、あわてゝどつかへ逃げて行きました。

王二の叔父さんは、王二が口と耳の中に一ぱい泥を押し込まれて倒れてゐるのをてびつくりして、すぐ王二の口や耳から泥をとつてやり、木の上の着物をとつて、氣を失つた王二を背負つて 籔の方へ下つて行きました。

（をはり）

李如松のはなし

沖野岩三郎

今から三百三十年程前の事です。文祿二年一月廿六日の朝、明の大將軍李如松は、五萬二千人の兵隊を率ゐて、義州から平壤へ攻入つて來ました。

その時平壤には、日本軍の先鋒小西行長が二萬八千の兵を指揮して、堅く城を守つて居ましたが、明軍は多勢である上に、寒い〳〵此邊の氣候に馴れてゐましたけれど、行長の部下は、小勢であるばかりでなく、しかも防寒の用意が十分で無かつたため二日間の戰ひに散々打破られて、最早兵數も、僅か六千人しか殘らなくなりました。

殘念で堪らなかつたが、此儘にして居ては、勝利の見込がないと云ふので、行長は殘兵をつれて大同江の氷を踏んで闇に紛れて、京城の方へ退却してしまひました。

李如松は元來朝鮮の人で、若い時に支那へ行つて、寧夏の亂を平げた手柄でもつて、一躍して大將軍に昇進した人です。それが又もや名高い小西軍を打破つたもんだから、朝鮮の人達に、自分が偉い大將であるといふ事を見せびらかすつもりで、大同江の傍の練光亭といふ所の廣場で、盛んな戰捷祝賀會を開いて、大勢の手下にお酒をタラフク飲ませました。

すると何處から來たとも知れない、髯の眞白い一人の老人が、大きな牛に乘つたまゝ、李如松の家來達が宴會を開いてゐる所へ、のそ〳〵と歩いてきました。それを見た明軍の一人の大將は、大音を揚げて、

『こら！　此處は大明國の大將軍李如松閣下の、御宴會の場所であるぞ！。』と云つて呶鳴りました。けれども老人は聞えぬ態をして、平氣で大將達の酒宴をしてゐる前を、ずん〳〵と通つて行きました。老人の乘つてゐる牛も、大將達の坐つてゐる頭の上で、嘲けるやうに細い尻尾をふつて首の蠅を追ひながら通り過ぎました。

『待て！　無禮者奴が！。』と他の一人の大將は呶鳴りました。そして樹蔭に繫いであつた馬に、ひらりと打乘つて、老人の跡を追つかけましたが、老人は別に恐れた樣子もなく、後を振向いてじろ〳〵と大將の方を眺めてゐた老人の眼の中には、冒す事の出來ない威嚴がありましたので、大將は俄かに恐ろしくなつて、

『無禮者、馬鹿野郎……。』などと減らず口を叩きながら、すご〳〵と逃げ歸つて來ました。

それを見た李如松は、眞赤になつて怒りました。そして逃げ歸つた。

た大將に對つて、

『何といふ驅蟲だ。あんな老耄れの老人一人位を、引捕へる事も殺す事も出來ないのか。見て居ろ、今に俺が引捕へて來る！。』と呶鳴りながら、ひらりと自分の馬に打乘つて老人の跡を追つかけました。

その時老人は最早十町ばかり隔たつた、小い杜のある所まで行つてゐました。

『おゝい、老人暫く待て。大明國の總大將軍李如松とは吾輩の事だ。老人に尋ねたい事がある、暫く待て！。』

李如松は鐵を衝くやうな大きな聲で呼びかけました。けれども老人は、ちらりと李如松の方を振向いて見ただけで、すうーッと夢のやうに杜の中へ入つてしまひました。

白髯の老人が、あんまり平氣なので、李如松も少しく、薄氣味惡く思ひましたが、何を言つても、明軍五萬一千人の總大將軍ですから、今更逃げ歸る事も出來ないので、勇氣を出して杜の中へ入つて行きました。

見れば老人は牛を芝生の上に乘り捨てゝ置いて、一軒の草茸の家へ悠然と入つて行きました。で、李如松はその家の表までついて行つて、

『目出たい宴會の場所を、牛の蹄で踏荒した、無禮者奴、早々此處に出て來て頭を地につけて謝罪しろ。さも無くばその儘には打捨置かないぞ！』と叱りつけました。すると、入口の戸が靜に開いて、事も無げに出て來た老人は丁寧に叩頭をして、

『これは〳〵、大明國の總大將軍、李如松閣下、よくこそ、斯樣な、むさ苦しい茅屋へお

出で下さいました。實は愚老折入つてお願ひ申したい事がございますので……。』と言葉滑らかに申しました。

老人の言葉が、餘り叮寧だつたので、李如松も此上叱りつけるワケに行かなくなつて、

『願ひとは何事であるか、速に申出でるがよい！。』と嚴めしく申しました。

『はい、外でもございません。私には二人の男の子がございます。所が其悴は二人共揃ひも揃つた怠け者で、愚老もほと〳〵困り入つてゐるのでございます。で、何卒大明國の總大將軍閣下の御威光で、彼の二人の悴を、お叱り置き下されたう存じます。』

老人の言葉を聞いた李如松は、案外な願ひ事であつたので、早速、

『宜しい、其の悴共は何處に居る？』と申しました。

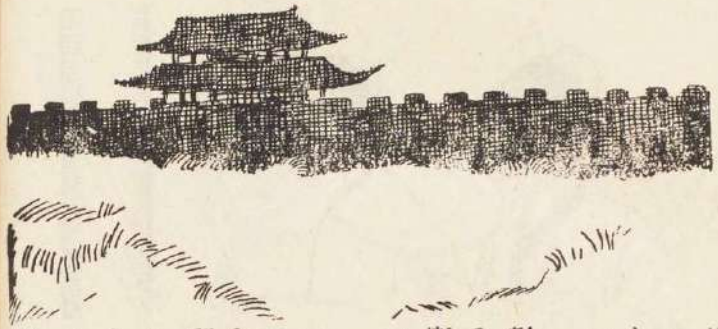
『裏の離れ座敷に居ります。』

『そちらへ案内しろ！。』

李如松は、ひらりと馬から降りました。そして老人に案内されて裏へ行つて見ますと、怠け者だといふ二人の男の子は、机に凭れて熱心に書物を讀んで居ました。それを見た李如松は、脅かすつもりで、腰に吊してゐた長い劍を引抜いて、

『こら。此處なる怠け者共！　毎日々々書物ばかり讀んでゐて何になる？此の俺を見ろ！俺には左程の學問はないが、今は大明國の總大將軍だぞ。お前達も、下らない書物なんか讀む事は止して、俺の家來にでもなるがよい。』と申しました。

すると二人の若い男は、さも可笑しさうに、ハ、ハ、ハと笑ひました。それを見た李如松



は嚇ッ！　と腹を立てゝ、今度は本氣になつて、

『不埒千萬な無禮者共、覺悟しろ！　そのまゝには置かないぞ！』と呶鳴りました。すると一人の若者は、傍にあつた竹の棒を手に取るや否や、

『さ、斬るなら斬つて見ろ！。』と云つて身構へを致しました。

李如松も最う退引ならないので、劍を振翳して若者目がけて突進しました。ところが若者はひらりと身を躱したと思ふと、發止！　と李如松の打込んで來る太刀を打きましたので、大將軍の名劍は、鍔元からぽッきりと二つに折れてしまひました　その時老人は、大地に兩手をついて、

『大明國の總大將軍李如松閣下、暫くお待ち下され。』と申しました。

李如松は逃げ出すワケにも行かないので、折れた刀を眺めながら、

『何事だ！。』と聲を顫はして問ひました。すると、老人は靜かに、

『大將軍閣下・閣下は平壤の一戰に小西軍を逐ひ拂ひました。けれども閣下は五萬一千の兵を以て、小西軍の二萬八千に勝つたのでございます。それを閣下は世にも珍らしき功名手柄をなされたやうに、勝誇つてゐられます。且つ將軍は我々朝鮮の人間が、皆な軍に弱いから、助けに來てやつたのだといふやうに、朝鮮人を輕蔑してゐられるやうに見受けます。けれども朝鮮にも此の悴遠のやうに強い若者が澤山ある事を、お忘れなきやう願ひます。閣下の軍はこれからであります。それにたつた一度の戰ひに勝つたからとて、あの通り盛大な戰捷の酒宴を御催しなさるなど、さういふ傲慢なお心は、ちとお愼みなさるが宜しうございます。』と亮も恐るゝ色なく申しました。

それを聞いた李如松は非常に口惜しく思ひましたけれども、自分より遙かに強い若者が二人まで居る上に、老人だつて、どれ程優れた武藝のある人だか知れないので、其まゝ默つて、すご〳〵と軍營へ引返しました。

軍營に歸つた李如松は、誰にも此事を言ひませんでした。のみならず老人の言葉を用るないで、其の翌日から、小西軍を追うて京城まで攻めて行きました。そして、

『平壤の一戰に脆くも敗れた日本軍だ。何程の事やある。一揉みに揉み潰せ！。』と號令して、意氣揚々と南大門外の碧蹄館に押寄せました。

ところが碧蹄館には日本軍の驍將、小早川隆景が、李如松の攻め寄せて來るのを今か今かと、てぐすね引いて待つてゐましたので、さしもに勝誇つた李如松の軍勢も、見る〳〵小早川勢の爲めに、散々に駈け散らされて、周章て狼狽いてゐる所へ、又もや横合から、黑田長政、毛利輝元、立花宗茂などいふ、一騎當千の英雄達が、猛烈に攻め立てゝ來たので、たうとう李如松は、重い手傷を受けて、生命からがら遠く逃げ延びました。

この時李如松は、つく〴〵老人の言葉を想ひ出して、自分の勝誇つてゐた傲慢な態度を惡かつたと悟りました。で、戰爭がやんで、明國へ引揚げる時、わざ〳〵平壤で一日逗留して、老人のゐた杜の中を尋ねてみましたが、どうしたものか、其處には最う、人の住んでゐるらしい家も何もありませんでした。

『確かに、此邊であつたに違ひない。』と吃きながら、青白い石の立つてゐる所へ行つてみますと、其處には、若者に打折られた將軍の刀が、錆く土色に餓て横つてゐました。（なはり）

香爐の行方

森川一朗

一、思はぬ客

或日、武藏の國、野本村の俳諧師雲水の侘住居へ、一人の訪れ人がありました。

『お頼み申す。』

その聲を聞いて雲水の子の草太郎は、玄關ともつかない入口の障子を開けて出ました。見ると草鞋脚絆の旅姿をした年頃四十五六にもならうかと思はれる人で、草太郎は一目見ると、この人も父と同じ俳諧師であることが知れました。

『こちらは雲水宗匠の御住居でございますか』旅の人は丁寧に檜笠をとつて訊ねました。

『はい、さやうでございます。そしてあなた様は何處から——。』

『私は泉州堺の山中幽石と申す者で、矢張り俳諧の眞似事を致して居る者でございます。此度東國の行脚を思ひ立ちまして、この武藏の國に參りました。雲水宗匠の御尊名を慕つてお訪ね申す次第でございます。どうぞ御取次を。』

『暫らくお待ち下さい。』

草太郎は奥に入つてその事を父に告げようとしました所、廣くもない家の中の事ですから、旅人の言葉はすぐに父の雲水に聞えたと見えて玄關口まで出て來ました。

『ようこそお出下さいました。私が雲水でございます。さア、どうぞ穢苦しい所ですが御遠慮なくお上り下さい。』

『いや、どうも、わざ〳〵のお迎へで恐縮に存じます。それでは御免下さい。』

幽石といふ旅人はさも恐縮したやうに、また如何にも嬉しさうに、草鞋を脱ぎ草太郎の持つて來た濯ぎの水に足を洗つて座敷に上りました。

この二人は顔こそ初めて合すのでありましたが、俳諧の上ではもう十分に知り合つてゐたので、初めて逢つても、まるで十年も知り合のやうに打ち解けて話しました。

俳諧のことを始めとして、お互のお國のこと、または諸國のことなど、話しはそれからそれへと移つて中々盡きませんでした。そのうちに日も暮れ方になりましたので、幽石はお暇乞ひをしようとしました。

『いや、左樣な御遠慮なく、是非今晩は私宅へお泊り下さい。そして夜を通していろ〳〵お話を致さうではございませんか。それに今晩は滿月でございます。さゝやかな酒でも汲んで、一句やるのもまた興が多いことでございませう。』と雲水は如何にも好意を示して引止めるので、幽石もそれでは御言葉に甘えてと、その夜は此處に宿を借りる事にいたしました。

『あゝ、草太郎や。』

呼ばれて次の間に本を讀んで居りました草太郎が出て參りますと、

『お前行つて酒を買つて來ておくれ。』と父の雲水は申しました。

『あの……お父さま。』

草太郎は何となく困つたやうな樣子です。

『何だ。』と父は云つて見たものゝ、はゝアこれは酒を買ふお金がないのだなと思ひ當りましたので、これも困つたやうな顔をしてしまひました。それと見て取つた幽石は、

『雲水殿、その酒は私に買はして下さらんか。旅のことですから何の手土産も持つて參りませんでした。一夜の宿を借りるお禮にその酒はどうぞ私に買はして下さい。』と云つて幽石は、懷中から幾らかのお金を出して草太郎に渡しました。草太郎は困つてもぢ〳〵してゐると、

『どうぞ買つて來て下さい。私がお願ひするのでございますから。』

『幽石殿、それは餘りに恐縮で……。』と父の雲水も云ひましたが、折角の好意を無にするのもと、そのお金で草太郎はお酒を買ひにゆく事になりました。

間もなくあたりは紫色に黄昏れて來まして、初秋の薄ら寒い微風も後の森の方から吹いて來るやうです。何處やら蟲の音がしみじみとやさしく、また哀れ氣に聞えて來ました。

折から前の草原の上に昇つた月は、朱盆のやうに大きく、まるで滿足に輝いてゐるやうに見えました。幽石は如何にも感じ入つたといふ風に、

『武藏の眺めは格別でございますな。行末は空も一つの武藏野に草の原より出づる月影』と、古人の歌にも聞き及びましたが、成程それに違はぬ味ひでございますな。今宵の私は何んといふ幸福せでございませう。日頃尊敬してゐた宗匠のお話しも聞くことが出來、かかる名月の御馳走にまでありつくとは。』と幽石は樂しさうな笑ひの聲を立てるのでした。

其うちに酒肴が來て、草太郎少年が接待で客も父も愉快さうに打寛ひで物語りました。

やがて月も中天にかゝり、そのあえに冴えた光を限なく下界に照す時分、軒からのぞき入つた光りは座敷の疊の上までも、その白銀の光りを投げるのでした。

『如何でせう、今宵を記念する爲めに一句やりませうか。』

父の雲水が云ひ出すと、客の幽石も待つてゐましたとばかりに賛成して、忽ち短冊と硯を取り寄せてまづ幽石が、

『お恥かしいものです。』と云つて書いて出したのを見ると、

武藏野にたゆたふ月や長の旅

それを見て雲水は殊の外感心しました。

『成程、あなたの漂泊の旅も思はれ、しみじみといたします。實に名句でございます。』と賞めました。

『いや、實にお恥かしいもので——雲水殿、どうぞあなたも。』

『はい。』と答へたが、雲水は中々考へが纏まらないと見えて容易に筆を下しません。そのうちに何ともなく顔色が曇つて來ました。

『雲水殿、大分お酒の色が悪いやうでございるので、幽石も恐縮して……。』

ますが、何處か身體がお悪いのではありませんか。』

幽石は心配して訊ねましたが、雲水は只、『いや』と云つたゞけで暫らく眼を瞑つて居りましたが、やがてすら〳〵と書き下したのは、

月を見て月見ぬわれの愁ひかな

幽石はそれを見て、その意味が解りませんでした。

『雲水殿、月を見て月見ぬとはどう云ふ意味でございますか。私にはとんと見當がつきません。』

云はれて雲水は暗い面をしながら、

『貴は幽石殿、今宵私の心は晴れ切れぬのでございます。これほど冴えた月を見ても愁ひの雲を拂ふことの出來ない自分が情なくなつたのでございます。』

それを聞いて幽石は膝をのり出し、

『それには何か深い事情があるのでせう。どうぞこの私に打明けて下さいませんか。一夜泊りの旅僧難聞ですから、あなたは御信用にならんかも知れませんが、同じ道に學ぶ友のよしみとして、どうぞ聞かせて下さいまし。何んとなく案じられてなりませぬ。』

『いや、下らぬことをお耳に入れましては御つてお心の汚れになりませう。どうぞこのことはお訊ね下さいますな。』

『いや左樣でもございませうか、御心配事があるといふのを聞いてそのまゝ歸るのも心殘りでございます。事情によつたら出來るだけのお力にもなりませうし、また。の幽石は決して他言はいたしませぬ。』

父の雲水もかほどまで云はれて黙さないと云ふ譯にもゆきませんので、そつとわが子の草太郎の方を見ますと、先刻から默つて二人の話を聞いて居りました草太郎の眼は、

『お父さん、お話ししたらよいでせう。』と云つてゐるやうに思はれましたので、

『それではお耳を汚すことにいたしませう。』

と云つて父の雲水が物語つたことは、大略次のやうなことでありました。

雲水には二人の子供がありました。兄を正吉といひ、弟を草太郎と云ひました。弟の草太郎が四歳の時に母親は亡くなつてしまひ、父の雲水は流石に風流な友とするだけあつて、後妻も娶らず親子三人で暮して居りました。其頃雲水の家は今のやうな貧しいものではなく、近海近在切つての豪家でありましたから、多くの召使も居りましたし、父の雲水が風流に日を暮してゐても決して困るやうなことはなかつたのであります。

所が今から三年ばかり前の或年、一夏雨らしい雨も降らず、その邊の田は皆干上つてしまひ、たうとう大不作になりましたので、忽ち秋から冬にかけて大饑饉となつてしまひました。情深い雲水のことでありましたから、すぐに自分の家の十四の倉を開いて、その中の米を多くの人に與へてしまひました。その爲め近在の人は一人も餓死する者もなく、翌年の收穫時まで何んとか保つことが出來ました。それで人々は雲水のことを神樣のやうに敬ひ、その恩に感泣しました。

けれども、雲水はその翌年から一時に貧乏人の仲間入をしなければならなくなりました。その上雲水が二人の子の父として、最も愛しむべきことが出來たのです。それは長男

の正吉が漸く年頃になつたばかりなのに遊事を覺え、たうとうお金に困る處から父の印を盜んで、三百兩といふ大金を金貸から借りて家出をしてしまつたのです。それを知つた父は怒りもし悲しみもしましたが、伜の借りたお金を返さうにもそのお金もなく、止むなく家屋敷を賣つてそれを仕拂ひ、今のやうな陋住居に移つたのでありましたが、不幸はそればかりで止まず、更に五百兩といふ借財が身に振りかゝつて來たのです。それはどういふ譯かと云ふと、矢張雲水のお人好が却つて禍をしたので、三年前强ひて頼まれるまゝに倒れかけてゐた隣村の豪家の借金の保證の印を捺した所、その豪家も遂に倒れ、その家の主人は他國に逃げてしまつたのでした。その爲めに思ひも掛けぬ他人の借金の取立が雲水の身に迫つて來たのでありました。雲水も始めの内は云ひ譯をしては日を延し、若しや借主が歸つて來はせぬかと心待ちにしてゐたのでありましたが一度逃げ　した者の戻つて來よう筈もなく、一方金貸の方からは强談判されるので、明日はその五百兩といふ大金を返さなければならぬ破目になつて居るのでした。若し出來ない時は、只一つの財産であるこの陋住居をその者の手に渡さなければならぬし、その上可愛い伜の草太郎を、一生奉

公として鬼のやうな金貸の家にやらねばならぬのでありました。

『そんな譯で私は心が晴れぬのでございます。然しこれも運命だと思へばあきらめもつきますが、只この先頼みとする伜を一生奉公に取られては、親としての面目も立たず、ほとほと考へあぐんで居るのでございます』と雲水は語り終つて長い嘆息を洩らしました。

それを聞いて幽石も殊の外同情いたしましたが、大金の事ですからどうしようもなく、ただ慰めの言葉をかけるより外仕方がないのでした。

『いや、下らぬことをお耳に入れて折角の清い月見を汚しました。一つ香でも焚いて清めませう。』と雲水は思ひ返したやうに云つて、

『これ、草太郎、長持の奥にしまつてある香壇を出してな、それから佛壇の奥から一番よい香を出して焚いて呉れ。』と云ひました。

『はい。』と立つて行く草太郎を見て幽石は、『見る所、あなたの御子息は中々の人物の樣に見受けられます。今に立派な者になるでせう。お幾つですか。』

『まだ十四でございますよ。でも年の割に兄の正吉とは違つてよく私にも親しくしてくれますので、尚更私はあれを一生奉公に取られるよりは老先短かい私が死んでもさうさせたくはないのでございます。でもあれは奉公に行くと申して居ります。』

雲水の額には忽ち悲しい影がさしました。月を仰いだその額は殊更蒼ざめて居りました。幽石も慰める言葉もなく默つてしまひました。

その時、草太郎は香爐と香とを持つて次の間から出て來ました。そして二人の前へ置いて靜かに香を焚きました。忽ち云ひやうもないよい香りが四邊に漂つて、流石は大家らしい昔もしのばれるのでありました。

幽石はふと香爐に眼をつけました。見ると赤銅で出來たもので、周圍には金をもつて龍の彫刻がしてあります。その形は普通ありふれた形でなく、歪んだやうな變なものではありましたが、それが又實に巧みに出來てゐるので、幽石は思ひず感嘆いたしました。

『雲水殿、この香爐は實に天下の寶でございますぞ　私はこれまで高貴の方々の御前にも出て、種々の珍い香爐も拜見いたしましたが未だこれ程立派な香爐を見たことがありません。失禮ながらこの品は如何して御手に入りましたか。』

『いや、お賞めにあづかりまして恐縮です。この品は先祖から傳つて居るものでございます。』

幽石は手にとつてそれを暫らく眺めて居りましたが、ハタと膝を打つて、

『雲水殿、この香爐こそあなたと御子息を救ふ物でございますぞ。もしこれをお手離しになれば、たしかに五百兩にはなりませう。』

それを聞いて雲水も草太郎も吃驚いたしました。

『えッ、そんな値打がありますか』と云つた雲水の聲は、驚きと喜びに顫へてゐるのでした。

『えゝ、眞實です。幸ひ私は江戸のお屋敷お出入の骨董屋が知つて居りますから、手紙を書いてあげませう。どうかそれを持つて一度見せて御覽なさい。きつと私の言葉に間違ひはありませんから。』

幽石の言葉はどんなに雲水親子を喜ばしたでせうか。あゝ、天は尚自分達親子を捨てなかつたのかと喜び勇んだのでありました。

その翌朝、幽石は江戸の骨董屋への紹介狀を書き認めて暇をつげて去りました。雲水親子は大層喜んで、折から心配して集つて來た親戚の人々にその事を話し、皆共々に喜び安心したのでありました。

やがて來た鬼のやうな金貸も、その事を聞いて大變に喜んで、皆な相談の上、早速江戸に賣りに行かうといふことになりました。

その又翌日、雲水は大切に香爐を包んで背負ひ、草太郎を留守に殘して江戸に旅立ちました。

江戸は十里と離れぬ所です。ぢきに歸つて來るからと云つて、喜び勇んで出掛けたお父さんの雲水が、再び歸つて來ないあの世に旅立つてしまひ、しかも無殺な死を遂げやうとは誰も考へ及ばない事でした。（つゞく）

こほろぎ（幼年詩）

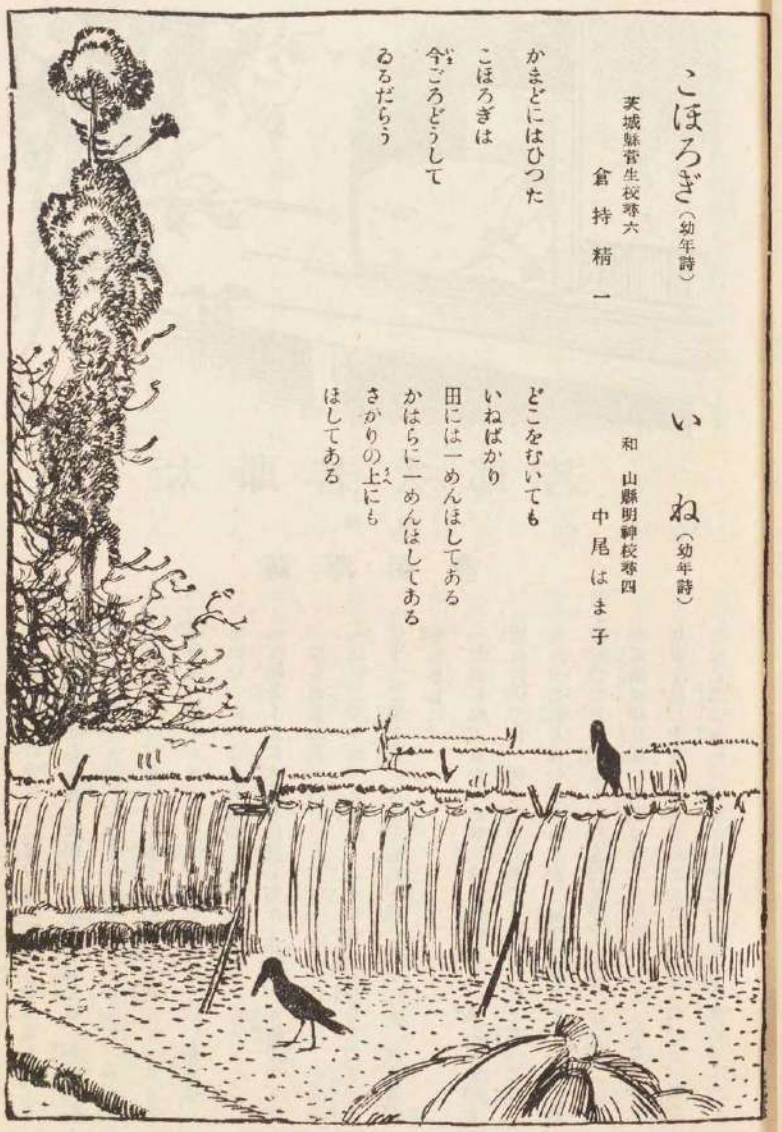
茨城縣菅生校尋六
倉持　精一

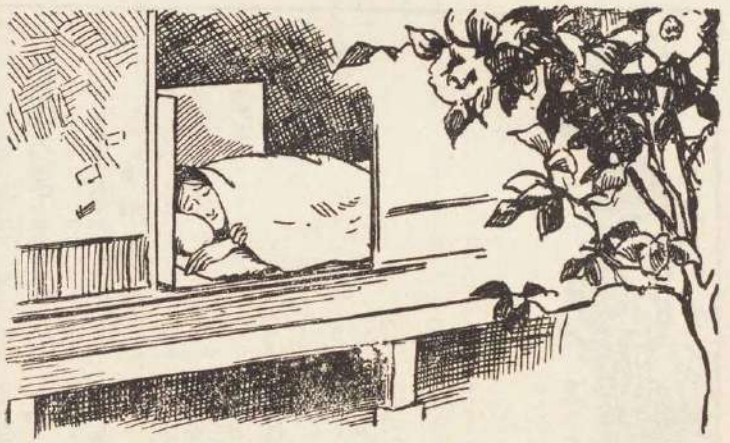
かまどにはひつた
こほろぎは
今ごろどうして
ゐるだらう

いね（幼年詩）

和山縣明神校尋四
中尾はま子

どこをむいても
いねばかり
田には一めんほしてある
かはらに一めんほしてある
さかりの上にも
ほしてある





太郎若次郎若

（傳說）

藤澤衛彥

お庭には、いつぱいに椿の花が咲いてをりました。その花のどれともなく、太郎若次郎若の母君は、病の床に横になつたまゝで、ぢつとみつめてをりました。みつめてゐるうちに、そこの一番大きめの椿の花が、ポタリと落ちて、すぐバラバラと土の上に崩れました。母君は、それに、はつとした氣持になられて、

「次郎若！まだ太郎若は戻らぬかえ。」と、心配さうにたづねられました。

「はい、ですが、兄樣は、もうぢきにお戻りでございませう。ご用なら、なんでも私が致します。」と、次郎若が申しました。

「なあにね、また、あの大きな椿の花が、落ちてすぐと崩れたのでね、何か變つた事でもなければと思つてね。それ、お前も知つてだらうが、姉の千束のかどわかされて行つた日の朝にも、あの椿は落ちるとすぐに崩れたし、お父樣が伊豆國にお流されなすつた日にも、おなじやうな事を見たので、それで心がかりになつてね。」と、話なかばに表の方へ、誰か、人の近づく足音が聞えました。

次郎若は、それが兄樣だと信じてをりますので、

「母樣、ほれ、兄樣のお戻りです。」と、うれしさうにして表の障子を開けました。ところが、それは、兄樣とは似もつかない、見知らぬ、どこかの使の男でしたので、

「誰ですか、あなたは？　何か用でもありますか。」と、次郎若がたづねました。

「あゝ、頼まれて來たのです。此家の太郎若どのが、さい前私の方に來られての話に、家が貧乏で、母上の御病氣に手を盡すお錢もないから、身を賣つてお助けしたい、よろしく頼むとのお願ひで、今度、東國にまゐることになりました。ついては、その身の代金を持つて上つたのです。ちよいと受取つたおしるしを願ひます。」と其男が申しました。

「え、兄樣が、そのやうな、……母樣、そのやうな筈はありませぬな。」

「え、そ、そんな筈があるものかね。あれがそんな輕はづみをして、家がどうなると思ふ。あなた、そんな筈はございません。」

「へゝ、筈がないつて、お氣の毒ですが、何も、此方から頼んで連れて行かうてんではないのですよ。かあいさうだから買つてやらうといふことになつたんですよ。」

「それならなほの事、あれを買はないでください。あれは此家の後嗣ですよ。さあ、次郎若、お前、すぐと行つて、兄樣を連れておいで、どんな事があつても、兄樣を遠くへやるではないよ。」

「さうでございますとも、母樣、では間もなく兄樣をお連れして來ます。」

かういつて、次郎若は、人買の手下の者に伴はれて里の方にまゐりました。

この頃、此琵琶湖の邊には、人買が立ちまはつて、少年少女をかどわかしたり、又、うまく人をだまして、東國の方へ行けば、よい仕事があつて、お金がどつさり儲かるやうに吹聽しました。そして、少しばかりのお金にだまされて行くと、もう、その先々で、一生を、たゞ奉公につかはれてしまふのでした。それを知らずに太郎若も、優しい後母樣のお病氣をなほすお藥の代を得ようと、孝心ぶかい心からわが身を賣つたのでした。

『これで、萬分の一でも、母様に御恩がかへせればそれが嬉しい。東國には、七年前に流された父様もゐらつしやる。何ぞの機にお目にかゝれるかもわからない。三年前にかどわかされた悔しい姉様にも行逢へるかしれぬ。それにしても、あの次郎若に別れるのはつらい。つらいけれど、それはこらえねばならぬ。弟よ、母様よ、明日の朝は船出します。今一度お目かゝりたいが、それではお名殘がつきませぬ。またお許しもございますまい。それで私は遂はずにまゐります。』と、太郎若が遙かの方に手を合せて、親子の別れ、兄弟の別れを告げてをりますところへ、心配してやつて來たのは弟の次郎若でした。

『兄様！』と、無事の姿を見るなり抱きついて、涙を流しました。太郎若も、一時の嬉しさに涙を流しました。

『弟よ、よく別れに來てくれた。』と太郎若が言ふと、次郎若はそれを止めて、

『なに、お別れに來たのではありません。お迎へに來たのです。兄様、なぜあなたはこんな輕はづみをなさるのです。母様がどんなにご心配してゞせう。さあ戻りませう。』

と、次郎若がせきたてました。

『いえ、弟、それは決して出來ませぬ。おまへは知らぬ事ですが、父様の配流から、家の生活はやつとたつばかり、母様の永いおわづらひに、藥らしいものも差上げられないので、それを心苦しく思つてゐました。それが今日、やつと出來たのです。持たして上げたお金のほかで、私は、もう、里のお醫師に前拂ひをしてしまひました。』

『それは困りましたが、兄様、取戻すことは出來るでせう。』

『えつ、弟よ、お前はまあ、それを取戻す氣でゐるのかへ。一遍見ていたゞいたお醫者の話にも、藥を用ゐて養生したらなほらぬ事はないといふ母様のお病氣を、お前はなほさうといふ氣はないのかえ。』

『いえ、兄様、私だつて、それは御病氣の治るようにしてあげたうございます。けれど、兄様が此まゝ遠くへ買はれて行かれるようでしたら、母様は、きつと、そのお悲しみで、死んでしまはれるでありませう。ですから、兄様は行くのを止めて下さい。そのかはりに、私が買はれて行きます。私は、家にゐても、兄様ほどの役にたゝない者です。どうぞさうして下さい。』

と、次郎若は、頻りに兄に願ひました。太郎若は、なかなかにそれを聞き入れませんでしたが、たうとう說き伏せられて、代り合ふ事になりました。

『では兄様、あとのところはよろしく賴みます。』と、次郎若が涙ぐむと、

『あゝ、お前も身體を大切にして、もしかして何かの機に、父様や姉様に逢ふやうなことでもあつたら、母様も御丈夫ですと傳へるのですよ。』と兄も名殘を惜しみました。

お互ひ同志、おもひやりの深い兄と弟は、かうして西と東に別れて行きましたが、その後風の便りに、弟が伊豆の下田に無事でゐると聞いた時、兄の太郎若は、ほつとして、

『どうぞ弟の次郎若に、特別神様のお惠みがあるように。』

と、つくゞ〳〵氏神様にお願ひするのでありました。

次郎若が、日數を重ねて賣られて行つた先は、下田の長者といつて名も高い無慈悲の人でありました。次郎若は、朝は夙くから、夜はおそくまで、牛馬よりひどく、追ひつかはれる苦しさに、或日、思ひあまつて、

父様戀し、母様戀し、
姉様戀し　千束様、
兄様戀し　太郎若様。

と、文に認めて死なうと思ひました。

ところが、一羽の白鶴が、ちやうど其處へ飛んで來て、身を投げやうと思つてゐた、次郎若のそばに寄つて、何かものを言ひたいような風をしました。

ふと、その樣子に思ひついて、次郎若は、さつきの文を鶴の足に結んでやつたら、うなづくやうに飛んで行きました。

せめて遠い近江國の兄樣のお手にでもはひつたら、きつと私の身の上を泣いてくださるだらうと思つて放した鶴は、都の方には飛ばないで、長者屋敷

のお庭の方に飛んで行きました。さては長者の娘が手飼の鶴であつたかと、次郎若はがつかりしてしまひました。

その日の暮方、長者の娘の雛鶴が、ふと、手飼の鶴の足に何か便りの文がついてゐるのを見出しまして、侍女に取らせますと、

父樣戀し、母樣戀し、
姉樣戀し　千束樣、
兄樣戀し　太郎若樣。

と記した親きやうだいをおもひやる悲しげな便りでありました。それを見て、侍女の一人が、わつとばかりに泣きだしましたので、聞き正しますと、その侍女こそ、ほんとは姉樣の千束であつたのです。長者の娘の雛鶴は、大層たよりの主をあはれに思つて、やつと次郎若を見つけ出して、あはれな二人の姉弟を逢はせてやりました。

別れてから五年目、お互ひは、お互ひの身の上を語り　ひましたが、

「それで母樣はお達者で。」と涙ぐんでたづねる姉の問に、

「いえ、御病氣がちでございます。」と、つい答へやうとしましたが、太郎若と別れる時、「もし父樣や姉樣に、何かの機に逢ふやうな事でもあつたら、母樣も御丈夫ですと傳へるのですよ。」と、くれ〴〵も注意されたことを思ひ出しましたので

『はい、おたつしやでございました。と、心もとない返事はしたが、それを聞いて喜ぶ姉樣の樣子に、ほんとの事を言つたら姉樣が、どのやうな心配をするであらうと、又しても涙ぐむのでありました。

その姉弟の孝行を、つく〴〵見てをりました雛鶴は、美しい心に涙をさそはれて、その事をお父樣の長者に話して、二人の身體の自由になるやう、くれ〴〵も頼むのでした。ほかならぬ娘のたのみに、長者もよんどころなくそれを許しましたので、二人は此國に流されの身、父樣を尋ねあてゝ、暫くお側に仕へてをりましたが、やがて、父樣の罪の免さるゝ日が來ましたので親子三人旅路を重ねて、めでたく近江國に歸りました。そして、皆ともゞ〳〵、その無事を祝しあつたといふ　とでございます。

（太郎若次郎若の御父樣は大野東人といふ名の武士でした。千束姫の遺蹟は　國の賀茂郡南上村小野の地に、わづかの言ひ傳へが殘つてをります）。（をはり）

雁が來た

若山牧水

がアん　がアん
とんで來た
寒い國から
とんで來た

がアん　がアん
おりて來い
羽根やら足やら

つめたかろ
がアん　がアん
おりないか
おりなきアどんどん
とんでゆけ

がアん　がアん
とんでゆけ
天のはしまで
とんでゆけ

極樂の大將

小島政二郎

一

昔、或所に一人の兵隊がゐました。三年目に上等兵になつて、自分の村へ歸ることになつた時に、ポッケットに手を突つ込んで見ると、三文しかお金がありませんでした。

兵營を出て森へかゝると、一人の乞食に逢ひました。乞食は哀れな聲を出して

『旅のお旦那さま、どうか一文めぐんでやつて下さい。』

と云ひました。

兵隊は、たつた三文のお金で、遠い遠い村まで歸らなければならないのですから、大事な大事なお金でしたが、しかし、哀れな乞食の姿を見ると、やらずにはゐられませんでした。で、思ひ切りよく、一文めぐんでやりました。

しばらく行くと、また一人の乞食に逢ひました。

『モシ〳〵旅の旦那さま、どうか一文めぐんでやつて下さい』と、同じやうなことを云ひながら近寄つて來ました。

見ると、前よりも一層哀れなりをした乞食だつたので、兵隊は可哀さうに思つて、二文しかないうちから一文めぐんでやりました。あとには、もう一文しか殘つてゐませんでした。で、どんなことがあつても、もうこれだけは惠むまいと思ひながら歩いて行くと、また向うから乞食がやつて來ました。

『おめぐみ深い旦那さま、どうか私にも一文めぐんでやつて下さい。』と、袖に取りすがらんばかりにして頼みました。

その寒さにガタ〳〵顫へた聲を聞くと、兵隊は可哀さうで可哀さうでたまらなくなつて、たうとうしまひの一文をも惠んでしまひました。

さて、この一文なしになつた兵隊が森を出はづれようとした時、ふいに眼の前へ神さまが姿をお現しになりました。

『君は感心な男だ。三人の乞食は、實はわしが假りに姿を借りて現れて見たのだ。君が惠んでくれた三文のお禮に、なんでも君の望みを三つ叶へてやらう。遠慮なく云ふがいゝ。』

ニコ〳〵笑ひながら、神さまがかう仰やいました。

『では、いつでも私のパイプにいゝ煙草が絶えないやうにして下さい。』と、兵隊は慾のないことを云ひました。

『よし〳〵。譯のないことだ。その次はなんだ。』

『その次には、なんでも私が欲しいと思ふものは、みんなこの背嚢の中へはひるやうにして下さい。』

『よし〳〵。今度は少し慾のある望みだな。では、(この背嚢の中へ飛び込め)と云ふがいゝ。なんでも飛び込んで來るから……。それから?』

『ポンと叩きさへすれば、いつでもこの鞄口にお金が一ぱいになるやうにして下さい。』

『よし〳〵。すべての望みは叶へてやるぞ。』と云ふかと思ふと、神さまの姿は見えなくなつてしまひました。

やがて、兵隊は、或水車小屋へ着きました。今夜一晩泊めて下さいと頼むと、

『私の家は狹くつて二間しかありません。その一間の方には毎晩惡魔が出て人を八裂きにします。で、家ぢゆうの者がもう一間の方へ寢ますから、お泊めする部屋がありません。』と主が云ひました。

『そんなら、私は、その惡魔の出る方の部屋で結構です。』と

云ひながら、兵隊はずん〳〵家の中へはひつて行きました。

しかし、悪魔が出ると聞いては寝る譯にも行ませんので、テーブルに向つて一人でカルタ遊びをしてゐました。すると眞夜中頃になつて、ふいに恐ろしい物音がしたかと思ふと、突然悪魔が現れました。さうして兵隊が一人でカルタをしてゐるのを見て、ニヤリと氣味の悪い笑ひを洩らしました。しかし、兵隊は平氣でした。すると、悪魔はテーブルの向う側に坐つて、兵隊を相手にカルタを始めました。

そのうちに、チンと時計が一時を打ちました。それが悪魔の引つ込む時間でした。と、ふいに悪魔は手を伸ばして、兵隊の肘をつかまへて、八裂きにしようとしました。しかし、旨く行きませんでした。と云ふのはその時早く

『この背嚢の中へ飛び込め。』と、例の呪文を唱へてゐましたから……。すッと悪魔の姿は消えて、いつの間にか背嚢がムク〳〵ふくれてゐました。

それを見やりながら、兵隊は背嚢を寢床の下へ放り込んでぐつすり寢込んでしまひました。

明くる朝になると、水車小屋の主は、兵隊の身の上を案じて、そつと覗きに來ました。見ると、ピン〳〵生きてゐるではありませんか。びつくりすると一しよに、水車小屋の人達は大喜びで、悪魔を退治して下さつたお禮になんでも差し上げたいと申し出ましたが、兵隊はそれを斷つて、背嚢を肩に背負つて鍛冶屋の店へやつて行きました。さうして力一ぱいさん〴〵背嚢の上から大金槌で叩きつゞけました。中では、悪魔がキュウ〳〵云つて泣き出しました。いゝ加減な頃を見計らつて、兵隊は悪魔を出して許してやりました。

二

悪魔退治をしてから間もなく、兵隊は町へ出ました。聞くと或華族のお嬢さんが、大へんなカルタの名人だといふ噂でした。お嬢さんの相手をした者は、みんなカルタに負けてお金をすつかり捲き上げられてしまふといふ話でした。

カルタの好きな兵隊は、そのお嬢さんに、私と勝負をして見ませんか、と申し込んで見ました。お嬢さんはすぐ承知をして、二人でカルタを始めました。例によつて、お嬢さんが勝ちつゞけました。しかし、あとから〳〵殖えて行く兵隊の褒口をからにすることは到底出來ませんでした。

だん〳〵夜が更けるに從つて、二人とも疲れて來ました。お嬢さんはサッサとカルタをやめて、先きに寢てしまひました。その時兵隊もつい心を許して、三つの大事な〳〵授かり物をテーブルの上に置いたまゝ眠りました。

眼がさめて見ると、三つの品がいつの間にかなくなつてゐました。それは慥かにお嬢さんが盜んだに違ひないと兵隊は思ひましたが、盜むところを見てゐた譯ではなし、どうすることも出來ませんでした。仕方なく、がつかりして兵隊はそのお屋敷を出ました。

往來へ出ると、きれいな林檎が、日に照らされながら、一ぱい樹に成つてゐるのが眼にとまりました。つや〳〵と赤みのかゝつたその色を見ると、食べたくつてたまらなくなつて一つもぎつてムシャ〳〵半分ほど食べました。

それからまた歩き出しましたが、不思議なことに、往來の人達が、みんな自分の顏を見てはビックリして逃げ出すのでした。不思議に思つて、井戸へ行つて覗いて見ると、自分の頭に二本の角が生えてゐました。

驚いて引き返して來ると、道端に梨の樹があつて、おいし

さうな實がどつさり成つてゐました。それをもぎつて半分も食べたか食べないうちに、ポロリと角は落ちてしまひました。

『よし、俺の大事な大事な寶ものを盗んだお孃さんにこの林檎を食べさせてやらう。』

かう考へた兵隊は、急いでお孃さんのところへ引き返して來ると、自分の食べた殘りの林檎をお孃さんに食べさせました。お孃さんは

『うまい〳〵。』と云ひながら、みんな食べてしまひました。

すると、ニョキ〳〵ニョキと大きな角が頭の上に生えました。

お父さんの華族はこれを見て、腰を抜かさんばかりに驚いて、早速國ちゆうの醫者を呼び集めて、どうにかしてこの角を取る工夫はあるまいかと相談をかけました。で、大ぜいのお醫者達は、よく切れる刄物や鋸でゴリ〳〵二本の角を切り始めましたが、切つたところから、見る〳〵間にニョキ〳〵ニョキ〳〵新らしい角が生えるばかりで、どうにもなりませんでした。

お父さんの華族はこれを見て、腰を抜かさんばかりに驚いて、早速國ちゆうの醫者を呼び集めて、どうにかしてこの角を取る工夫はあるまいかと相談をかけました。で、大ぜいのお醫者達は、よく切れる刄物や鋸でゴリ〳〵二本の角を切り始めましたが、切つたところから、見る〳〵間にニョキ〳〵ニョキ〳〵新らしい角が生えるばかりで、どうにもなりませんでした。

お父さんの華族は仕方なく

『娘の角を取つてくれた者は娘のお聟さんにする。』

といふ廣告を出しました。これを見た兵隊はニコ〳〵笑ひながらやつて來て

『お孃さん、ちやァ私が直して上げたら、私の大事な三つの品を返してくれますか。』と聞きました。

すると、お孃さんは

『えゝ〳〵、角さへ取つて下されば、なんでも差し上まけます。』と答へました。

で、殘りの梨を出してお孃さんに食べさせました。すると見てゐる前でポロ〳〵角が二本とも落ちました。

或日、兵隊は『死』といふ神さまに逢ひました。

『この背嚢の中へ飛び込め。』と兵隊が云ふか云はないうちに『死』の神さまはすッと吸ひ込まれてしまひました。

『こりやァ面白いな。――死の神さまでござい。死の神さまはいかゞ。』

面白半分に、背嚢を肩にかついで、町を觸れて歩きました。しかし、誰も買はうと云ふものはありませんでした。

二三日さうして死の神樣を玩具にしてゐると、ふいに例の兵隊に三つの寶をくれた神さまが現れて

『おい〳〵、外のものはなんでも背嚢の中へ吸ひ込んでもいゝが、死の神さまだけはいけない。それがゐないと人間が死ぬことが出來ない。人間が死なないと、あんまり多過ぎて世界が狹くなつて困るのだ。』

かういふ神さまの仰せなので、仕方なしに、死の神さまを出してやりました。

その後兵隊はもうこの世の中にも飽きたので、一つ地獄めぐりをして見たいと思ひました。なんでも方角は北

の方だと聞いて、どん〳〵歩いて行きました。すると、成程地獄の門の前へ出ました。しかし、兵隊の姿を見ると、門を守つてゐた惡魔の子分が、顏の色をかへて奥へ駈け込んだかと思ふと、大あわてにあわててピッタリ門を締めてしまひました。

『おい〳〵、なぜ締めるのだ。何？　この背嚢がこはい？　大丈夫だ〳〵。今日は惡魔退治に來たのではない。』と、兵隊がいくら辭を云つて賴んでも、どうしても明けてくれませんでした。

『仕方がない。ぢやァ極樂へでも行つて見よう。』

さう思つて隣の極樂へ行つて見ました。見ると、セント・ピーターといふえらい坊さんが門番をしてゐました。

『おや。あなたのやうなえらいお坊さんが極樂では門番をしてゐるのですか。』と兵隊が聞くと、

『さうだ。極樂では、えらい人ほど低い役を務めるのだ。お前なんかは、世の中で上等兵だつたから、こゝへ來れば大將か元帥かだらうな。』

大將か元帥かと聞いて、兵隊は急に極樂に住みたくなりました。で、極樂の人間にして下さいと云つて賴むと、

『馬鹿を云ふな。お前はまだ生きてゐるではないか。極樂は死んだものゝ來るところだ。來たくば死んで來い。』と一言の下に叱られてしまひました。しかし、叱られたぐらゐではなか〳〵望みを捨てませんでした。

『どうかお願ひですから、門の中へ入れて下さい。セント・ピーター樣、お願ひでございます。』

三日三晩の間、兵隊は門のところに坐つて、大きな聲で呶鳴りつゞけました。流石のセント・ピーターもこれには根負けがして、とう〳〵

『では、仕方がない。入れてやらう。しかし、この門を一度はひつたが最後、世の中へ歸りたいと云つても返さぬぞ。』とよく念を押した上で、入れてやることになりました。

極樂の人民の數はあんまり多すぎてハッキリしたことは分りませんが、兎に角、生きたまゝで、極樂の門をはひつた者は昔にも今にも、恐くこの兵隊たつた一人でせう。

この間極樂から屆いた官報を見たら、この兵隊が大將から中將に出世をしたと書いてありました。（ゑはり）

ひ願の禮順

水谷まさる

（一）

むかし、信濃の國の信濃川のほとりに、梁瀬といふ渡し守が住んでゐました。おかみさんとの間に、一人の男の子があつて、都合三人で貧しい暮しをしてをりました。

渡し守は、生れつき正直で、深切で、信心ぶかいひとでした。殊にこのひとは、渡し守といふ自分の仕事が、世の中の多くのひとのためになる貴い仕事であると、深く信じてゐましたから、てんで貧乏のことなんぞ、心にかけてゐませんでした。暮しにさへさしつかへなければ、渡し錢なんぞ取りたくないとさへ思つてゐたくらゐでした。

ですから、朝は早くから、夜は遲くまで、このひとは渡し船を漕ぎました。日に燒けた黑く逞ましい胸をはだけて、ぐつと兩足を踏んばつて、そのふとい兩腕で櫓を押す姿の、何ことまあ男らしかつたことでせう。少しぐらゐ川波が立つ荒模樣の日でも、乘り合つたひとびとは、この姿を見ると安心して川を渡ることが出來ました。また、さうして櫓を押してゐる時、恐らくは自分の仕事の愉快さに、ついほゝゑむせゐでせう。その太い眉の荒くれた顏が、いかにも優しくひとびと

の眼にうつりました。ですから、ひとびとは渡し船から降りる時、

『い〻若者だなあ。』と、口にこそ云はないでも、心の中に繰り返したことでした。そして、二文の渡し錢を三文張りこむとか、または五文張りこむとかして、

『ちつとばかりだが、取つといてくんねえ。』と云ひながら、渡し守の大きな掌の中に、ちやら〳〵と落すのでした。

『いけませんよ。多くつちや濟まねえ、お返ししますべえ。』

そんな時、かう云つて、定つた渡し錢しかどうしても取らないので、ひとびとはふたたび感心せずにはゐられませんでした。

夜遲くなつて、人通りも絶えると、船を岸に繫いで小屋でくつろぎますが、もしも急な用事で川を渡りたいといふひとがあれば、少しも厭な顏をせずに、川を渡してやるのは毎度のことでした。

こんなふうでしたから、この渡し守の評判は、この地方では大そうよかつたのは、申すまでもありません。

（二）

ある初冬のうすら寒い日、老人の順禮が、この川岸をとぼとぼと歩いて來ました。やがて渡し場へ來ると、寒さうに肩をすぼめながら、渡し船に乘りました。そして、船縁にぐつたり身をもたせかけて、川風を厭ふやうにかがんでゐました。

船の中にはもう既に、五六人のひとびとが乘つてゐましたので、渡し守はこの順禮が乘り込んだのを機會に、船を出しました。

船が川の半ほどにも來ないうちに、順禮の老人は、お腹が痛いと云つて、悶えはじめました。

『そいつあ、いけねえ。』

渡し守は順禮の苦しみを知ると、いつもよりも急いで櫓を押しました。そして、岸に船が着くと、さつそく順禮をおぶつて、小屋の中へ連れて行きました。

『おつかあ。この方のめんだう見てくんろ、頼むぜ。お腹が痛みなさるんだからな。』

渡し守はおかみさんにさう云つて、あれこれとさしづをして、二人がかりで手ぬかりなく、深切に介抱いたしました。小屋の隅にかゝつてゐる竹筒の中の藥を飲ませたり、お腹を

温めるために、温石をつくつたり、寢床に寢かせてからも、いろ〳〵と慰めもし、いたはりもしました。

狹いむさ苦しい小屋、荒壁の隙間からは寒い川風も吹き込みました。入口に兩戸がはりにぶらさげてある筵をはためかして、はたはたと風が淋しい音をたてました。また布團はと云へば、綿のはみ出てゐる汚いぼつ〳〵した木綿の布團でした。けれど、この狹い小屋の中には、何ものにも比べることの出來ない、温かい心が充ち溢れてゐました。ひとはかうした温かい心に出遭ふ時、しみじみした嬉しい氣持を感じて、抑へても抑へ切れない涙の中に、たゞもう有難いといふ心でいつぱいになります。この順禮がさうでした。思ひがけない深切に出遭つたので、枕がぬれてしとるほど、とめどなく涙を流しながら、二人に向つてお禮を申しつゞけました。

『お互さまだあ。そんなにつゞけざまに、お禮を云つちやいけねえ。なあ順禮さん。それよか、氣を安めて寢てみちやどうだね。ひと寢りすると、お腹もめつきりよくなるだらうしなあ。』

渡し守は、順禮がお禮を云ひつゞけるのを、却つて氣の毒さうに、さう云ふのでした。

かうして深切に介抱されたのでしたが、順禮の病氣はあまりいゝ方には向きませんでした。二日三日とたつうちに、むしろ惡くなつて行くやうでした。渡し守はいつそう氣の毒に思つて、遠い道を隣村まで行つて、お醫者の藥を貰つて來たりしました。

（三）

ある日、順禮は渡し守に向つて、ていねいにお禮を言つてから、改めて一つの頼みがあるから、ぜひ聞き届けてほしいと云ひました。

『頼みと云ふのは、他でもありません。實はわたしも今度はいよ〳〵駄目だと思ひます。つきましては、この世を去るまでに、ぜひ女のひとの乳房から、ぢかにお乳を飲ませてほしいのでございます。妙なお願ひだと思召すでせうけれど、さうしなければわたしは、往生が遂げられません。一生のお願ひです。今まで深切になすつて下すつたのですから、どうぞこれを聞き届けて下さいませ。』

渡し守も心の中では、順禮が二三日うちにはこの世のひとではなくなるだらうと、ひそかに思つて心を痛めてゐました。出來ることならば、何なりとも願をかなへたいと、實は順禮から頼まれた時には、心を決めてゐたのでした。けれど、その願ひを聞いてみると、あまりにも意外なことなので、すぐには返事も出來ずに、たゞ腕を拱いて、ぢつと首を垂れてゐました。

順禮の顔には、不氣味な死の影が現れてゐました。頬はげつそりと落ち窪み、色はひどく青さめ、鼻の肉は落ちそけて、高く鼻すぢが骨張つて見えました。そして白い髭はうす汚くなつて、口のまはりによれ〳〵になつてゐました。そして、血の氣の失せた唇は、紫色に變つて、さも冷たさうに見えました。

この顔を胸近く近づけて、ふつくらした乳房をその口に含ませろといふことが、どんな女に出來るでせう？。氣味のわるさに心もおびえて、考へただけでもぞつとしてしまふでせう。それも、これが子供といふのならまだしも、六十は確かに越えてゐる老人、然も何處のひととも解らぬひとつ、もしも澤山なお禮でも出すといふのなら、あるひは慾を出して、眼をつぶつてゞも、やつてみるといふ女を、見つけることも出來ませう。けれど、少しのお禮さへも、出せさうにないこの順禮のために、誰がそれをするでせう。一生の願をかなへてやるのだから、功德になる、立派な善事だと、口を酸つぱくして勸めても、それをする女はありさうにもないことです。

渡し守とても、やはりさう思つたのでした。手にあまるこ

とだと思つたのでした。

『一生のお願ひです。どうぞわたしを喜ばして呉れる女のひとを、探して下さいませんか。わたしを迷はさずに、往生を遂げさせて呉れる女のひとを、探して下さいませんか。』

順禮の老人は、渡し守の默つてゐるのを見ると、せつなさうに、またも頼むのでありました。

（四）

その時、渡し守はついと座を立つて、小屋の外で働いてゐるおかみさんのところへ來ました。そして、順禮の老人の言つたことを、繰り返して云ひきかせてから、

『お前に頼むのも氣の毒だけど、他の女が承知してくれることぢやねえ。ひと一人の一生の願だ。今までせつかく世話したもんだ。なあ頼むぜ。』と、云ひました。

『他のことなら厭はねえけど、そればかりは許してくんされ、この乳房は、坊やのもんだに。』

『でも一生の願だものな。考へても身ぶるひすることだけんど、これも何かの因緣だ。きつぱりやつてくんろよ。』

長い間そんなふうに、言葉を盡して夫から頼まれましたので、たうとうおかみさんは承知しました。けれど、心配さうな顔をして、襟をはだけて白いふくよかな乳房を出して、溜息をつきながら眺めてゐました。

『有難い。承知してくれたら、早い方がえゝぞ。』

夫から促がされるので、おかみさんは夫といつしよに順禮の老人のところへ來ました。

『うちの女房に承知させました。』

『さうでしたか。それは何より有難いことです。これでわた

しも浮ばれます。

老人は嬉しさうに涙ぐんで云ひました。

おかみさんは、老人の顔のところに坐つて胸をひろげました。そして、右手で右の乳房を掴んで、身體を屈めるやうにして、乳房を老人の口のほとりへ持つて行きました。老人は枕からすこし頭をあげて、顎を突き出すやうにしながら、黒い乳首に口を持つて行きました。

その時、ふいに老人は、がくりと頭を枕に落して、

「それでよい。それでよい。」と云ひながら、さめ〴〵と泣きました。

「どうしたんです。どうしたんです。」

思はず渡し守はさう叫んで、老人の傍ににじり寄りました。

「あゝ許して下さい。でも仕方がなかつたのです。試すよりほか仕方がなかつたのです。けれど、もう解りました。」と、老人は、涙が咽喉へ流れこむせるか、苦しさうに咳きこみながら、途切れ〴〵に云ひました。

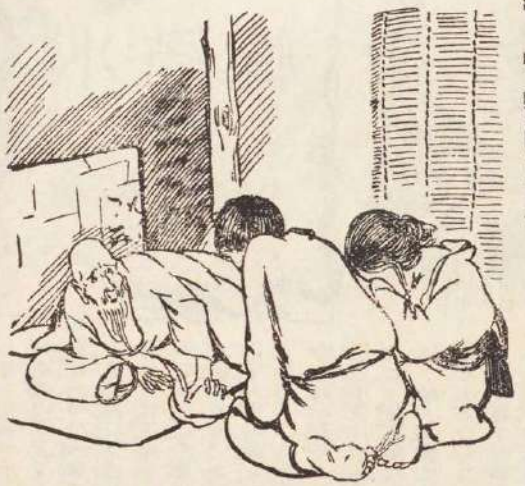
おかみさんは、老人の背中を撫で擦りました。あまり突然だつたのでまだ乳房をふところへ蔵ふのも忘れてゐました。

「試しなすつたつて？　何を試しなすつたのです？。」と、渡し守は驚いて云ひました。

（五）

「實はわたしは腹巻の中に、大金を持つてゐるのです。あなた方ふたりの深切には、すつかり感じてゐましたけれど、もしかしたらわたしが、大金を持つてゐるのを知つて、深切らしく介抱して下すつたのかとも疑ひましたので、乳房を口に含んで乳が飲みたいなぞと、強ひて申しあげて、お心を試したのです。一生の願だと云へば、憫れんで女を探して來て下さるかどうか、それに依つてお心を知らうと思つたのです。ところが、あなたは自分のおかみさんを說き勸めて下さいました。出來ないことです。これでもつて、わたしはあなた方ふたりの心を知りました。前世につながる因緣です。決して他人とは思ひません。どうぞ死にましたらばこの金で……。」と、老人はきら〴〵光る小判を出して、「わたしの跡を葬つて下さい。わたしは誰一人として身よりのない、ほんとの一人ぼつちです。ですから殘りの金は、全部あなた方のお役に立てゝ下さいませ。」と、涙ながらに云ひました。

渡し守夫婦は、意外なことを聞かされ、ついぞ見たこともない大金を、眼の前に見たので、たゞもう驚いて顏を見合せました。いつの間にか、日は暮れてしまつて、小屋の中は薄暗くなつてしまひました。親を慕ふ小雉子でせう。裏の藪の方で淋しく鳴く聲が聞えました。



老人が息を引き取つたのは、それから間もないことでした。老人は滿足して、この深切な渡し守夫婦に抱かれたまゝ、安らかな長い眠りにつきました。夫婦は自分たちの父が死んだやうな氣がしました。夫婦はこの不幸な順禮のために、熱い涙を流しました。

ふと、おかみさんは、老人の靜かな顏に嬉しさうな笑ひがあるのを見て、かう云ひました。

「もしかしたら、この御老人は、佛樣の御化身ぢやないでせうか。」

「さうかも知れない。」

渡し守はたつた一言、さう云つたばかりでした。

だが、もちろんその順禮の老人は、たゞの老人であつて、佛樣が假りに姿をお現しになつたのでもありません。

お話のしめくゝりとしては、佛樣が假りに姿を現したのだと云つた方が、ひよつとしたらお話らしくてよいかも知れませんが、さうでないところに却つて、この地上で起つた事件としての、強くわたしたちの心をうつものが、含まれてゐるのではないのでせうか。（えほり）

昔、支那がまだ宋の國とよばれてゐた時代のことです。山東の濟州といふ處に一つの水郷がありました。四方數十里の間には水が流れてゐて、場所によつては廣々として入江のやうな所もあれば、葭や蘆の生ひ茂つた沼のやうな處もあり、また急流が激しく走つてゐて人馬の通らないやうな處もあるのでした。この水で圍まれた土地の名を梁山泊と人々はよんでゐました。梁山泊の中央には宛子城寨兒洼と云つて、又た一層嶮岨な山が聳えてゐるのでした。洵に天然自然と要害堅固に出來てゐる土地でしたから、もしこの山の中に立て籠つて戦を開くとなつたならばその時分の武器では容易に落すことは出來ないやうな場所でした。

丁度宋の神宗皇帝といふ方が、十八年天子の位についてをられて、太子の哲宗と云ふ方に、御代を讓られてから數年後のことです。この梁山泊に、いつとはなく追々と天下の豪傑が集つて來て、その頭株の人だけで百八人の數に達しました。その配下にはまた何千と云ふ人達がありまして、その人々が時々山を下つて、近隣の國守や大名達を脅かして金銀や糧食の類を奪ひ取るのでしたが、それはもう山賊とか物取とか云ふやうなこそ〳〵したやり方ではなく、公然と軍を率ゐて攻め從へると云ふやうな、まるで國と國との戦をするやうに堂々とした態度でやつて來るのでした。それだからその附近の國守達は、梁山泊を忌み嫌ふことは疫病神よりひどいのでしたが、何しろ向ふには、どれもこれも武藝に秀でた棟梁が百八人もあり、その中には智多星吳用と云ふような軍師もついてゐるし、その上には及時雨宋江といふえらい德の高い大將があつて山塞を治めてゐるのですから、どうしてもかうしても手出をすることさへ出來ないのでした。それだから梁山泊の勢といふものは、日に日に盛になつて來て、一時は宋の國の中に、また一つ別な國が出來上つた樣な有樣だつたのです。

然しこの梁山泊に集つてゐた人々の中には、最初から盜人だつたり山賊だつたりと云ふやうな卑しい氣持の人は一人もありませんでした。丁度この時分、宋の宮廷には高大尉と云ふ大變心のねぢけた人が、天子樣のお氣に入りとなつてゐて、この男が何でも自分の得となり、自分の爲になるやうなことばかり喜んで、さういふことをする人人ばかりを好いやうに天子樣に執り成し、どんなに心の正しい善い人でも、自分の氣に入らなければ讒言をして斥けると云ふ風だつたものですから、宋の天下は全然腐れ切つてしまつてゐたのです。心の正しい立派な人でも、長官に賄賂を使はなければ、何かと難癖をつけられ、怒つてそれに刃向へばすぐに島流しにされるといふ有樣で、宛で世の中はめちや〳〵になつてしまつてゐたのです。

この梁山泊に集つた人達も矢張りさうでした。その人達はみんな立派な、武藝にも達し、學問も出來る人達ばかりだつたのですが、素々自分の心が正しく賄賂を使つたり上官におべつかを使はなかつたり、惡い町役人を懲めたりした爲に、皆其職を奪はれたり土地を追はれたり殺されさうになつたりして、漸うこゝに逃げ落ちて來た人ばかりでした。それだからその百八人の人達の間と云ふものは、義理固く、まるで兄弟のやうに仲よく助け合つて暮してゐるので、その勢力は非常に強く、自分の欲得ばかり考へてゐる者達がいくら攻めて來ても、どうしてもこの梁山泊を攻め落すことは出來なかつたのでした。百八人の人達の傳記はどれもこれも勇ましくもあれば、また時

に涙のこぼれるやうにかなしい物語やに満ちてゐます。が今こゝには、その中でも取分け興味に富んだ人達の話を選んで皆さんにお話する事としませう。

黒旋風李逵

黒旋風李逵　梁山泊の豪傑の中でも力の強いことは第一流の勇者で、殊に戦となると大きな二挺の斧を両手に提げて敵陣の中に切り込めば、人を切ること草の如しと云ふやうな人でしたもと沂州沂水縣百丈村といふ所に生れた人で、その姿を一寸こゝに書いてみると、顔の色は黒熊のやうに黒く、身體はまるで鐵で作つた牛のやうに力瘤がでこぼこと張つてゐました。李逵が怒つた時には髪の毛が鑪の刷毛のやうに逆立つて、人を睨む眼の光は日月のやうに凄く輝くのでした。眉毛は兩ながら倒さになるほどつり上り、蓬々と生えた頭髪は大風になびく草のやうに二つに分れ、吠えたける聲はまるで鐘を鳴したやうに響いて、馳け進む勢は丁度虎のやうに凄じかつたのです。それだから李逵がまだその生れ村にゐた頃には、村人は李逵の事を鐵牛鐵牛と呼んで、誰も彼も恐れてゐました。

李逵はこんなに恐ろしい顔をした、力の強い人でしたけれども、その心だては宛で赤ん坊のやうに無邪氣で正直でした。ひよつとした事にでも、強い者が弱い者をいぢめたとか、誰かが狡いいやな悪いことをしたとか云ふ話を聞くと、すぐに例の鑪のやうな聲を張り揚げて吸鳴りつけ、それでも肯かない時には、蠟燭のような大きな拳で一撃を喰はせると、大抵の人は血を吐いて仆れてしまふのでした。ですから李逵が怒つて人を殺したことは澤山ありますが、その動機はいつでも正義の爲に闘ふのでありまして、決して自分ばかりが得をしようとか、また卑しい自分の慾情を満足させようとした爲に起つたことは一度もない位で、全く正しい氣持の好い人だつたのです。尤も缺點を云へば、餘り氣が短いものですから、自分の眼に氣に入らないことを見ると、その原因も解らない中に怒つてしまつたり、それからまた餘り正直すぎるものですから、悪い奴に欺されたり爛てられたりして、つい失錯をする事が度々ありました。けれども根がさう云ふ風に正直で無邪氣な人ですから後に到つて梁山泊に入つてからも、誰からも李逵は愛せられ、そしてまたその缺點も大抵の場合には許されてゐたのです。

李逵がまだ梁山泊へ入らない前には一度國で人を殺した爲に牢へ入れられそれから大赦に逢つて許されると沂水村を出てしまつて、江州の都江府といふ處に來て、押牢節級戴院長戴宗といふ人の世話になつてゐました。

この戴宗といふ人も後になつて矢張り梁山泊に入つて豪傑の中の一員となつた人で、なかなか氣概のあるえらい人でした、それでこの人は不思議な術を知つてゐまして、急ぎの用事のある時には、兩足に甲馬といふものをくゝりつけて神行の法といふのを行ふと、一日に數十里の道を行く事が出來、更にもう二つの甲馬をつけるとその倍も飛んで行く事が出來るので、この人の事を、神行太保戴宗と呼び慣してゐました。

梁山泊に百八人の豪傑が集るよりまだ少し前のことです。ある時この戴宗の處へ山東の及時雨宋江といふ人が尋ねて來ました。宋江は國にゐた頃は押司と云ふ低い役を勤めてゐたのですが生れつき非常に慈悲深く、義侠心に富んでゐる人なので、その附近の貧しい人で宋江の世話にならない人は一人もなかつた位ですし、また氣概のある人

で、惡い役人の爲にひどい目に遭されて、宋江のとこへ尋ねて來た人などはいつでも大切に世話をした上に色々と面倒を見たり、旅費を與へたりしたものですから、山東の及時雨宋江と云ふ名前はその頃の天下に、大臣の名前よりも高く響き渡つて、凡ゆる豪傑がまだ見ない及時雨宋江をまるで自分の兄か親のやうに慕つてゐました。所がこの宋江も、矢張りさう云ふ腐れ切つた時節だつたものですから、張三と云ふ惡い金持の息子の爲にある事から陷れられて、裁判に訴へたり何かしたのですが、張三は役人に賄賂を遣つてゐる爲に、當然正しい理由のある宋江も遂に寃の罪に陷されて、遠い國へ流されることゝなりました。

けれども宋江は前にも云つたやうに大變德の高い人でしたから、何處へ行つても、山東の及時雨宋江と云へば、氣概のある人達が大切にしてくれるので、道中で色々な難儀に遭ひながらも危くなるとはさう云ふ人達に助けられて、江州までやつて來ました。そしてこの江州の戴宗に宛て、宋江の弟のやうになつてゐた智多星吳用と云ふ人の手紙を持つて來てゐたものですから戴宗は宋江に逢ふと喜んで、

『山東の及時雨宋江の名は、かねゝ承つて居りました。一生の中に一度でもお目にかゝれゝば幸と思つてゐた位なのに、お尋ね下さつてこんな嬉しいことはありません。』と、下にもおかない位大切にしました。宋江も氣をつけて戴宗の態度を見てゐますと、額は闊闊として氣の大きいことを示し、口は方にして目は秀で、眉は清く全く威風凜々とした一個の丈夫なので、この人に逢つたことを大變に喜んで、

『吳用からかねて聞いてゐましたが、あなたは神行の法と云ふ大變珍しい術を御存じださうですね。』などと話しながら、二人は一度逢つたゞけでもう兄弟のやうに親くなつて居ました。それから二人は少時の間、宋の朝廷が奸臣高賚の爲に亂されてゐることを嘆き合つたり、宋江はまたこの江州へ來るまでには、幾度か惡者の爲に殺されさうになつた事だの、つい四五日前にも夜潯陽江を渡らうとして、船守の爲に殺されさうになつた事や、その船守が船火兒張橫と云ふ豪傑であつた事などを語りました。そして今はこの宋の朝廷に不平を抱いてゐる豪傑が到る處に澤山あることを話し合つて、二人は何となく心強く感じたりしてゐました。その中に戴宗が宋江に向つて、

『そんなに苦勞を重ねて來られたのなら、此處で少しは保養をしていらしつたら好いでせう。此の城を出ると、もうぢきに潯陽江です。そのあたりの景色は何とも云へないほど綺麗ですし、江のほとりには昔白樂天が來て遊んだと云ふ琵琶亭と云ふ家もあります。これから行つて美しい景色でも眺めながら、お酒でも飲りませんか。』と、すゝめました。

『有難う。私も是非この邊の景色を見ておきたいと思つてゐた所です』と宋江も答へました。そこで二人は連れ立つて城を出て、潯陽江のほとりに來て琵琶亭と云ふ家によりました。滿々と湛へた水は、家の下から遙か遠く天の際まで連り、澄み切つた水の面には蒼空を映してゐる上に、小さな漁船が點點と浮んでゐて、世にも美しい景色でした。宋江は長い間の苦みもすつかり忘れたやうに喜んで、戴宗と何か語りながらその景色を眺めてゐました。その時表の方で、大きな聲がして、『院長戴宗が來てをられるだらう』と呶鳴りながら入つて來るものがありました。宋江は何者が來たのかと思つて足音のする方を振り返つて見ますと、顏の色

は鍼のやうに黒く髯蓬々とした山男のやうな形をした男が座敷のそばに突つ立つてこちらを睨めてゐます。

『こら李逵、その有様は何だ。客人が來てをられるのに禮もせずに、いきなり飛び込んで來る奴があるか。殊に此れはお前もかねゞ〳〵お目にかゝりたいと口癖のやうに言つてゐた方ではないか。』と、載宗がいきなり咎めますと、李逵は口を尖らして、

『私がかねてお訪ねしたいと思つてゐたのは、山東の及時雨宋江だけだ。この男は宋江でも何でもないのにそんなに敬ぶことはありますまい。』と、不服さうに答へました。

『何を馬鹿げたことをいつてゐるのだ。これが本當に宋江なのに、今お前はお目にかゝらなければ復と云ふ機會はなくなつてしまふぞ。』と、載宋が重ねて云ふと、

『もしそれが本當の宋江ならば私はどんなにも禮拜するが、ひよつとしたら騙かれるのではないか知ら。』と、李逵は中中信じませんでした。

その時宋江は進み出て、

『いや私は決して貴方から敬はれるような人間ではないが、山東の宋江といふのは私のことです。』と云ひました。

すると李逵ば手を拍つて躍り上るやうに喜んで、

『あゝ本當にさうでしたか。あなたが自分で早くさう云つて下さればこんな失禮はしなかつたのに。』と云ふと、遙か後の方に退いて地に手をつかないばかりにして、心にある限りの敬意を表しました。宋江もこれに對して禮をしてから、

『さあ豪傑、もう禮はやめてこちらへ來て一緒に酒でも飲んで下さい。』と自分の傍の椅子をすゝめました。すると李逵は喜んでそばに行つて、

『あゝ今日ほど私に嬉しい事はない。

永年慕つてゐた方にお目にかゝれて、こんな嬉しいことがまたとあらうとは思へない。院長今日は私に大茶碗で飲むことを許して下さい。』と云ひながら眞黒な顔に、子供のやうな無邪氣な笑を浮べながら、お酒をがぶ〳〵と飲んでゐました。その時宋江が、

『どうですこの邊に新しい魚はあるのでせうか。』と尋ねました。

『えゝありますとも、御覽の通りこの江中に浮んでゐる船は皆な漁船です。昔から江州は魚米の地と云はれてゐる位で、魚といへばどんな種類のものでもないことはない位です。』と載宗が答へました。

『それは大變有難い、それなら何か鮮しい魚を買はせて氣持よくお酒を飲み直しませう。』

と宋江がいつたので、載宗は店の主人を呼んで魚を買つて來てくれと頼みました。すると酒店の主人は、

『御覽の通りあゝして岸に船は澤山について居りますが、此邊では問屋が來て値段をきめるまでは一切賣らない規定になつてをります。問屋ももうぢき參りま　でせうから、少時お待ち下さいまし。』と氣の毒さうに云ひました。

するとこれを聞いてゐた李逵は、俄かに躍り上つて、

『そんなバカな話があるか、魚があるなら私が行つて買つて來る。』と大きな聲で呶鳴りました、

『それほど急ぐ事でもないのだ。問屋が來てから買つても間に合はないやうなことはないからまあお前は靜かにしてゐなさい。』と載宗がなだめましたが一徹な李逵は、

『いや私が行けばきつと賣らして見せる。』と云ひ終ると、すぐに店を馳け出して行きました。李逵はかねゞ〳〵慕つてゐた宋江が來たのに貧乏で何も御馳走することが出來ないので殘念に思つ

てゐた所が、魚の話が出たので、せめて好いお魚でも買つて宋江に喰べさせたいと思つたのでした。

李逵は急いで岸邊のとこに來て見ますと、澤山の漁船が楊柳の下にもやひをつな　で、漁夫等は魚を枕にして眠つてゐるものもあれば、柳の樹蔭で網をすいてゐるものもあるし、水に入つて泳いでゐるものもありました。丁度六月半ば頃の時候で、夕暮近くなつてゐたので、紅くなつた日はもう大江のあなたの山の端に沈まうとして、きらきらとした水の上に赤々と輝いてゐましたが、問屋の主人がまだ來ない爲に魚の買手は岸邊に澤山集つてゐましたが、みんな退屈さうな顏をして待ちほうけてゐる所でした。

李逵はすぐに船のそばに行つて、『誰でも好いから、大きな鯉を持つてゐるものは賣つてくれ。』と呶鳴りました。すると船の中の漁師は、

『まだ問屋が來ないので、賣ることが出來ないでみんなかうして待つてゐるとこです。あゝして岸邊にも小賣の魚屋が澤山待つてゐる位だから駄目です。』と答へました。

『何だ、魚さへあれば問屋なんか待つてゐることがあるか、大きな鯉が二尾あれば好いのだから早く賣つてくれ。』と李逵は一層大きな聲で呶鳴りました。

『そんなことを云つても駄目です。このへんの習慣として、問屋が來てから船神樣にお神酒を上げて、それから魚を取り出すのです。それだから問屋の來ない中はとても駄目だ。』

と漁師は遠慮もなく斷りました。李逵はそれを聞くともうカッと怒つてしまつて、

『よし賣らなければ俺が取る。』と云ふより早く一艘の船に飛び乘りました。鐵牛と云はれたやうな李逵が眼を瞋らし、鬚を逆立てた姿は物凄いので、漁

師はあはてゝ陸に飛び上つて、『何を亂暴なことをする。』と呶鳴りましたが、

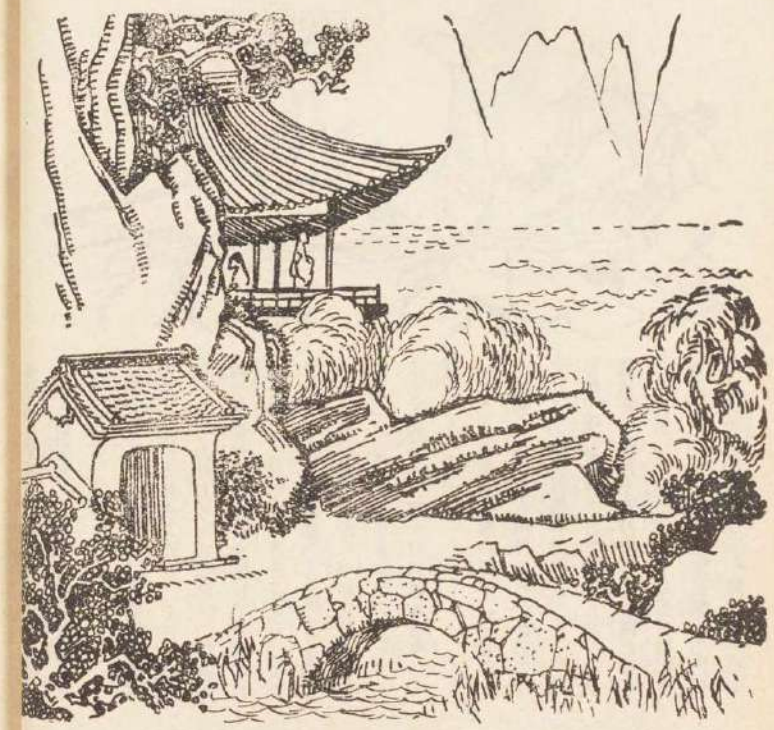
『亂暴もくそもあるか。』と李逵は船底の板を上げて見ましたが、そこには魚は一尾もありませんでした。この邊の船では船尾の方に穴を明けて、釣つた魚を活して持つてくるやうになつてゐたのですが、李逵はそんなことを知らないから、眞中ばかり明けて見ても魚を見つけることは出來ないのでした。そして魚のない事が彼の氣をますゝ荒立てました。

『何だこんな魚もない船が。』と云ふと次の船に飛び移り飛び移りしたので、八九人の漁師は陸に逃け上つて、長い竹棹で李逵を打たうとしましたが、李逵はその竹棹を奪ひ取ると一纏めにしてへし折つて雷のやうな聲で呶鳴りました。これを見ると岸に繁いであつた八九十艘の漁船は、一時にもやひを解いて沖の方へ逃け出して行きました。李逵はもう追かけることも出來ないので、口惜しがつて陸へ飛び上ると折れた竹竿を持つて漁師を擲りつけ、はてはその邊に集つてゐた魚商人までを毆り散らして八つ當りに暴れ廻り出したのです。鐵牛の怒つた姿は實に物凄いばかりでした。この時丁度向ふの方から一人の男が急いでやつて來ましたが李逵に追ひ廻されてゐる人達はそれを見ると、

『あゝ問屋の旦那が來た。』と云つてその方に集つて行きました。そして、

『旦那の來方が遲つたものですから、あの大きな亂暴者が暴れ廻つてこれこれです。』と皆なが一度に今の事を話しました。

『よしその亂暴者は俺が押へてやる。』と問屋の主人は李逵の傍に馳けつけて來て、振り上げて打たうとした竹棹を引つたくつて、



「何故貴樣はそんな亂暴をするのだ。人の商賣の邪魔をしないで、早くあつちへ行け。」と罵りました。李逵はふと氣がついて見ると、身の丈け六尺近くもある、顏の白い威風のある男が眼の前に立つてゐましたので、

「貴樣も邪魔するか。」と云ふより早くその男の頸を左の手で押へてしまひました。間髪は李逵に押へられながら、足を上げて、三度まで李逵を蹴らうとしましたが、水牛のやうな大力の李逵に押へられては身の働きが自由を得ないので、足は李逵に届きませんでした。

李逵は左の手で頸を壓へ、右の手でその男の肩骨を力任せに打ちました。けれどもその男は、たゞ苦しさうに眼をぱち〳〵させるばかりで、どうする事も出來なかつたのです。もう少し李逵に殴らせておいたら、その男は殺されてしまふかも知れませんでしたがその時宋江と戴宗が騒ぎを聞きつけて

駆けて來て、李逵を抑へてやつとその手を放させました。

「馬鹿な事をするではないか、もしこの人を殺したら、お前も殺されなければならない。」

と戴宗がたしなめました。

「院長がそんなことを云ふのは、まぎぞへを喰つたら大變と思ふからでせう人を殺せば、私が死ぬだけだから安心して下さい。」と李逵はまだぶん〳〵怒つてゐました。さつきの男は李逵が手を放した時に、飛ぶやうに逃げて行つてしまつたので、宋江と戴宗は李逵をなだめ〳〵琵琶亭の方へ歸らうと歩いて行きましたが、凡そ二三十歩も進んだと思ふと、

「やい馬鹿者、先刻の喧嘩の勝負もつけずに歸るのか。」と後の方から呶鳴るものがあるので、振り返つて見るとさきの男が、今度は素裸になつて、小舟に乘つて岸邊の所に船をつけて罵つてゐるのでした。がその男の身體の色の白さと云つたら、雪のやうに眞白で、紅い夕陽を浴びて黄々とした水の上に立つて居る有樣は畫のやうに綺麗で、宋江も戴宗も思はず見惚れる位でした然し李逵はそんなことに頓着はありません。いきなり岸邊に駈けよると、雷のやうな聲で、

「生意氣な事を云ふな、口惜しければ陸に上つて勝負しろ。」と呶鳴りながら力足を踏みしめて罵り返しました。けれどもその男はそんな事は耳にも入らない風をして、いきなり李逵の股のあたりを竹棹でつき破りました。短氣な李逵は火のやうに怒つて、前後を忘れていきなり船の上に飛び乘つて、その男に組みつかうとしましたが、男はひらりと身體を躱すと棹を岸にあてゝ、ぐつと一押し押したので、無心の船は悠々江中に浮び出しました。李逵も多少は水心のあるものでしたが、水の中では無論陸のやうに働くことが出來ないので、ぎよつとしてゐますと、

「どうだ、驚いたか。」とかの男は李逵を押へて、

「先刻俺をよくも殴つたな。こんどは拳の喧嘩をやめて、貴樣にうんと水を呑ましてやる。」と云ひながら、兩足を突つ張つて船を烈しくゆすつたものですから、小さな船はやがてざぶりと覆つてしまひました。宋江と戴宗は岸邊に立つてどうなることかと心配してゐますと、その周圍に集つた大勢の漁師や商人達は、

「どうだ、あの人に逢つちや、水の中ではどうすることも出來ないだらう。死なないまでも隣分水を呑まされることだらう。」とさつき殴られたものですから愉快さうに話し合つてゐました。

水の上はと見ると彼の男は、李逵をつかまへて、水の底深く押し込んだと見るとまた引き上げて苦めてゐます。

李逵も苦しまぎれに一心に戰つて組みつほぐれつしてゐますが、一人は身體が雪より白く、一人は鐵よりも眞黑な二人が、蒼く澄んだ波の間に浮きつ沈みつ組合つてゐる有樣は、物凄くもまた美しい有樣でした。然し何と云つても宋逵は水中の勇士ではありませんでした。やがて段々と疲れて來ると、白い男は眞黑な李逵を引き上げて息をつかせるとは、又た押し込んで水を呑ませ、まるで玩弄物のやうに扱つてゐるのです。宋江は之れを見ると氣を揉んで、傍にゐた人に、

『あの色の白い人はなんと云ふ人です。』と尋ねますと、

『あれは張順です。』と答へました。宋江はその時先夜逢つた船火兒張橫が自分の弟に浪裡白跳張順といふものがゐて、水の中に三日三晩とも浸つてゐることが出來る不思議な男があると云ふので、手紙を書いて賈つた事を思ひ出して、急いで戴宗にその事を話しました。戴宗はこれを聞くとすぐに水の方に向つて大きな聲を揚げて、

『張豪傑少し待つてくれ。今あなたに手紙を持つて來た人があるから、兎に角陸へ上つてくれ。』と喚鳴りました。張順の方では土地の役人である戴宗の顏も知つてゐるし、大變好い人だと平素から慕つてゐたものですから、すぐに李逵を放して陸に上つて來て戴宗に禮をしました。すると戴宗は、

『あなたに引合せて喜ばせる人があるからとも角あの男を助けてくれ。あなたの兄さんからの手紙もある。』と云ひましたので、張順は一禮するとまた水の中に入つて行きました。李逵はもう夢中になつて浮きつ沈みつもがいて苦んでゐましたが、張順は李逵の腰を抱へると悠々と岸の方へ歸つて來ました。その泳ぎ方がまた膽の邊まで水から上に出て、まるで水の上を歩いて

ゐるやうなので、岸邊の人々は誰もその妙手に思はず聲を揚げてほめた位でした。岸邊に泳ぎつくと張順は李逵の腰を抱へて陸に投り上げました。宋江はこれを見て、全く浪裡白跳と云ふ綽名が本當だと心に驚いて居りました。やがて張順も陸に上つて來ましたが、李逵は苦しさうに、潯山の水を何度も吐いてゐました。

それから四人は連れ立つて琵琶亭に歸つて來て戴宗は宋江を張順に引合せました。張順は驚いて地上に身をひれ伏して禮をしました。

戴宗はまた李逵が宋江の爲に魚を取りに行つた事を話すと、張順は益々感つたやうな顏をして、

『さう云ふことと知らなかつたものだから。』

と頭を掻いてゐました。そして李逵ともすぐに仲直りをして兄弟のやうになつてしまひました。すると李逵は張順に

『どうだお前は俺に飽くまで水を飲ませてさぞ滿足たつたらう。』と云つて笑ひました。

『いやお前こそ私をさんざ毆つてさぞ嘔しかつたらう。』と云つて張順も笑ひました。

『それならこれから陸にある時は決して俺を馬鹿にするな。』とまた李逵がいふと、

『水の中では危いから、俺と一緒に決して水のそばへ行くな。』と張順がいつたので、宋江も戴宗も大きな聲を揚げて笑ひました。

『然し、雪のやうに白い男に鐵のやうに黑い人が蒼い波の間で戰ふのは綺麗だつた。』と云つて宋江がほめたので、二人はきまりの惡さうに恐縮してしまひました。それから間もなく、李逵も張順も戴宗も、宋江に從つて梁山泊に入つてしまつたのです。（つゞく）

辨慶の鐘

（名所めぐり童話の二）

野口雨情

むかし
むかしの
ことだちけ
鐘から
鏡が
出ただちけ

むかし
むかしの
ことだちけ
辨慶さんが
かづいた
鐘だちけ

（近江國三井寺に、武藏坊辨慶が比叡山に撞き行きしと云ふ梵鐘あり。「辨慶の鐘」と名づく。この鐘より鐘出しとの傳說もあり。）

童謡

野口雨情選

《第一部》

馬

神戸市　笠間まさ路

谷間の朝は
うすあかり
馬はしょんぼり
既から
長い顔だし
何思ふ
石ころ坂や
七まがり
里まで遠い
いやな道
馬のお目は
濡れてます。

だんだら畑

東京府　北越　照

だんだら畑を
のぼつたら、
畑で月が
待つてるた。

だんだら畑を
めぐつたら
月もあとから
ついて來た。

だんだら畑の
ほそみちで
月と一しよに
ひとやすみ。

月のない夜

長野県　矢下清栄

月のない夜のかなしさよ、
親にはぐれた雁がなく、
親のゆくへは見えもせず、
はぐれたこどもの雁がなく。

風の子さん

神戸市　倉内みちる

面白い
風の子さん
族でもなんでも
ゆさぶつてる

辛捧のいゝ
風の子さん
一日あかずに
ゆさぶつてる

お留守居

東京府　桑原長太郎

母さん母さん
どこへ行つた
までども歸らぬ
さびしいな

まんまるお月さん
出たけれど
やつぱり母さん
見えなんだ

くらやみの蟲

栃木県　田中良泉

くらやみの蟲が
ないてるよ
チロチロチチロと
ないてるよ
くらくなつたので
さびしのか

燕

東京市　川村二花

秋が來たとて燕は
遠い南のふるさとへ
昨日歸つて
行きました、

私が學校へ
行つた留守
遠い南のふるさとへ
だまつて歸つて
行きました。

さくらんぼ

長野県　河野陽路詩

驛の前のさくらぼ
乘客が下りるたんび
赤い顔しちや葉蔭で見てる。

《第二部》

をぢさん（賞）

茨城縣　相澤　光

俺ぢのをぢさん
びよきになつたら
どつからどこまで
やせつちやつた。

新いふろしき（賞）

愛知縣　梅村登美子

新しいふろしき
綺麗なふろしき
赤い絲で縫ほか
白い絲で縫ほか
何つゝも。

すゞらんの花

神戸市　岡田靜香

すゞらんの花、可愛い花ね
私はこの花大好よ
鈴をぶらくぶらさゆて
おもたさうに見えますわ
大きな風が吹いたなら
さぞいゝ音がするでせう。

ざくろのおうち

千葉縣　田邊信一郎

ざくろのおうちで
雨戸をあけた
細目にあけた
お顔の赤い
兄弟が
みんな仲よく
ねむつてら

ね　こ

山梨縣　丸茂あい子

ゆふがたあそびへいつて
かへりにみた
小さなねこが
にやんにやん
ないてるた
かはいゝこねこ
わたしがいつたら
なほないた

みの蟲

香川縣　松本タキ

すぎの木にぶらんこした
みの蟲が
雨ふらぬのにみのつけて
みのゝ中からくび出して
あしたはお天氣かいの
雨かいの
しあんがほして
空みて居た

ひぐらし

神奈川縣　上原慶藏

夕やけ小やけ
赤い空
どこでなくのか
かなかなと、
ひぐらし蟬が鳴て居る
ひぐらし蟬の鳴くころに、
海の沖にも日が暮る、
お山の上にも日が暮る。

風に衣

東京府　薄倉みね

すみちやんのだらしなし
おべゝがだんらり
帶がだんらり
風に衣を着けたやう
風に衣を着けたやう

小さなハへ

不明　土屋有人

馬の鼻に
住んで居る
小さなはへは
ぶんと泣く
馬が憤に
寢た時は
鼻をせゝつて大るばり
馬が鼻いき
ふとすれば
吹きとばされてお助けよ。

幼年詩

若山牧水選

こほろぎ（賞）

神戸市小野柄小學校 尋四　長田　重美

こうろぎぴよん〳〵
とび出した
石の中から
とび出した。

評、いかにも黑い小さな蟲がとんでゐやうだ。（牧水）

うちのねこ（賞）

和歌山縣東牟婁郡田原校尋六　阪口きくゑ

ねこがなく
ねこがなく
あれは内のねこだ
わたしの方へ
近づいてくる

評、ねこのなきごへが聞えます。（牧水）

すぎの木（賞）

和歌山縣那賀郡南野上校尋四　中尾　節子

うちのうらの
すぎの木に
くものすが
たくさんある
あさはよつゆで
よくみえる

評　朝の美しい蜜色の寫生。（牧水）

すゝき

和歌山縣東牟婁郡明神校尋三　宮本シマノ

のはらのなかの
すゝきのほ
たつた一ほん
うごいてる
のはらのなかの
すゝきのほ

評、さみしかないのか、すゝきのほ。（牧水）

綴方

編輯部選

夕立の夜（賞）

若狹國大飯郡高濱校　松本　せい

夕方から降りかけた夕立はひどい勢であたりをたゝきつけた。往來の砂を流して小石を出し、小さな草は根がとれはしまいかと思ふ程である。時々すぐ上でゴロッ〳〵〳〵と雷が鳴る。その度に妹や弟がキャッ〳〵言つてきようとがる。

夕飯がすむと皆は緣に出た。外は眞黑で何も見えない。たゞザァ〳〵〳〵と降る雨の音ばかりである。今迄ピカッと光つて、すぐ消へてゐた雷光も、だん〳〵ひどくなつた。「アラッ〳〵」皆はびつくりしたやうに叫んだ。それもそのはづ、ひどい電光は大分長く續いた。そして前の庭に大手をひろけてゐるあんづの木も塀越しに向ひの倉までもはつきり見えたそれは青い薄物を目にあてて見たやうな色であつた。僅かの間闇ではあるけれど、ぢつと目をみはつてゐると、あんづの葉の重なりの厚い所と薄い所とさへ見分ける事が出來た。今度光つたら、向ひの倉ばかし見ようと思つて、私はぢつと次の光を待つた。大分間を置いてまた光つた向ひの倉の白壁が落ちて、赤い壁の出てゐるの迄見る事が出來た。その次に光る光で庭の木や石を青い世界の中に見た。靜かな〳〵青い世界である。

いつの間に入つたのか妹と弟がかやの中で面白さうに笑つてゐる。

私の學校（賞）

茨城縣眞壁郡若柳校尋六　角田　三枝

私の家校は藁屋根でも小さくても中はよいのです。いくらほかの學校が、私の學校をわるく言つても、童謠で日本國中の學校にしられてゐますからあんしんです。私はほ　の學校へ行かないで、いつまでも藁屋根の學校にゐたのがよつほどよいのです。それも、もう少しで、ほかの學校にかよはなくてはならなくなります先生に土曜日にようくはなされた時私は

なんでこんなにいくじないんだと一人でかんがいて泣いてしまひました。ほんたうに私は、若柳の學校にゐたのがよいのです。なにつかの葉がちれて、卒業のことをかんがへると、なんとなく泣きたくなつて、心ほそくなつてきます。

先生と生徒がなかよい若柳の學校をでて、ほかの學校へいくのかと思ふと、死にたくなります。どうしても私は、若柳にゐたいんです。先生とまいにち日をくらして、ほかの學校にかよひたくありません。私は死んでも若柳の學校はわすれません。いくら藁屋根でもよいのです。私藁屋根でもよいとおもひます。

稔　さんん（賞）　大連市　大山通　太田仁　清

盲者の群（賞）

大阪市西區九條第一校尋六　藤原　義春

「さあ引けよ、　二三」盲啞學校の畫、盲者達の綱引が開始せられた。「よいしよい、よいしよい。」どちらも負けず劣らず見えぬ目に無暗矢たらに引張る。と片方の一人が巧に後ずさりして綱の端を手さぐりに後の柱にくゝりつけた。味方も知らない。敵も知らない。本人が微笑んでゐる。次第に柱にくゝりつけた方が負け始めた。綱が全く伸びてしまふと後はいくら引張つても負けない。敵は全く疲れてしまふ。その間に

草

新潟縣中頸城郡名香山村妙高校尋六　川久保ミツヱ

草のはつばが
かれちやつた
冬がちかづいたから
枯れちやつた
枝だけ風に吹かれてる。

評、何の草でせうか、すゐぶん淋しさうです。（牧水）

冬

新潟縣中頸城郡名香山村妙高校尋六　小島　春藏

いなや冬も　近づいた
ふぶきのふく日も　近づいた
雪のふる日も　近づいた。

評、ほんとにいやな冬がくる。（牧水）

ねむつてる

和歌山縣東牟婁郡明神校尋四　坂本　利孝

ばうやはおまんま　だべてねた
赤い小さななかやの中で
おまんまおいて　ねむつてる
しろいおかほに手をあてて
おまんまおいて　ねむつてる

評、やさしいお姉さんの眼ですね。（牧水）

田原川

和歌山縣東牟婁郡田原校尋六　森栗　つま

田原川は
いつも朝日をうけてゐる
ほんとに景色は
うつくしい
川の中をながめてゐたら
鮎が一ぴき
およいでた。

評、一疋の鮎が輝いてゐます。（牧水）

つめ

新潟縣中頸城郡名香山村妙高校尋六　中島フジノ

私のつめは　赤いつめ
きゆつとおしたら　白くなつて
またはなしたら　赤くなつた

片方がさつと引いて喊聲をあげる。敵は氣付いたらしい。「こら卑怯やぞ誰かくくつたぞ」「誰もくくれへんぞ、誰もくくれへんな」味方も知らぬが佛だ。皆異口同音に「知らん知らん。」くくつた盲者はにや〳〵笑つてゐる。

「いや確かにくくつてたやりなほしや」太平樂なもの。味方も知らない。「今度くくつたら拳骨やぞい」再び盲者間に綱引が開始された。

犬ころ

北道夕張郡字沼ノ澤市街地　圓谷　清（十一歳）

庭のすみで先程からちやら〳〵とすずの音が聞える。しやうぢを明けて見ると小さな犬ころが二匹、上になり下になりしてじやれあつてゐる。あまりかはいらしいので僕はしばらくそれを見てゐると其の中に僕の見てゐるのに氣がついたと見えてじやれ合ふのを止めて尾をふりながらちよこ〳〵やつて來た。僕が庭へ下りてかはる〴〵頭をなでてやると喜んで僕の手にとびついてべろ〳〵となめる。僕が、えんがはへ机を持ち出しておさらひをはじめると、二匹ともくつぬぎに手をついてぎようぎよく僕のすることを見てゐる。

寒かつた朝

山梨縣北都留郡廣里東校高二　藤本　光雄

朝起きた。幾月ぶりだかわからぬが、體がぞうとするやうに寒い。「お早うございます。」隣のおばさんが、さう云つてねぎを持つて來てくれた。母「どうも有がたうございます。まつたく今朝はひさしぶりで寒いね—」をばさん「まつたくね—寒くなるのがわかるやうだね—」母「そうですよ」をばさん「もう私なんか綿入ですよ。」母「私なんか單衣一枚では寒いから、このとほり冬袢纏ですよ。」をばさん「それでは御免なすつて」母「まあ良いぢやあないかね。お茶でも一杯」をばさん「どういたしまして毎日お茶ばかり」母「私だつて毎日」此時私は着物を着た。「今日は寒いからしやつでも着ないで」私「何今日はお天氣であつくなるから。」といつて著なかつた。この時はとなりのおばさんはもうゐなかつた。寒い風がまた吹いてきた。

こじきの話

高田市岡島校尋四　清水　ハツ

此の間あいのかぜへぇんそくに行きました。そしてかへりに、寺町を通つて來ると、或寺の前に三人のこじきが、小さなござの上にすわつてゐました。三人となでもくらです。二人はしやみせんをもつてゐましたが、あとの一人はもつてゐませんでした。三人とも小さな箱を前においてその中へお金を入れてもらつてゐるのです。私はその時お金を五厘もつてゐましたので、それを上げやうと思ひましたがたりません。いくら目くらでも、耳はきこえます。私は、しばらく立ちどまつてゐました。すると三年や五年の生徒が、ぞろ〳〵足音を立てゝ來ましたので目くらはしやみせんをもつてひき始めましたきつとおまゐりする人が來たと思つたのでせう。私はなほ〳〵かはいさうになつて來ました。私は、おかねがたりないのでしかたなしに井上さんとこのことを話し合ひながらかへりました。

遊び

千葉縣東金校尋六　村井初枝

私のつめは　赤いつめ
評、ほんとに可愛いおつめさん。（牧水）

指の爪

香川縣木田郡
水田校高二　秋山ミツエ

ちよきん〳〵
三日月形に切つて行く
お風呂上りの指の爪
そつとおてゝに並べた

すずめ

千葉縣山武郡
東金校等三　鈴木ふみ子

すゞめのあしは
小さいなあ
つめが出てて
あぶないなあ

かにとかへる

愛知縣海部郡十四
山村西部校等六　安井實

かへるが
かにの
穴の中へはひつていつた

星

長野縣下伊那
郡鼎校等六　鈴木信雄

おそろしい
風が吹く
星がみんな
吹きおとされさうだ。

がん

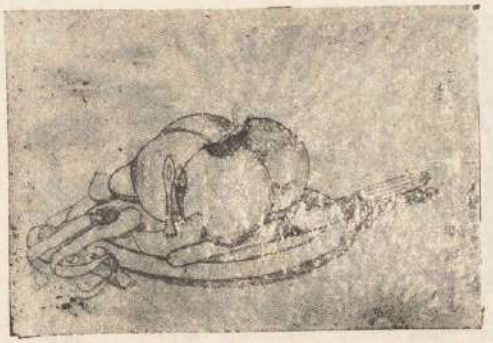
神戸市小野柄
小學校等四　加藤武夫

がんよ〳〵羽が大きいから
ばたばたときこえる
僕は上をみるとがんだ
がんよ〳〵
もつととべ〳〵

秋

和・山縣東牟婁
郡田原校等六　山本清

向ふの方から
人が二三人
稻を持つてきた



柿　日本縣區北島町　橋爪護吉

妹

梅田龍子

妹はする分お行儀が悪うございます。先づ第一が「ごはんを食べる時にひぢをついて食べる事」です。第二には「おこると障子をやぶいたり戸をけつたりする事」です。かういふ風にまだ〳〵たくさんくせがあります。私は妹と、お兄様よりも多くけんくわをします。

妹が、弟と仲よく遊んでゐて、私が弟に「おいで」といつてもこない時は、妹がにくらしくつて〳〵たまりません。そして一日の中にけんくわをしない日は一月に一度か二度位ゐなものです。それでもきのふは二人でゑをかいて遊びました。そして妹と繪の本をつくりました。

又、妹は本が大すきでひまさへあれば本をよんでゐます。時々妹がゐないと思つてさがすと、おうせつまの安樂いすにのつてゆられながら本をよんでゐましたので私が「たあちやん（妹の名）なぜこなん所で本をよんでゐるの」ときくと妹は「でも子供部屋は五月蠅から。こゝだとする分しづかよ。」といふ事もあります。妹は時々する分ひどくあばれる時があります。先に私が鼻をつくつてゐた時、どうしたはずみか妹はおこつて私の鼻をふみつけてしまひました。三度兄様が「何をするんだい。」とおつしやつて妹をおつかまへになつたら妹はにげてしまひました。そして砂利のある所から私たちになげつけますので、私はようち園の後へかくれました。妹は今度は、はだしでさんざんお庭を歩いた上、その足ですん〳〵家の中へはひつて平氣で遊んでゐます。私はさういふ時ぶちたくなりますがぶちません。それでもあんまりゆふ事をきかないとぶつ事もあります。私はよるねる時朝おきた時などよくけんくわをします私は妹はきらひでもあり、又すきでもあります。

顔　大阪市東區北島町　都外川悅子

新しい學校

埼玉縣南埼玉郡三
箇村塚玉校等六　關根しげる

おらほの學校は此の春から出來るとみんなが言つてたが、よういに出來ないでやうやく夏休みのなかば頃出來上りました。おれは家にゐて、その話を聞いた時おどり上つて喜びました。九月一日から新しい學校へ入つて勉強が出來るんだ。と東京から來た兄さんや姉さんにまでお話してひとり喜んでゐました。そのうちに夏休みも終つて九月一日には學校へ來ました。そして新しい學校にはすぐ見ました。その時おれは喜しくてたまりませんでした。だつて學校は東京の學校の樣に二カイ造りでした。そして机もこしかけもみんな東京の學校のと同じでした。そしておれ

こちらの方で
群雀が
一度にぱつと
飛び立つた。

月夜のばん

香川縣大川郡
引田校尋四　永峯ミツエ

わたしはかどへでて見ると
お月さんちやうど山の上
山をてらしてきれいだな
よこの方ではきれいなこゑが
ちんちろちんとないてゐる
うらの方ではいゝこゑで
なにかのこゑがきこえてる
わたしもほんとにいゝきもち

ちつた花

長野縣更級郡
八幡校尋四　西澤せつ子

お庭のすみになもしれぬ
かはいゝ花が咲きました
あまりかはいゝ花なので
そつとしやせいをしておいた
そしたら花はそのあした
ほろり〳〵とちり　した

お日さま

東京府下東中
野一六七五　長尾港太郎

ほくがそとを
あるいてゐると
お日さまがてつてる
あつくてあつくてたまらない
ほくが日かげにはひると
すぐおつかける。

栗

仙臺市大町
五丁目尋三　木村庸太郎

とげ栗　小栗
山の小みちさ
一ッおちてた

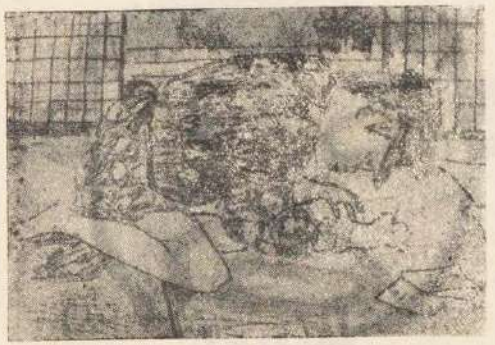
雨

東京府下東中
野一六七五　長尾その子

雨のふる日に
外へ行つたら
かさに雨があたつて
はねかへつた

一雄君失名

香川縣水田
小學校高一　西田富己子



お日様が西の山にかくれて西の空が色どられてると、三四人の車引きが唄をうたつたり大きな聲を出して話をして歸つてきました。私は裏門でじつと人通りを見てゐました。すると後の方から門を開けるものがありました。私は後をふりむいて見ると、お母様がざると鍬を持つてくるのでした。私は『お母様どこへ行くのですか』と問ひました。お母様は『裏へ』とおつしやつたまゝ門をくぐつて行きました。私もついて行きかけました。するとお母様は『お前どこへ行くの』と言ひましたから私は『お母様の方へ』と言つて後から行きました。

するとお母様は芋地のふちでとまりました。

そしてお母様は大きくほこつてゐるのを掘つて、『今年はお芋が小さいな』とおつしやつて堀の方へと行きました。

私もいつてお母様といつしよに洗ひました。

水には足がうつつてゐました。それが

秋の日

等の教室は二カイだから村の家がようく見えました。遠くの町も見えました。ほんたうにおらほの學校はよい學校だと思ひました。

水にゆられて細長くなつ水り短くなつたりしてきれいでした。

あわて者

山梨縣北都留郡
廣里東校高二　渡邊　夏子

みのる頃　長野縣小縣
郡豐川校　柳澤　とし

二三日前の事であつた。母が『お前はまだ通信表を學校へ持つて行かないだね。』と云つた。私は、はつと思つて『まあさうだつけか。』と急いでたんすを開けて見ると、たしかに通信表があつた。急いで用紙入れの中に入れて翌日授業料と一しよに先生に出した。教室へ歸つていたづらをして居ると友達が四五人で『夏ちやん何をほや〳〵して居るで。あんたは高等一年の通信表を出しつら、早く取りに行つといで。』と云つた。私は思はず『えゝ』とさけんだ。『まあさうけ。わしやいやだゝー。』『早く取りに行つて來りやあいゝだ。』とあんまり皆が云ふので、思ひ切つて行つて來ようと思つて職員室の入口まで來たが、入るがどうしてもいやだつた。

やつと入ると、先生はくつ〳〵お笑ひになつてゐた。

私は通信表をもらつて急いで廊下へ飛び出した。高等二年の通信表は先生の所にあつた。

私は、自分のあわて者に、あきれてしまつた。

通信

自由畫選評

山本鼎

△本月はどうしたのかすゐぶん皆不出來だ。入賞の奮でもいつもの入賞よりもずつと劣つて居ます。——とにかく寸評を加へるとしませう。

△橋爪謹吾君の『柿』、正直にはかいてあるが、元氣がない。見た物な、見た感じに現さうとする熱が足りない。

△六歳の都外川悅子さん、よく寫生が出來ました。

△柳澤とし子さんの『みのる頃』、圖取りは面白いが、描き方はいたづらにごちや〳〵して居ていけない。

△失名氏の『一雄君』はわるくはないが、あまり小さな紙に描いてあるので、縮がちゞこまつて居る

△大仁田清君の『稔さん』よく寫生してあります。もう少し濃く太くかけるお筆をお用ゐなさい。角心の三B位なれ。

△村井初枝さんの『遊び』面白く描けて居ます。

幼年詩選後に

若山牧水

△今度は倉持精一君のと中尾はま子さんのとを推薦にしておきました。倉持君のはいかにも簡單であつさりしてゐて、そしてその中にかまどの前にたゝずんだ無邪氣な少年の心持がよく出てゐるとおもひます。中尾さんのはたゞもう見たまゝを歌つたのだけれど、それを讀んでゆくと田舍の秋景色が手にとるやうに眼の前に見えて來ます。きれいな氣持のいい歌です

▽同じ學校からよこされた澤山の歌の中に佳いのがあると、自然その學校のばかりをとるやうになつて、ほかの人に氣の毒なやうな氣持がしますが、幾度も讀み返してみて矢張り佳いのから〳〵ととつてゆくよりほかなくなるのです。ほかの人たちもそれにまけぬ氣になつて、どし〳〵佳いのをよこして下さい。

綴方選評

選者

◇今月はいつも程すぐれた作がなかつた。でも高濱校の『島の夕』と『夕立の夜』といふ二つの作を得たのはうれしかつた。二つとも出しにくかつたのであるが、『島の夕』の方は長すぎるのと、少ししまりのない處があるので『夕立の夜』の方だけをとりました。

◇『夕立の夜』はしつかりとした行屬いた見方をしてゐるのが先づいゝ。ものを細やかに觀てゐる點が殊にすぐれてゐる。電光がキラキラと光つてゐる時の庭の景色をうつしたところが、きはだつてよかつたと思ふ。

◇『私の學校』はひどく無器用にボツ〳〵と書いてゐる處が面白い。

力がこもつてゐる。無器用なだけに力が。

力した方が、安全な行き方だと思ふ。

◇興谷清さんの『犬ころ』、短い中によく上手に書いてゐる。可愛いゝ二匹の犬ころが目に見えます。

◇藤本光雄さんの『寒かつた朝』——これもなか〳〵面白いところのある文です。何でもないやうな會話の中に寒い朝の有樣がよく書けてゐる。

なか〳〵面白い。巧妙です。

◇少年少女の自作童話懸賞大募集◇

「金の星」は左の規定に從ひ愛讀者の方々の自作童話の大募集をいたします。發表の曉は模範自作童話として廣く推薦いたします。奮つて御投稿下さい。選は編輯部員がこれに當ります。

□題材　御自由です。

□締切　大正十二年一月十五日

□枚數　二十行廿字詰原稿紙五枚まで。

□發表　四月號

（注意　原稿には住所、姓名、學校、學年（または年齢）をはつきり書いて下さい。）

一等一人　賞品　楠山正雄先生作「日本童話寶庫」一冊

二等二人　賞品　小鳥敏二郎先生作「新しい童話」一冊

つてゐるのだ。たゞ上手にすら〳〵と書いただけではこれ程の力が出ないと思ふ。これは餘談ですが、若柳校の栗野先生の面影がこの文から讀むとしのばれます。生徒と先生の間柄がうらやましい程に思はれます。

◇『盲者の群』は實に達者で氣がきいた文だ。しかし、かういふ筆法は氣がききすぎてゐるから、惡くすると惡達者になる恐れがあります。寧ろもう少し平凡に愚直に書く事に努

◇清水ハツ子さんの『こじきの話』——心持ちは十分に出てゐます。これでも少しあはれな乞食のすがたが出てゐたら、もう一層ひきたつたらうと思ひます

◇梅田さん兄妹の綴方を讀みました。しかし、綴方の方は童話ほどに得意でありませんね。器用に上手に書け過ぎて、却つて自分の氣持を現す綴方には不得意と見えます。もつと思ふさま自分の感じた事を書くやうにして

新しく出た本

◆**童話及び兒童の研究**（文學博士松村武雄氏著）童話と兒童との研究書として我が國に出版されたものとしては最も權威ある本です。世界一通じてこれだけの深い研究書は少いとまで稱されてゐます。著者は童話教育が兒童を教育する上に最も必要なものゝ一つであゐる事を論じて、これを民族的、文藝的、心理的、文化學的にとあらゆる方面から研究し盡してゐます。教育者は勿論のこと童話に興味を持つ者の是非讀んで置かなければならない本です。（菊版五八三頁　定價金四圓五十錢、東京京橋區銀座二ノ一五　培風館發行、振替東京三二六一七）

◆**狼少年**（小鳥敏二郎、久米正雄兩先生共著）春陽堂發行「新しい童話」の本の第八編です。內容が斬新で面白いのと安價でしかも美しい本であるのとで飛ぶやうに賣れてゐる本です。例の通り小鳥敏二郎先生が主として努力してたられるもので、キップリングの世界的に有名な「狼少年」と「虎！虎！」の二篇の長篇物語りを例の名筆で譯されたものです。（四六版一九八頁、定價八拾五錢、東京日本橋通り四丁目春陽堂發行、振替東京一一六七）

◆**國民童話**（野村八良氏著）日本の國民童話のわかり易い研究書として最も適當な本です。古くから傳へられてゐる神話傳說童話の中から有名なものを十五選んで、それをいろいろな方面から說きあかしてあります。

大層面白く讀めて、しかも深い知識が得られて結構な本です。近來かういふ本が出るので童話の研究者には非常に便利です。（菊判一三四頁、定價八十錢、東京神田今川小路三ノ九國史講習會發行　振替東京一六八五）

◆**兒童の手工**（藤岡銀三郎氏著）兒童の手工教育についての立派な研究書です。序文を山本鼎先生が書いて之を廣く世間に紹介されてゐられます。圖畫教育も非常に必要なことですが、小學校あたりではそれよりも一層手工教育に重きを置かなければならない筈です。兒童は圖畫よりも寧ろ圖畫と彫刻との合さつた手工の方を好みます。手工教育は今後大いに研究されなければならない筈です。少くとも小學校の兒童を教へてゐられる方々は是非一本を備へるべきです。（四六判二四一頁　定價二圓三十錢、東京京橋銀座尾張町アルス發行　振替東京二四八八八）

◆**世界童謠選集**（文學士安田祿花氏譯）世界の有名な詩人の手に作られた童謠八十五篇を集めて英文も卷末に添へてあります。あらゆる有名な詩人の代表作は大抵集られてある程で、非常な努力の結果になつたものです。譯文もなか〳〵によく、この本一冊によりて世界の有名な童謠を知ることの出來る便利な本ですから、童謠研究者の御一讀をすゝめます。（四六判箱入三一一頁、定價一圓八十錢、東京本郷駒込林町一三六法館發行振替東京五九三三五）

▲**童話掲載外佳作**　◎第一部　△不思議な塔（坂井羊子）△壺と夜の出來た話（酒

下さい。

◇奈良校からもなか〳〵面白い作が來てゐましたが、もう一と息といふやうな氣がしました。三つの作の中では「秋晴れの朝」が最もすぐれてゐました。太陽の昇る時の有樣を書いた處が光つてゐます。（齋藤生）

童話の選後

齋藤佐次郎

△近頃はひどく惡い作がなくなつて、全體の標準が高まり、大體に出來栄えのそろつたものばかり集つて來るやうになつたのは非常に喜ばしい事です。以前は數ばかり澤山あつてもいゝ作は極く僅かでした。投稿家が何れも進歩されたのです。嬉話界の爲めに喜ばしいことだと思ひます。

△今月はなか〳〵佳作がありました。推薦していゝだけの價値ある作が少くとも二三はあると思ひました。例によつて、そのうちの特に感興を覺えた作について所感を述べますと、先づ坂井羊子さんの「不思議な塔」の、題材の變つた面白さと、表現の自由な點に注意をひかれました。一萬年後の社會を諷示したものです。それとしては短い行數に制限されて少し簡單すぎて、十分の面白味が出ないのが殘念ですが、筋を運ぶ上に大した無理もなくて、いろ〳〵考へさせる暗示が、子供に聞かせて十分面白いだけに書けたのは成功だとしなければなりません。

◇編輯室に於ける『金の星』誌編輯長 本居世生先生◇

▽酒井槿花さんの「晝と夜の出來た話」。アメリカ印度人あたりの傳說にありさうな話ですが、全部獨創とすれば非常に結構な作です。兎に角面白く讀ませます。

▽牧野忠夫さんの「栗の實」は藝術味をかなりに持つたもので上品な作で目をひきました。話の構想もなかなかよく行つてゐました。

▽三谷公臣さんの「賢吉と鈍吉」は子供たちに是非讀ませたい新しい意味の教訓談です。いゝものだと思ひますが、作者の理智が先きに目について情味が足りない感を起させます。これで、も少し作にふくよかな丸味が出たらと思ひます。

▽寺島貞夫郎さんの「御褒美の半分わけ」も同樣に大層面白いお話で結構ですが、同じ缺點を持つてゐます。

▽澤田德太郎さんの「まゝ屋のまめ達」には奚ひな感ぜさせられます。あまり品のいゝ話とはいへないでせうが、面白い味を持つたものです。

▽この外、まだなか〳〵面白い作がありましたが、一々述べられませんから佳作欄に題名だけを掲げます。例によつて土橋さんの作は光つてゐましたが、この事についてはまたの機會に述べませう

◇本月は誌面の都合上推薦が出來ませんでしたから、次號の佳作と本月の佳作とを加へ、その中より選拔したものを次號の誌面で推薦します。

＝少年少女の自作童話評＝

▽今月も澤山集りました。なか〳〵面白いのがあるので選をしながら非常に元氣が出ました。佳作はずゐぶん澤山ありましたが、特にたものでないだけに、稚氣があつてなか〳〵面白いです。

▽小澤慈子さんはさすがにいつも面白いものをお書きになりますね。今度の「和子さんの夢」もあなた特有の妙味が出てゐますが、あなたの作としてはまづ普通の方で、上出來とは申せない方でせう。おしまひが夢に終つてゐるのは童話があんまり使ひ過ぎてゐる型ですから、何とか外に工夫があつたらと思ひました。さういへば、佐藤喜久代さんの「マリコサシ」も矢張りおしまひが夢だつたので、おやおやこれも夢かと思つて少しがつかりしました。

『金の星』誌友募集

『金の星』の誌友には、いろ〳〵の特典が御座います。今や月々非常な勢で增加いたして居ります。誌友規則は金の星社宛にお申込み下さいませば、すぐお送りいたします。どうぞ奮つておはひり下さいませ。

井槿花）△栗の實（牧野忠之）△御褒美の半分わけ（寺島貞夫郎）△お辨當（土橋力）△まめやのまめ達（澤田德太郎）△水の旅なした彌助の話（山口健三）△お人形達の計畫（菊池佩）△シヤボン玉（湊守一）△お月樣へおたづれ（熊江清藏）△たまの死（吉田敬造）△少年と山雀（吉川良男）△サンタクロースの來る日（松原秋花）△水色の花（石塚憲一郎）△マドロスと人魚（西谷海棠）△人形のおくり物（吉岡伊三郎）△星の死（持田清志）△蟻の兄弟（失名）◎第二部　△須美ちゃん（松本せい）△金の栗（中澤末雄）△和子さんの夢（小澤慈子）△マリ子サン（佐藤喜久代）△ねざうの惡い妹（梅田三良）△太郎さんと狐（水野戒三）△かへるになつた息子（米岡富美子）△幸福（中澤末雄）△光ちゃん（黑澤明）△青い小人（矢部實）△祖父なしたひて（白井祥一郎）

▲童謠掲載外佳作（第一部）

△雲雀の子（小島純）△山茶花（吉川こういち）△意地惡鴉（伊藤湿子）△風が吹く（蘆原敏信）△狐の火（鹿山映二郎）△桐の木（牧野眞砂子）△雀（青柳巨）△子雀と僕（中谷康郎）△つばめ（堤陽花）△柿（北田初子）△雀（小池孝技）△編笠（寺島貞夫郎）△冬の案山子（作間博）△みかん畑（宮原しげる）△夜（秋山英）△水たまり（梅澤次郎）△キューピさん（安田惠津仁）△一本杉（福田春夫）△田舍道（中村ゆたか）△横丁の犬（小野吉太郎）△こうし（永橋卓介）△秋の雨（高野盛義）△夕燒小燒（伊藤登良男）△狐の嫁入り（石川道子）△ルバシカのおぢさん（近松清）△霜の朝（山田ふみ子）

（第二部）△雨（岡本一男）△かぢやのおぢさん（井口喜作）△ながれるあぜ（加藤二三子）△白無果花（秋葉鎌子）△とりや（小田晩）△月と星（平林武雄）△スヽキ（横山きみ）△大鳳（川村稠）△かへる（伊藤雀）△すゝき（丸菊恒子）△狐の嫁入（宇野孝三郎）△星樣（一宮ヒサエ）△井戸（浦野コマエ）△犬（笠松一男）△草の葉（宮本シマノ）△尺取虫（松井秋雨）△合歡の花（太田白陽）△コンコン叢（杉山たつを）△もず（仙波しげる）△蜻の旅（旭光松）△お空を廻る（皆川雄二）△秋蛙（西塚文雄）△うさぎ（平河いさ夢）△虫（小田信行）

▲自由畫掲載外佳作

△栗原先生（齋藤省三）△濱の家（小竹俊彥）△内のミシン（大瀨千枝子）△つるしたざくろ（橋爪謙吾）△栗原先生（池田武次）△川（黑田猛）△運動場の一部（城井安子）△門（サクマトキ子）△一本松（峯正一）△ドビンとユノミ（藤本ユキエ）△花（平田ユハノ）△姉と妹（坂井羊子）△椿の花（國島百合子）△松井先生（坂本利孝）△つゝる（山田明）△侃ちゃん（黑部妙子）△姉さん（日淺文代）△伊藤先生（篠原園）△兄さん（南須原靜也）△野原（大西ハルミ）△露盞の眺め（塚田富貴）△私（市東千代子）△私のバウシ（小出純代）△私の家（大西ヨシノ）△野外（重見辰馬）△ま、（服部友吉）△鶏（吉田隆一）△家（富正）△いれ（米良昌子）△柿（山中蕉）△門（平林武雄）△屋根（黑澤哲郎）△私の家（大石フジ子）△いちりんの花（大西ヨシノ）△吉

た。しかし、最初の方でマリ子さんが蜂になつて行くあたりは面白く行つてゐます。
▽梅川三良さんと水野戒三さんは共に今度はあまり上出來でありませんでした。もつと勉强したのを送つて下さい。
▽それで、本月はどれか一篇を入選にきめて出すつもりでしたが、新年號のために本文にあきがありませんでしたから、以上の諸作の中から三篇、「須美ちやん」「金の果」「和子さんの夢」を入選候補として擧げて、次號の作の中から選んだ佳作と合せて、その中から倘選出していよいよ誌上に揭載することにいたします。

■社名が變りました■

愛讀者の皆樣方が御存知の通りの次第で『金の星』は以前の『金の船』の改題であることを、皆樣の御記憶にはつきりと、留めていたゞきたい爲めに、社名を、『金の船社』といたしてをりましたが、たゞ今となりますと、却つて、『金の星』を金の船社が發行してをるといふことが、やゝこしくて、呼びにくいやうになつて參りましたので、新年號より『金の星社』と改めることになりました。しかし、振替番號等は是迄と少しも變りが御座いません。右の次第をどうぞ御承知置き下さいませ。

編輯室より

△皆樣！いよいよ新年號が出ました新年お目出度うございます。此の大正十二年は『金の星』の大活躍の年にしたいと思つてをります。同人一同その事を思つて大元氣でございます。
▽大活躍！と口でばかりでいつてゐつても駄目ですから、事實に新年號早々大發展をいたします。
先づ一月より誌友の方々を大に優遇するために、誌友の方だけの投稿雜誌を發行いたします。誌友の資格のある方なら自由に誌面が使へるのですから、きつと大歡迎を受けるに相違ありません。
△もう雜誌の題名もきまりました。「小馬」といふ可愛いゝ名がつきました。創刊號は四六判のそれはそれは美しいものです。誌友の方に限り毎號『金の星』と一しよにお手許へお送りいたします。
△『小馬』の創作募集は二月號の『金の星』の誌上で大々的にやりますが、この雜誌は前にも述べました通り『金の星』の誌友の方だけで作る樂しい集りの雜誌ですから、この際最寄誌友にお入り下さつて、投稿の資格を皆さんがお持ち下さるやうにお願ひいたします。會員が多くなればなるだけ、雜誌の頁數も增して行つて、ますます立派な誇りあるものにしたいと思つてをります。
△兎に角次號でくわしい規定を發表して、大募集をいたします。
△それから今後は毎月懸賞募集を行ひます。先づ第一回に少年少女の自作童話の募集をいたしましたが、引續いて童謠童話綴方幼年詩自由畫等を大々的に募集して、それを廣く世間に發表します。
△まだこゝだけではありません。二月號からはまた沖野先生のそれはそれは面白い長篇物語『鈍栗山』を揭載します 以前に大喝采を受けた「山六爺さん」のやうなヒョウキンなものです。きつとまたやんやと迎へられませう。一年間つゞく大物です。
△出版部はお蔭樣と大成功です 今後日本の少年少女物の出版の爲めに大活躍をいたすために今切りと準備してをります。
△野口先生の大苦心の『童謠十講』も近日中に出版になります。童謠を作る人達にはこの上ない良い本ですから、大歡迎を受けるに相違ありません。もう噂を聞かれた方が、三十五名も出版部へ御申込みになりましたので、その餘りの評判に驚いてをる有樣です。此の外續々面白い本が出版になります。
△では皆さん左樣なら！ どうか今年もお元氣で幸福にお暮しなさるやうに！

講演部の報告

此の一ケ月間は各地から非常に澤山の御招聘を受けました。しかし、到底一々お引受けする事が出來ませんでしたが、事情のゆるす限り先生方にお繰合せを願つて各地へお出でを願ひました。沖野先生は茨城縣竹原校を手はじめに、赤阪小學校、本鄕中央會堂、明治學院、信州北佐久郡御牧小學校等の各地で童話の講演をなさいまして、到る處非常な大歡迎を受けました。
また野口雨情先生は東北地方の各地で童謠の講演を爲さつた外に尚引續き關西地方を約一ケ月にわたつて講演旅行を爲さつて、童謠普及の爲めに一大活動を爲さいました。
誌上に一々精しい報告を揭げる筈でありましたが紙面の都合上省略いたしました。何れ機を見て御報告いたします。

雄さん（山中寅松）△キシヤ（サイトウシゲタ）△花ちやん（鈴木輝子）△はな（松裏久子）△僕の先生（井口喜作）△校庭の外（塚田富貴）△家（長谷川とき）△机の上（川村稠）△ハイカラシンシ（井上萬壽太郎）△おぢいさん（鈴木準一）△犬と猫（島田文子）△我が家（工藤保作）△私の下駄（髙橋節子）

▲幼年詩揭載外佳作

△いうびんさん（武田シズヱ）△けいと（綱本良吉）△くり（川久保存）△ゆづ（淺川富男）△地震ぐも（有富勇美）△日ぐれ（加藤政數）△くつは虫（谷口孝吉）△蟻（井木好三）△ひろ野原（的場スマ）△初雪（井田一郎）△海（土井眞澄）△汽車の窓（關根しげる）△ろすゐ（伊藤威）△たんぽ（高宮きみ江）△雨（橋くぎ）△水車（大塚繁）△稲かり（村口ふさゑ）△向方（藤原よしはる）△おみこしさん（森下たつの）△雲（中本みつゑ）△なまづ（倉持多兵衞）△朝日（大瀧かく）△ほたる（藤本よしの）△もみぢ（佐々木房子）△寒さ（中筋憲一）△あり（廣江鉦）△川の水（生井文治）△靜けさ（平林武雄）

▲綴方揭載外佳作

△畠の夕（松本せい）△兄さんへのお手紙（渡邊とく子）△お母さん（鈴木信雄）△鉛筆（倉持はな）△蟻（梅田三良）△君子（川田澄子）△ハシラノ豫防注射（市口フサ）△ひかうき（鈴木仁）△今日の若葉會（中西直三）△僕の弟（坪谷嘉一）△秋晴れの朝（中尾健一）△なはとび（小宮時子）△近所の子供（谷内靜江）△夏休みが來たら（栗原喜久代）△先生がゐない間（齋藤廷雄）△母ちやん（梨野ケイ）△口のらと桑のみ取（吉田みき）△くまのさん祭（吉川タミ）△稲刈りの朝（赤萩和夫）△わろ夜（粟野直一）△しんぞ（荒井いく）△一匹の蛙（粟野久一）△秋の朝（佐藤喜久代）△ヤネヤサン（宮崎カナル）△理科のこと（丸茂さよ子）△妹（糸井一郎）△ざんなんちぎり（加藤政數）△へしとり（伊藤政一）△おにごつこ（鈴木秀男）△十五夜の晩（相馬英雄）△十五夜（梅本竹子）△仲のよかつた友（日淺文代）△秋の夜（大内ハナヱ）△うれしい大演習（松本シズヱ）△今朝のお話（佐藤正孝）△箱根温泉の思ひ出（市口金太郎）△くつは虫（前田俊一）△えきしや（永榮糸子）△内の時計（前田ケミヱ）△内の新聞（串備仁造）△赤犬と日の丸の旗（佐藤常太郎）△柿の實の熟す頃（藤松勝光）△私ははかまです（米岡富美子）△秋の野山（佐藤勇）△十五夜（酒田義雄）△僕が大發明家であつたなら（黑澤哲郎）△空を仰いで（上田定藏）△初秋の夕（今村シナヱ）△釣（橋爪謹吾）△秋（高桑豐）△よその人とお父さん（鹿山時）

▲金の星誌友

○朝鮮 谷口喜與樣○茨城 蛯原孫三郎樣○山梨 小淵澤小學校樣○廣島 小山弘樣 群馬 横山まつ子樣○東京 保科きみ子樣○東京 池田一郎樣○長野 久保田正文樣○茨城 大越親樣 ○東京 山下愛子樣○東京 大島和雄樣○大阪 桝井元治郎樣○東京 清水正雄樣○千葉 湯淺與志禱樣○山形 望月三次樣○北海道 宮原茂助樣○廣島 本城五郎樣○福岡 山田正人樣○東京 橋本とし子樣○埼玉 金山長三樣○青森 佐野まさる樣○茨城 細川さよ子樣○茨城 小林富三樣○茨城 三村慶太郎樣○（以下次號）

讀者よだ

▲記者樣、山の中の私の村では、昨日はもう朝から雪が降り出しました。そして一日中降つて居ました。三寸も積つたでせう。私は今火鑪にあたつて「金の星」を見て居ります。私は限りない嬉しさをかくし得ず、時々獨り頬笑みながら樂しい色々のお話や、皆樣方の消息に懷しく接してゐます。雪が溶けて落ちるのが、明るく目の差した隙子にまるで簾のやうにうつて居ります。では皆樣お身體をお大事に。（山梨の山の村にて、土橋　力）

▲記者先生、御健全で結構ですね。「金の星」が益〻〻盛んになつて行きますので、熊本の果てから蔭ながら喜んで居ります。紙の惡い、記事のよくない、すべて汚ならしい感じぼかりする「金の船」が、今度からよくすると云ふので、本屋へ行つて見ますと、相變らずどころか益々面白くもない、非藝術極まる慰かな記事を自慢さうに出して居るのを見ると、これに比べて、永い歴史を持つて今は押しも押されもしない高い所まで登つた「金の星」がどれだけ氣高いかがわかります。新たなる年を迎へると共に更に〻〻に御社の御活動を期待して止みません。（熊本　田中正一）

▲記者さま、私はお父さまと、おやくそくをしました。『もしお前が、また賞品をいたやたなら、お前のすきなものを買つてやらう。』と申されました。ですから又（賞）にしてください。そしたらお禮にお父さまに買つていただいたものを少し上げませうか。萬十の皮なさし上げませうか。キャラメルのから位でいゝでせう。どれがよろしいですか。（長野縣飯田町　山田明）

△どれも結構ですが、とり分け萬十の皮。大好きですからどつさり送つて下さい。（記者）

▲賞金正に受取りました。わざ〻〻お送り下すつた御社の御厚意に深く感謝いたして居ります。貯金しようか、何かよい紀念品を求めやうかと、今まよつて居ます。先づは取敢へず御禮だけ申し上げます。（大阪　都外川淳）

▲私は學校の圖書室で、ふとしたときは美しい雑誌のあるのを見付けました。表紙を見ますと「金の星」と書いてありました。なかはみんな上品な面白いお話ばかりなのでおどろきました。それと共にこんな美しい雑誌のあつたことを知らずに居たのを殘念がりました。（滋賀　X少年）

▲久しく御無沙汰に打過ぎました。記者樣にはお變りもございませんか。もう秋も末になりました。コスモスの花も一輪殘らず散つてしまつて、すき透つた青空に桐の枯葉が風に搖られてかさこそと淋しい音に暮れ初むる頃となりました。記者樣は今頃何あそばしてゐられるでせう。私の下手な童謡も一緒にお送りいたしましたから野口先生の御許までどうぞ差上げて下さいませ。（大森にて　佳子）

▲先生、私はお友だちの秋山さんを、一しやうけんめいすゝめて、とう〻〻「金の星」のアイドクシヤにしました。そして、まへよりももつと〻〻仲よしになりました。（麹町區　上六校　城井安子）

▲「おてんとさんの唄」のことあの樣に叮重に御紹介下さいまして誠に有難いことです。厚く御禮申し上ます。お蔭樣で「おてんとさんの唄」が全國に擴まるわけです。ばや今日まで澤山の申し込みです。たまらなくうれしいことです。（中略）沖野先生の「赤い猫」及「金の星童謡曲譜集」など當市へはまだ參つて居りませんが如何したものでせう。私は直接御社出版部へ注文いたしました。早く仙臺の本屋に「赤い猫」や本居先生の「金の星童謡曲譜集」や野口先生の「童謡十講」が見たいものです。十二月號の「柱くゞりは」近來にない素的なものですね。謡のリズムと云ひ何と云ひ、野口先生を惜いてはとても他のかけ出し作家などにはみられない本當の子供の世界の藝術品だと思ひます。それに本居先生の作曲も歌詞との間に寸分の隙もなくぴつたりと合つて居て、まつたく渾然、たゞうれしさにばかり導かれて行きます。若山先生の詩及幼年詩欄は近頃殊に光を增して來たことは、「金の星」の强みです何と云つても心から親しめる雑誌は「金の星」だけです。（仙臺市おてんとさん社　天江登美草）

▲私のつたない幼年詩がいがいにもすいせんになつてほんとうにうれしうございました。ありつぱな賞品をお送り下さいましてまことにありがたうございました。あつく御れい申し上げます。（大阪府谷川校　戸口克已）

▲齋藤先生を始め諸先生方お元氣ですか。本箱の「金の星」は金の船と合せて七寸位な高さになりました。時々引張り出しては、あの可愛い〻〻岡本先生の繪や野口先生の童謡を見るのが何よりのたのしみです。いつまでも〻〻美しく可愛らしい「金の星」のために御盡し下さる諸先生に幸あれと常に祈つて居ます。終りに妹もどうぞお仲間へ入てやつて下さい。芳子と申します。では皆樣ご氣嶽よろしく。（鳥取　伊谷きよ子）

▲隨分長い間ご無沙汰いたしましてすみませんでした。今日から又、どし〻〻投書いたしますから、どうぞおたのみいたします。近頃の「金の星」は大した勢ですね。（千駄ヶ谷にて　清水浩）

▲十一月號の童話沖野先生は近頃朝鮮かぶれになられたと見えて朝鮮童話が多い。「金の鈴瓶」は夢想的な文だが、最後に近い一條で鯉角が金の鈴瓶に乘つて昇天する處は、ドラマチックで讀んでゐても氣持が浮々する。小鳥先生は文壇でも定評のある人だけに、童話の作にも、不滿を感じる作は一として無い。「ねこの鳥」、以前の「蕗坊」皆傑作だ。鈴田史光先生、「日本詩人」誌上でアルプス詩篇を珍らしく思つて通讀したが童話にも多少詩人らしい空想と、質實な文章で面白く讀むことが出來た。藤澤先生の傳說も益々よくなり、「額朝と義經の對面」さては宮島、內藤、三宅、齋藤、諸先生の各自變つた童話等、總べて十一月號は飛躍に充ち〻〻た讀物であつたことを喜び、同時に、一九二三年度に於ける內容の目醒ましい進歩を切望する。（高橋精三）

▲うれしい時も淋しい時も
西に輝き　東にも
また　金の星、金の星、
ふるさとの　友も
眺めて居るだらう
あの、金の星、

（東京　一誌友）

お目出度うございます

岡本歸一
野口英吉
齋藤佐次郎
一月元旦　遠崎龍一
中野守
山脇代吾
島貫平作

▲美しい御本、なつかしい「金の星」それから岡本先生のやさしい童畫エハガキ、私はほんとうに嬉しくてたまりません。もう私はすつかり「金の星」の誌友の一人になれたんですね。嗚呼、今私の心は「金の星」の樣に光明と喜びでいつぱいです。私はどこまでもこの喜びで進みませう。時々お便り下さい。私も及ばずながら、これからたくさん投書をいたしませう。皆さんの健康を祈ります。（東京　大鳥かすな）

▲十二月の表紙は素敵にいゝですね。岡本先生の繪は大好きです。どうぞ永々續けて下さい。野口先生沖野先生、みな好きです。岡本先生の「青い鳥」はまだございますか。それから誌友の特典もお知らせ下さい。（岐阜市柴田美緒）

△「青い鳥」はまだ發行書店に少しはありませう。誌友については別欄へ詳しく出してありますから、ごらん下さい。（記者）

▲永い間、童謡を創作いたして參りましたものですが、も少し深く眞面目に童謡の研究に沒頭したいと思つて、童謡專門の參考書や研究書をいろ〻〻さがしてみましたが、これ程童謡が盛んであるにもかゝはらず、そうした著書が全然無いと云つてもよい位で、まだ一冊も手へ入らないのには驚いて居ります。何かお心當りでもございませんでせうか。お知らせ下さい。（茨城縣　一愛讀者）

△仰せの如く、童謡專門の眞面目な研究書は殘念乍らいまの日本には澤山は發行になつてなりません。小社もはやくから此事に氣付いて、野口先生を煩はし着々此種書物刊行の實際計畫を進めて參りましたところ大苦心の結果最近に至つて漸く野口先生が脫稿をみられましたから、十二月下旬頃か遲くも一月上旬には、金の星出版部より上梓される豫定になつて居ります。書名は「童謡十講」といたしました。この著書は全く野口先生が寢食を忘れられた程のものですから切に皆樣へお薦めしたい本です。（記者）

懸賞創作募集

◆少年少女の創作◆

自由畫……山本鼎先生選
幼年詩……若山牧水先生選
綴方……編輯部選

〔注意〕課題は何でもかまひません。諸君の日々見たり、感じたりしたことや諸君のすきなものを、諸君のすきなやうに寫なり、詩なり、文なりにしてかいてください。一人で何題出してもかまひませんが、姓名は、學校や學年（または住所と年齢）とともにおとさないやうにしてください。用紙は自由畫はなるべく畫用紙に、幼年詩や綴方はなるべく原稿用紙（または半紙）に書いてください。よく出來た方には、『金の星』特製の賞品を差上げます。**次號締切**は十二月廿八日（その以後は**次號**へ廻る）發表は二月號、宛名は東京市外田端三百五十一番地金の星社。

◆一般讀者の創作◆

童話……齋藤佐次郎先生選
童謡……野口雨情先生選

〔注意〕童話は二十字詰二百行以内、童謡は十五行以内、優秀な作品は「推薦」または「特選」として發表いたします。推薦の場合は童話には五圓、童謡には二圓づつ、**特選**の場合は童話には拾圓、童謡には五圓づつ賞金として呈します。但し少年少女の創作童話にして「**入選**」の場合は「金の星」賞を呈します。締切、發表、宛名は少年少女の創作と同じです。原稿には必ず住所姓名を記して下さい。原稿はお返しいたしません。

定價壹册　參拾錢　送料壹錢
三ケ月分三册（送料共）九拾錢
半年分六册（送料共）壹圓八拾錢
壹ケ年分十二册（送料共）參圓六十錢
但し四月號九月號は特別號で卅五錢新年號は四十錢ですから、御註文の節はこの分だけ必ず加へてお拂込み下さい

振替口座東京五九五九六番

〔注意〕▽御註文は必ず前金で御拂込み下さい
▽送金は振替が一番便利で御座います
▽切手代用は（壹錢切手）一割増しです
▽第何卷第何號よりと書いてください
▽住所姓名ははっきり書いてください

廣告料は御照會次第お答へ致します

大正十一年十二月六日印刷納本（毎月一回）
大正十二年一月一日發行（一日發行）

編輯兼發行人　東京市外田端三百五十一番地　齋藤佐次郎
印刷人　東京市小石川久堅町百八番地　大橋光吉
印刷所　東京市小石川久堅町百八番地　株式會社博文館印刷所
發行所　東京市外田端三百五十一番地　金の星社
振替口座東京五九五九六番
電話小石川五三八七番

少年少女の童話讀本

赤い猫

▼沖野岩三郎先生著

◆岡本歸一先生裝幀及挿畫

◇三五判函入顏美本◇
◇本文二百五十頁餘◇
◇口繪三色版外挿畫四頁◇
◇定價金壹圓（送料六錢）◇

金の星出版部がこの一度、少年少女の童話讀本の出版廣告を掲げました處、「金の星」愛讀者の方々をはじめ、各地の學校や圖書館、及び全國の多數の御家庭から驚くほど譯山の御申込みを受けました。係りの者が日々の御註文にまごついをる有樣でございます。これを以ても、此の書が如何に強い反響があつたかゞ知れました。

金の星出版部はこの記念すべき仕事の完成を期するために、引つづいて第二篇『**かくれ簑**』の印刷にも着手いたしました十月中旬第一篇『**赤い猫**』が發賣されると間もなく、この第二篇も發賣になります。

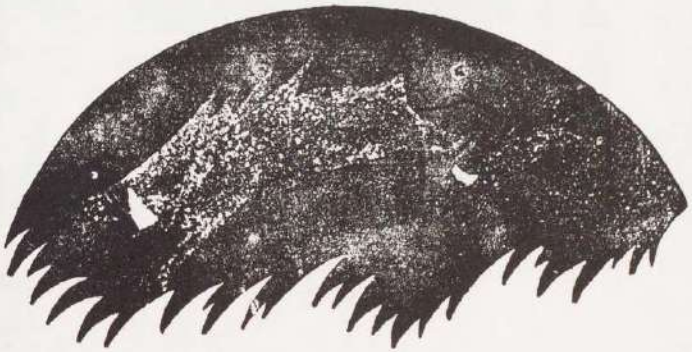
沖野先生のお作は何れも實に面白い〳〵ものばかりで、そして又實に立派な教訓を含んだものばかりであります。今度、新たに書かれた苦心の長篇傑作『十人の大將』も第一篇の中に掲げられてあります。

近刊　第二編

かくれ簑

東京下谷前　上野公園　金の星出版部　振替東京六七〇一番　電話谷六八二三番

大正十一年十二月十三日　大正十一年十二月六日印刷納本
（第三種郵便物認可）　大正十二年一月一日發行（毎月一回一日發行）



新年お目出度う
御座います……

昨年中は、一方ならぬお贔負を蒙りまして、誠に有り難く厚くお禮申し上げます、尚ほ本年も相變らず、お引立て下さいます様、偏にお願ひ申し上げます

◆一月の定休日◆一日、二日、三日、十日、廿五日

越

三越呉服店

◆◆東京市駿河町◆◆

東京　金の星社　發行